NAKAOJyō SITE
TSUKADA SITE

須玉町埋蔵文化財調査報告

第 2 集

中尾城遺跡

― 中世城址と平安時代後半の住居址 ―

塚田遺跡

― 中世土壙群と住居址 ―

県営圃場整備事業中尾３工区及び大倉４工区造成に伴う
山梨県北巨摩郡須玉町中尾城遺跡及び塚田遺跡調査報告書

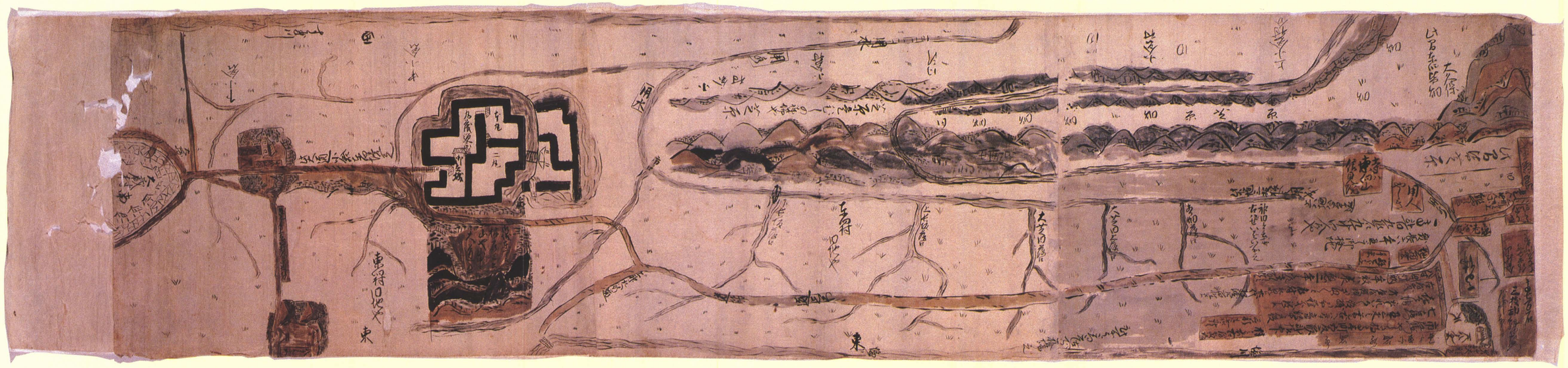
1984

須玉町教育委員会

須玉町埋蔵文化財調査報告書第1集「中尾城遺跡・塚田遺跡」正誤表

頁	行	誤	正
表紙	6	大倉	大蔵
背表紙		須玉町埋蔵文化財報告	須玉町埋蔵文化財調査報告
序文	6	土墨	土墨
〃	〃	壕	濠
〃	8	根小屋	根古屋
例言	16	波木井市朗氏	波木井市郎氏
〃 次頁	1	日向敏正	日向利公
目次	下から9	概容	概要
〃 次頁	17	〃	〃
図版目次	2	陶器類	陶磁器類
5	下から11	概容	概要
〃	8	丸茂種市氏蔵	丸茂種市氏所蔵
8	7	竈の西	竈の北
〃	〃	南壁の西	南壁の東
〃	13	2、土師質土器	2、3は土師質土器
9		第6図の方位が逆	
10	2	N-117° E	N-117°-E
〃	7	既ち	即ち
37	2	延び、	伸び、
〃	5	〃	〃
〃	1 7	計る。	測る。
43	8	トレンチを斜面が削平の	トレンチは斜面の削平が
〃	15	平垣地には二度田圃請	平坦地には二度、田普請
59	12	未報告	未報告
〃	13	鉄器のほかに、	鉄器のほかに、スラ
〃	下から12	が　がわれる。	が窺われる。
〃	下から7	昭和56年	昭和57年
〃	下から7	土師製作址	土師器製作址
〃	下から6	既ち、	即ち、
〃	〃	位置ずけられる　が出土	位置ずけられる坏が出土
〃	下から4	「青木北遺跡」	「東久保遺跡」
〃	下から3	る。原鉄の生産を～られ、	る。これらに供給された原鉄の産地は諏訪地方に求められる可能性が強い。
〃	下から3	鉄器生産～事例がまたれる。	(削除)
〃	2	集落の発見	①集落の発見
〃	2	官牧から私牧へ	②官牧から私牧へ
〃	〃	地方武士団の成立	③地方武士団の成立
〃	6	「駒索」の	④「駒牽」の
〃	10	「木ノ下、大坪遺跡」	⑤「木ノ下、大坪遺跡」
〃	12	鉄関係の重要な遺跡	⑥鉄関係の重要な遺跡
60	13	といっている、	といっている。
〃	21	抗争であった、	抗争であった。
61	12と21	掘	堀
62	1	木炭片木片	木炭片及び木片
〃	18	製炭抜術	製炭技術
〃	27	うっていけの材料	うってつけの材料
64	1	概容	概要
68	10	沿って施かれ、	沿って施され、
88	15	五輪塔と形と	五輪塔の形と
〃	最下行	というの一般的な見方で	というのが一般的な見方で
90	6	殺世を余儀なくされ、	殺生を余儀なくされ、
〃	14	第子玄桃和尚	弟子玄桃和尚
91	1	まとめ	(削除)
カラー図版	最下行	塚田遺跡出土陶器類	塚田遺跡出土陶磁器類
図版 6	最下行	丸茂種市氏蔵写真	丸茂種市氏所蔵写真
図版25	最下行	1.灰釉高台付坏	1.2.灰釉高台付坏
〃	〃	2.土師質土器皿	3.4.土師質土器皿
〃	〃	3.坏	5.6.坏
図版36	中央	(空欄)	1.出土遺物縄文時代前期

古　絵　図



序　　文

四季豊かな気候、風土に恵まれ永い歴史の跡を持つ須玉町は、中部山岳地帯の縄文文化から、華麗な貴族文化の平安時代を経て、武家政治の鎌倉そして南北朝から下剋上の戦国時代にいたる山梨県下の一大遺跡包蔵地であります。粗穀を蓄えた大小の倉を備えた荘園があり、近くに三官牧をひかえ、平安時代末期になって、この荘に甲斐源氏の礎を確立しました。中世になると土墨を築き壕をめぐらせた館跡や、居館とは別に要害の地に山城も築きました。平素の居館と家来の屋敷は山麓に設けられ、これを根小屋と呼びました。大蔵、小倉、二日市場、御所、馬場、根小屋等々の地名、字、小字名にいにしえびとのざわめきや馬のいななきが聞えてくるようです。中央道埋蔵文化財発掘調査に伴う大豆生田遺跡の報告書が昭和51年に発刊され、昭和57年には県土地開発公社峡北地域中核工業団地造成に伴う大小久保遺跡調査報告書第一集が刊行されたのは御承知の通りであります。この度は県営圃場整備事業に伴い、中尾遺跡と塚田遺跡が発掘調査されました。本調査によって、報告書に見られるように平安時代から鎌倉、戦国時代にかけての学術的、考古学的考察の上で貴重な資料を豊富に得ることが出来ました。この報告書が単に記録保存にとどまらず、文化財研究の貴重な一資料として役立つことを願ってやみません。文末ではありますが、両遺跡の調査にあたり、山梨県教育委員会文化課をはじめ、山梨県埋蔵文化財センター、県土地改良事務所の各位より多大のご指導ご協力をいただき、深甚なる謝意を表するものであります。

また、天候にも恵まれて順調な発掘調査が出来た上に整理、報告書作成に参加していただきました須玉町の皆々様に厚く御礼申上げます。

須玉町教育委員会

教育長　磯　村　　茂

例　　言

①・本報告書は、県営圃場整備事業に伴う〔中尾城遺跡〕及び、〔塚田遺跡〕の埋蔵文化財調査報告書である。〔中尾城〕は、遺跡名を〔中尾砦〕として書類上の統一記載を行っている。調査の結果、規模等などからみて〔中尾城〕の遺跡名がより適切と判断し本報告書では〔中尾城〕として統一している。

②・遺跡は、山梨県北巨摩郡須玉町小倉字中尾1,００８番地他〔中尾城〕。同須玉町大蔵字塚田1,７２８番地他〔塚田遺跡〕に所在する。

③・試掘は、昭和57年度に、塚田遺跡を実施し中尾城は周知の遺跡のため行なわなかった。両遺跡の本調査は、昭和58年度に実施し遺物整理、報告書作成も同年におこなった。

④・本報告の遺物実測は、津金豊子・河手寿子・井出照子・津金義尚・津金伸二・清水仁量。トレースは津金豊子。執筆は山路・深沢・津金義尚・津金伸二・清水仁量が分担し、編集は山路が行なった。文責は山路にある。

中尾城の基本土層は、山梨大学（地学研究室）教授西宮克彦氏より、木製品及び、炭化材の判別は、須玉町職員小尾勝氏（山梨生物同好会）の御教示を賜わった。また、石器の石材判別は井戸尻考古館の武藤雄六、小林公明、樋口誠司の各氏より、陶器類判別は愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏、仲野泰裕氏の御教示をえた。古絵図の読みは、県考古博物館の館長磯貝正義氏、副館長波木井市朗氏の御教示をえた。

⑤・本調査における図面・写真・出土遺物は須玉町教育委員会が保管している。

⑥・発掘調査組織

調査主体　　須玉町教育委員会
調査担当者　山路恭之助
調査員　　山秋　秦（中尾城）
調査補助員　深沢裕三

⑦・事務局

須玉町教育委員会
社会教育係

⑧・発掘調査参加者

〔考古学専攻生〕平野　修（日本大学）　前島秀張（別府大学）　五味信吾（国学院大学）
〔一般（順不同）〕信田虎吉　堀内高徳　坂本茂富　河手寿子　中村雪江　堀内としえ　堀込静子　松田かねよ　清水隆則　清水ふさ子　清水かし子　清水正喜　清水房子　清水三千代　輿水義人　輿水久子　斉藤ちとせ　白倉唯行　花輪元治　大森正一　白倉義一　大森ももよ　花輪てる子　赤岡せい子　宮沢さつき　宮沢いさを　津金孝治　中田権三　堤音作　大森林一　山内崇　大森もと子　大森孝次　赤岡やすよ　白倉栄子　花輪ふじ子　土屋つね子　土屋えみこ　小林美代子　山田かまよ　白倉増子　白倉米子　土屋八千代　大森おさむ　堤としこ　小林一枝　土屋いつ子　大森巳重子　大森たつ子　大森勝代

土屋八千代　花輪豊福　小林春美　〔学生〕　日向敏正　津金久司　津金伸二　清水仁量　川久保和夫　早川成紀　小沢智昭　薩摩栄二　中込幸男　（遺物整理参加者）　津金豊子　河手寿子　井出照子　津金義尚　津金伸二　清水仁量　早川よしえ　宮沢花江　内藤貞子　矢崎たけじ　中山春子　信田虎吉　堀内高徳　中村雪江　堀内としえ　堀込静子　松田かねよ

⑨・調査協力機関及び個人

小倉圃場整備委員会、大蔵圃場整備委員会、県土地改良事務所、県文化課、県埋蔵文化財センター、桂精機製作所、早野組、八起苑、町経済課　〔個人〕篠原祐雄　（故人）
佐野勝広（日本考古学協会員）、岡本範之（長坂町教育委員会）、丸茂種市

目　　次

巻頭図版

序文

例言

本文目次

Ⅰ　調査の実施と経過　1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境　1
Ⅲ　中尾城遺跡　5
（1）遺構と遺物　5
遺構の概容　5
1号住居址　6
2号住居址　8
1号掘立柱建物遺構　10
2号掘立柱建物遺構　15
3号掘立柱建物遺構　16
4号掘立柱建物遺構　21
5号掘立柱建物遺構　22
6号掘立柱建物遺構　27

７号掘立柱建物遺構　２８
８号掘立柱建物遺構　３３
９号掘立柱建物遺構　３４
堀　３７
トレンチ　４３
堀状遺構　４４
溝　４５
１号井戸・２号井戸　５０
３号井戸　５１
竪穴遺構（１～３）　５３
その他の遺物　５４
石臼　５４
（２）古絵図　５６
（３）まとめ　５９
Ⅳ　塚田遺跡　６３
（１）遺構　６４
遺構の概容　６４
１号住居址　６６
２号住居址　６８
竪穴及びピット群　６８
土壙群　７３
（２）遺物　７４
塚田遺跡の石造物　７４
一　五輪塔　７４
１）空風輪　２）火　輪　３）水　輪　４）地　輪
二　無縫塔　８８
五輪塔の概説　８８
塔形と梵字　８９
まとめ　９０
土器類　縄文土器　陶器　９１～９４
鉄器　９４
硯　古銭　９５
（３）まとめ　９６

挿　図　目　次

第１図	中尾城・塚田遺跡と周辺遺跡位置図及び標高模式図	２～３
第２図	中尾城調査区及び、遺構全体図	３～４
第３図	１号住居址出土遺物	6
第４図	１号住居址	7
第５図	２号住居址出土遺物、平面図及び断面図	8
第６図	２号住居址及び竈	9
第７図	１号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	11～12
第８図	２号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	13～14
第９図	３号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	17～18
第10図	４号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	19～20
第11図	５号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	23～24
第12図	６号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	25～26
第13図	７号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	29～30
第14図	８号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	31～32
第15図	９号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	35～36
第16図	北堀土層図	38
第17図	北堀平面図及び東西断面図	39～40
第18図	トレンチ	41～42
第19図	堀状遺構	43
第20図	１～３号溝	45～46
第21図	６～８号溝	47～48
第22図	４～５号溝	49
第23図	１・２号井戸	50
第24図	３号井戸	51
第25図	１号竪穴遺構	52
第26図	２・３号竪穴遺構	53
第27図	石臼実測図	54
第28図	石臼説明図	55
第29図	古絵図主要部	57～58
第30図	塚田遺跡調査全体図	64
第31図	遺構配置図	65
第32図	１号住居址遺物実測図	66

第33図　1号住居址　67
第34図　竪穴及びピット群　69
第35図　土壙群、断面図　70
第36図　土壙群・2号住居址、平面図及び断面図　71～72
第37図　五輪塔・無縫塔、説明図　75
第38図　空風輪　76
第39～40図　火輪　77～78
第41～42図　水輪　80～81
第43～45図　地輪　83～85
第46図　梵字の陰刻角と編年　89
第47図　縄文土器拓影　92
第48図　陶器　93
第49図　鉄器　93
第50図　硯　95
第51図　古銭　95

表　目　次

第1表　1号掘立柱建物遺構柱穴計測表　10
第2表　2号掘立柱建物遺構柱穴計測表　15
第3表　3号掘立柱建物遺構柱穴計測表　16
第4表　4号掘立柱建物遺構柱穴計測表　21
第5表　5号掘立柱建物遺構柱穴計測表　18
第6表　6号掘立柱建物遺構柱穴計測表　20
第7表　7号掘立柱建物遺構柱穴計測表　22
第8表　8号掘立柱建物遺構柱穴計測表　24
第9表　9号掘立柱建物遺構柱穴計測表　26
第10表　空風輪計測表　75
第11表　火輪計測表　79
第12表　水輪計測表　82
第13表　地輪計測表　86
第14表　地輪年代推定表　87

図　版　目　次

巻頭カラー　古絵図

カラー図版１　塚田遺跡出土陶器類

図版１〔中尾城〕遠景小手指版（西方）より

図版２　1.　若神子古城（西南西）より　2.　東方対岸　明野村上神取より

図版３　1.　中尾城より北方　2.　中尾城より北東

図版４　1.　中尾城より南方　2.　中尾城より南西

図版５　1.　斑山廃坑（坑内）　2.　斑山廃坑（坑口）

図版６　丸茂種市氏蔵の写真

図版７　1.　１号住居址（北より）　2.　１号住居址、遺物出土状態

図版８　1.　２号住居址（西から）　2.　２号住居址竈

図版９　１号住居址、１号掘立柱建物遺構、１～３号溝、（西から）

図版10　1.　発掘風景、（北東より）　2.　発掘風景（南西より）

図版11　1.　２号掘立柱建物遺構（西より）柱穴上に立つ須玉中学生徒

2.　３号掘立柱建物遺構及び３号竪穴遺構附近（西より）

図版12　1.　４号掘立柱建物遺構、３号井戸、南堀附近（北より）

2.　３号井戸、２号住居址、１号竪穴遺構及び掘立群（北東より）

図版13　1.　掘立群及び１号竪穴遺構より八ケ岳及び南麓台地を望む（南東より）

2.　掘立群柱穴発掘風景（南より）

図版14　1.　５号掘立柱建物遺構、Ｐ―32の柱痕

2.　４～８号掘立柱建物遺構（西より）

図版15　９号掘立柱建物遺構、１～２号井戸、７号溝（東より）

図版16　８号掘立柱建物遺構附近から斑山を望む（南より）

図版17　北堀（北西より）

図版18　1.　北堀東（北より）

2.　北堀発掘風景（北東より）

図版19　1.　北堀発掘風景（北より）

2.　北堀土層（東より）

図版20　1.　１～２号井戸（北より）

2.　１～２号井戸、発掘スタッフ（南より）

図版21　1.　３号井戸、集石状況（西より）

2.　３号井戸（西より）

図版22　1.　１号竪穴遺構（北より）　2.　１号竪穴遺構土層（東より）

図版23　1.　2号竪穴遺構（北より）
2.　3号竪穴遺構（南西より）
図版24　1.　発掘風景B区西、南北トレンチ（北より）
2.　発掘風景B区、斜面トレンチ（東より）
図版25　1.　1号住居址出土遺物
2.　2号住居址出土遺物
図版26　1.　石臼　a：6号掘立柱建物遺構（P－41）出土。b：3号井戸出土
2.　発掘調査参加者
図版27〔塚田遺跡〕1.　塚田遺跡遠景（東方、明野村より）
2.　五輪塔散在状況（人物附近、南西より）
図版28　1.　発掘前集めた五輪塔群（南より）
2.　1号住居址〔実測作業中〕及び茅ケ岳と西麓（西より）
図版29　1.　1号住居址（西より）
2.　1号住居址竈
図版30　1.　2号住居址（南より）
2.　2号住居址（西より）
図版31　1.　北トレンチ発掘風景（南西より）
2.　竪穴群発掘風景（南より）
図版32　1.　竪穴群（北西より）
2.　土壙群発掘前（西より）
図版33　1.　土壙群発掘風景（東より）
2.　土壙群発掘風景（東より）
図版34　1.　土壙　2.　土壙
図版35　1.　土壙　2.　土壙群及び2号住居址全景（南西より）
図版36　1.　出土遺物　縄文時代前期
2.　出土遺物　縄文時代後期後半
図版37　1.　出土遺物　硯
1.　出土遺物　五輪塔
図版38　1.　正覚寺　五輪塔
2.　赤岡氏　五輪塔
図版39　1.　長泉寺　五輪塔
2.　塩川病院南　五輪塔
図版40　発掘調査参加者

Ⅰ　調査の実施と経過

山梨県では、国の農産物自給政策及び、農村振興政策の一貫として、農業構造改善事業を広く実施している。これに伴い、須玉町でも団体営及び、県営圃場整備事業が実施されてきた。従来、県営事業に伴う埋蔵文化財の調査は県教育委員会が直営で実施してきたが、昭和５７年度より地元教育委員会が実施する事となった。

昭和５８年度、県営圃場整備事業が小倉及び大蔵地区で計画され、工区内の遺跡の有無の照会が、県峡北土地改良事務所より本町経済課を通じて当教育委員会になされた。調査の結果、小倉工区では周知の遺跡として中尾城があり、大蔵工区では塚田地区に土器片と五輪塔多数存在していた。この為、中尾城は試掘及び、本調査の必要があり、塚田地区では試掘調査が必要であるとの報告をおこなった。この結果をもとに、県峡北土地改良事務所と協議を行なった結果、塚田地区では県峡北土地改良事務所の委託により当教育委員会が試掘調査を行なう事となり、調査を実施したところ、土器の散布が密な場所が発見された為本調査が必要であるとの報告をおこなった。以上の経緯にもとずき、昭和５８年度の国補事業として中尾城及び、塚田遺跡の本調査を当教育委員会が実施する事となった。

発掘調査は、中尾城を昭和５８年６月より１０月まで、塚田遺跡を同年１０月より１２月まで実施した。　山路

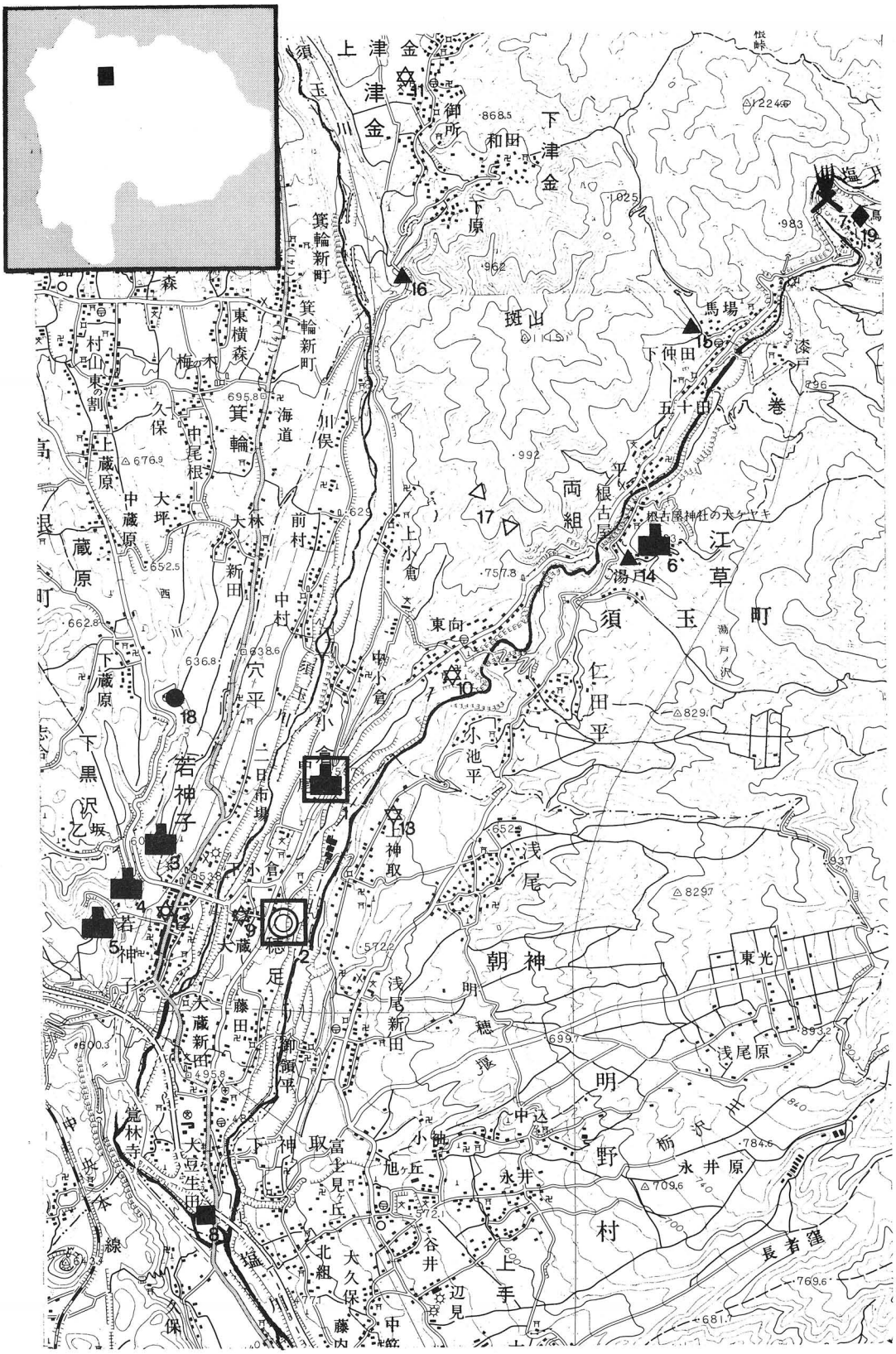
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境　（第１図）

中尾城の立地

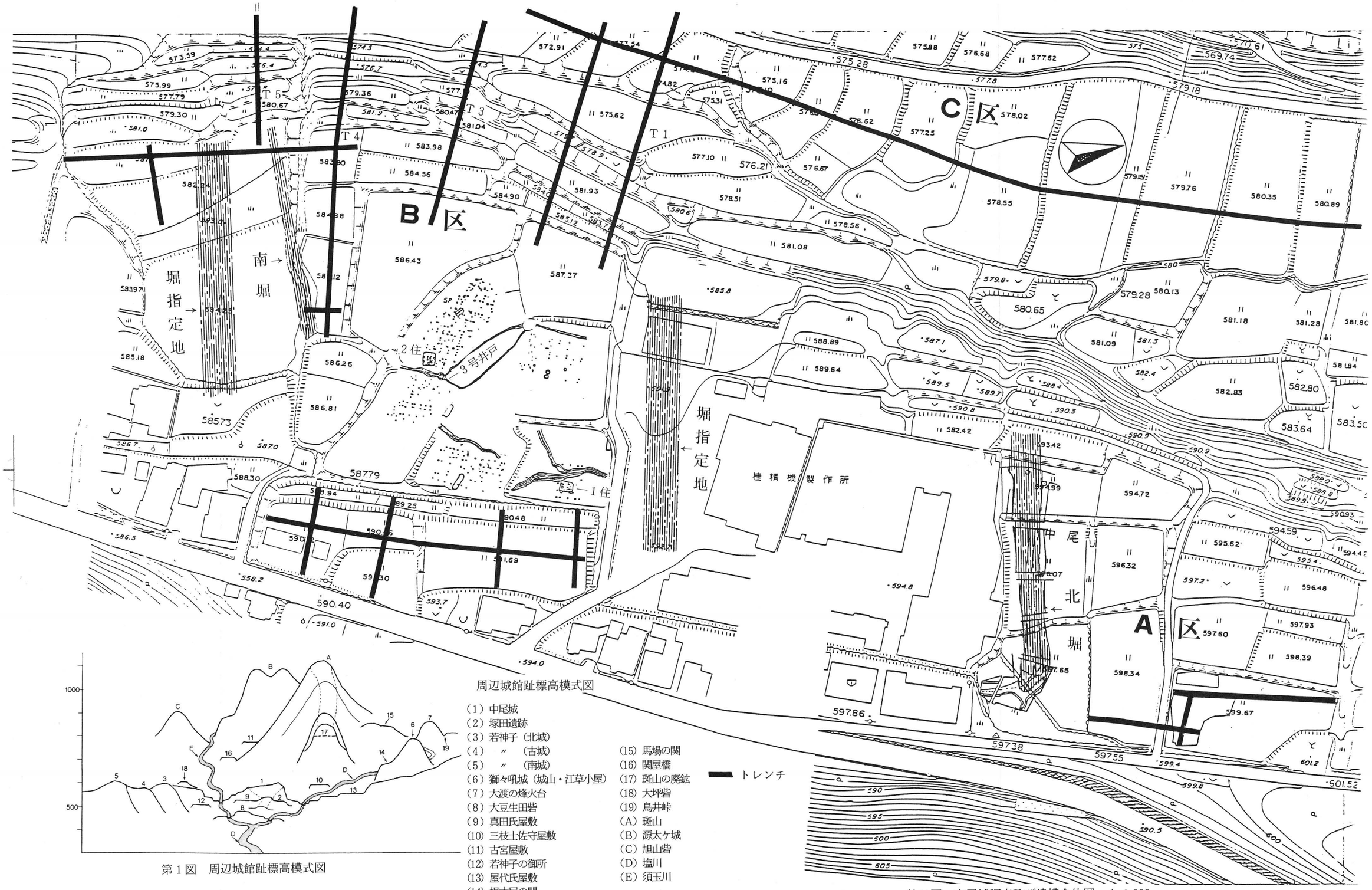
中尾城は、秩父山系の斑山（1,115m）から南西へ細長く延びる尾根上に立地する。この尾根は東の塩川（比高約30m）、西の須玉川（比高約30m）の両河岸段丘により形成されている。中尾はその地名が表わすように八ケ岳南麓台地と、茅ケ岳西麓台地の中間地帯に位置する尾根である。この中間地帯は塩川、須玉川を境として中尾から南西、大蔵、藤田、穂足、大豆生田の各地区に続き、両河川の合流地点を頂点とする半島状の区画をつくり、両台地を完全にわけている。大蔵には真田氏屋敷。大豆生田には、大豆生田砦がある。

城の北東約１６０mに〔ベットウさん〕という小さな社殿がある（これは工場建設に伴い城内より移転されたものと聞く）。更に、北東約1,5㎞、斑山の中腹には金山とおもわれる廃坑数カ所あり、その一つは見本寺側の西斜面から東向集落のある東斜面へと尾根を貫通している。東向集落には三枝土佐守屋敷（絵図に記載あり）がある。

城の最高所（597m)に立つと北西に、塩川の上流（増富方面）、瑞牆山(2,230m）をはじめ鳥井峠、大渡の烽火台（８５０ｍ）、江草の城山（獅子吼城、793m）を望む。東から南東にかけて、茅ケ岳(1,703m）とその西麓、さらに遠く御坂山塊の一部と富士を望み、眼下に



第１図　中尾城・塚田遺跡と周辺遺跡位置図及び標高模式図　1:25,000



第1図　周辺城館趾標高模式図

第2図　中尾城調査及び遺構全体図　1:1,000

は、上神取・屋代氏屋敷の土塁をはっきりとみることができる。

南には大蔵の真田氏屋敷がみえ、南アルプス連山を背景に、韮崎市方面には八ケ岳南麓台地上の新府城、能見城。武川村、白州町に跨る中山砦がみえる。

南西から北にかけては、若神子の町並みと、二日市場から川又までの集落。八ケ岳西南麓台地東端に位置する若神子城（北城・古城・南城）・旭山砦、また、津金の源太カ城も一望することができる。　　山路

塚田遺跡の立地と現況

塚田遺跡は塩川（比高約20m）西岸の下位河岸段丘上に立地する。遺跡の西は尾根によって視界が遮られている。

この尾根は、斑山の南麓から中尾城を通り、塩川、須玉川を境として続く半島状の地域の中央をはしり（遺跡の西を通り）穂足の消防所の北できえる。

尾根の西は緩斜面をなして真田隠岐守屋敷のある大蔵の集落につづき、この集落の南は須玉川に沿う水田地帯となる。

本遺跡の北は、桑畑と李畑があり、西側も尾根したに段状の桑畑をつくり、調査範囲中央から南は藤田まで水田となっている。

土壙群南東（調査区域外）の一区劃は地元の呼称で〔コツ・骨〕と呼んでいる。　遺跡の東、塩川西岸河川敷の水田に（町田）の字名が残るが今、人家は全くみあたらない。

深沢

Ⅲ　中尾城遺跡

（1）遺構と遺物

遺構の概容（第2図）

調査範囲はすべて水田とそれに附随する斜面である。調査区は工場（桂精機）の北をA区、南と西の斜面をB区、斜面の終りから西をC区とした。城域の半分以上は現在、工場、宅地、県道などになっている。調査区内も2～3度にわたる田普請（水田の造成）などによって削平を受け土塁などの構造物は完全に消滅し、遺構の遺存状態は極めて悪かった。堀の調査については出水が多く危険な為充分な調査が出来なかった。

A区：堀（北堀）が一本発見された。この堀は城域の北限とかんがえられる。

B区：平安時代後半の住居址2軒（1号住居・2号住居）、掘立柱建物遺構9棟、溝7本、井戸3本、堀状遺構1ケ所、堀（南堀の一部）一本、竪穴遺構3ケ所、が発見された。

C区：遺構は発見されなかった。

このほか、調査区外の工場敷地内と南堀の更に南の水田に堀跡と推定される湿地帯がある。

1号住居址

B区の北1号溝～3号溝の西に位置し、一部を1号掘立柱建物遺構にきられている。この付近は田普請の為削平をかなり受けていた。覆土の上層は「ニガ」と呼ばれる水田の床土になっていた。

プランは隅丸方形であるが東壁部は削平を受けている為実際の東壁は更に東にあった可能性もある。東壁の北と南に竈の跡と考えられる焼土が見られた。

主軸は、南壁と西壁を基準としてみるとN—120°—E 西よりやや南に傾く。北壁は2.9m東壁と西壁は3.6m、南壁3mを計る。

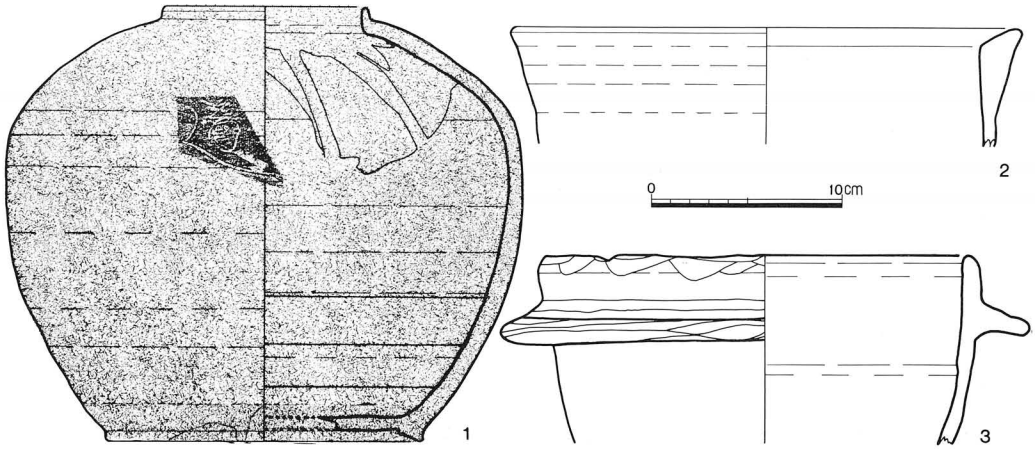
壁高は、北壁で4～7cm、西壁で5.5～8cm、南壁で9～10cm、東壁はほとんどたちあがりがなく、3.0cm 以下であった。

周溝、主柱穴はなかったが支柱穴と思われる小穴が19カ所あった。床は全体にしまりがあった。このほか、比較的浅い掘込みが2か所、（1－2）あり、1の規模は東西50cm、南北40cm、深さ25cm。2は長径40cm、短径20cm、深さ15cm であった。

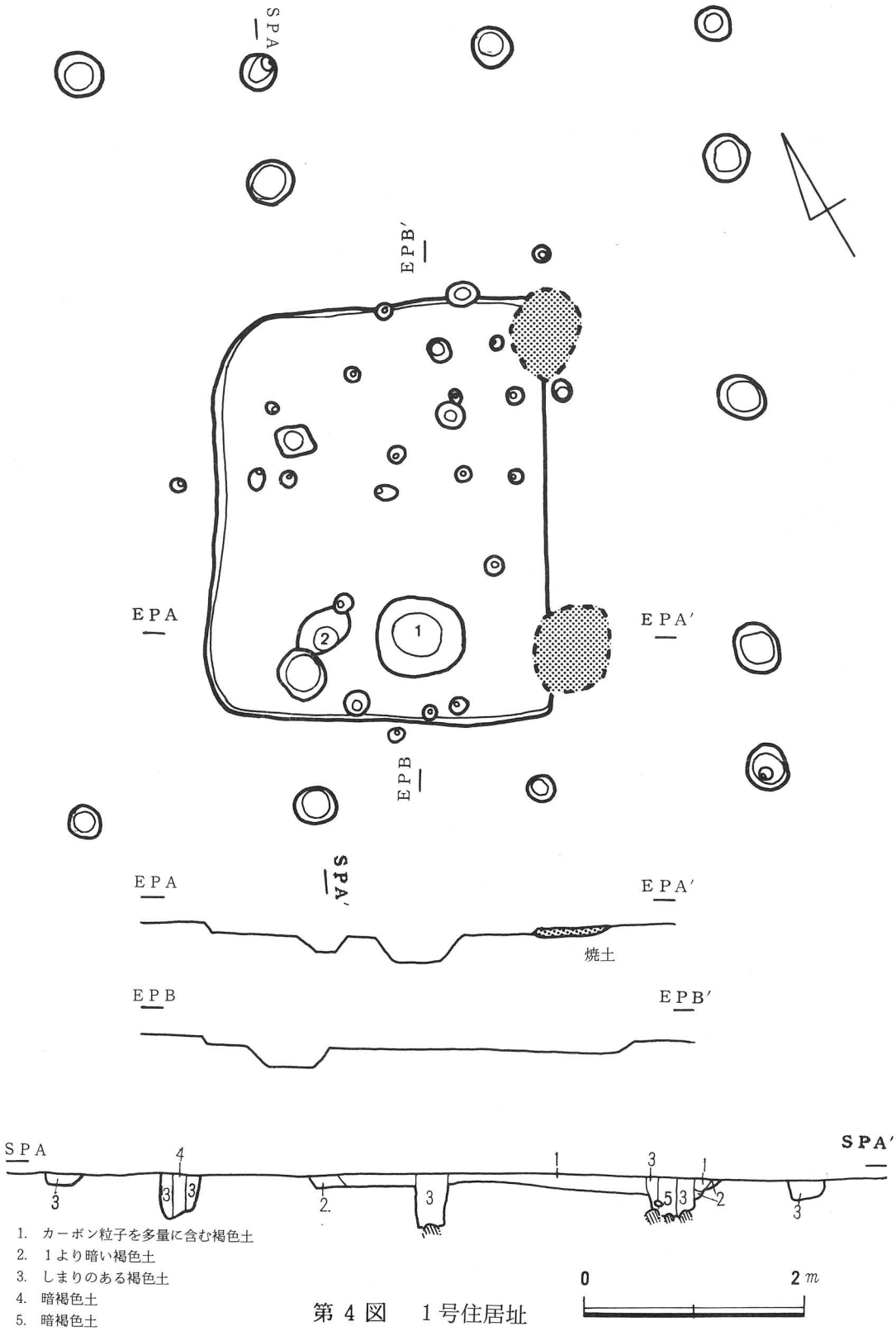
遺物 主な遺物は3個体出土した。1、灰釉短頸壷。2、甕。3、羽釜がいずれも床直で出土した。1は、10世紀後半代の美濃産の短頸壷で口縁から底部にかけて約2/5 が遺存していた。口径10,5cm、底径16,8cm、胴部最大径27cm、器高23cmで、胴部に〔道〕の字が彫ってある。

2は、口径26cmを測る甕の破片である。

3は、口径22,5cm を測る羽釜で、今体の1/3 を残す。内外面ともに摩滅しており、成形痕は不明である。胎土中に砂粒や、小石を多く含みざらつきがある。



第3図　1号住居址出土遺物


SPA
EPB′
EPA
EPA′
EPB
SPA′
EPA
EPA′
焼土
EPB
EPB′
SPA
SPA′
1. カーボン粒子を多量に含む褐色土
2. 1より暗い褐色土
3. しまりのある褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
0
2 m

第 4 図　1号住居址

2号住居址（第5図、第6図）

B区のやや南中央に位置し、5号掘立柱建物遺構の間にあり、北西に3号井戸がある。

プランは隅丸方形であり東西4m、南北3.7mを計り、東壁の南寄りに竈がある。主軸はN－112°－Eである。

壁の状態は良好なたちあがりをもち、壁高は北壁で12cm～31cm、西壁で19cm～29cm、南壁で23cm～26cm、東壁15cm～24cmを計る。

周溝は竈の西より、南壁の西よりの小穴附近までほぼ全周する。

床は掘立柱建物群の柱穴で一部きられているが良好に確認できた。主柱穴はなかったが小穴が15本ありそのうち支柱穴と推定されるものが北壁近くにみられるたが他は不明。
このほか、間仕切りの溝と推定されるものが2本主軸方向に平行にみられた。

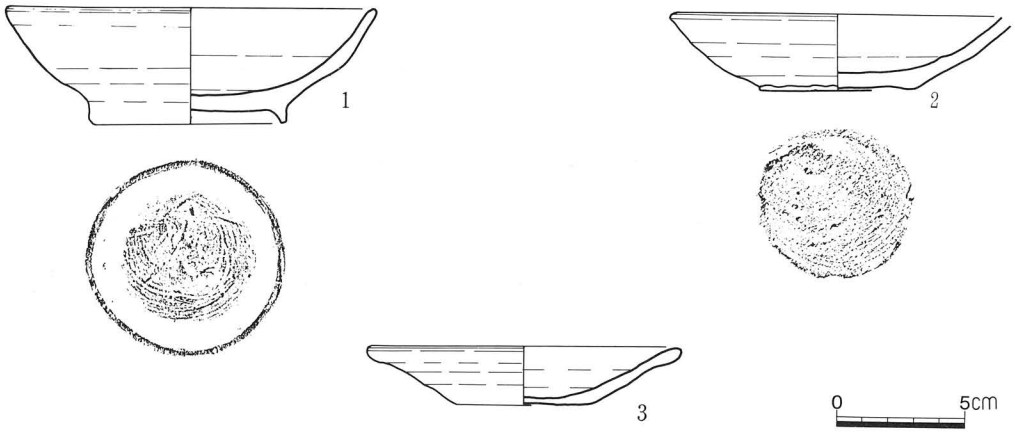
竈は袖石より低い部分は遺存状態は良好で燃焼部から煙道部へかけても良好であった。
炊き口は南東コーナーより対かく線上に造られている様であった。

遺物　主な遺物は1、灰釉高台付坏と2、土師質土器である。

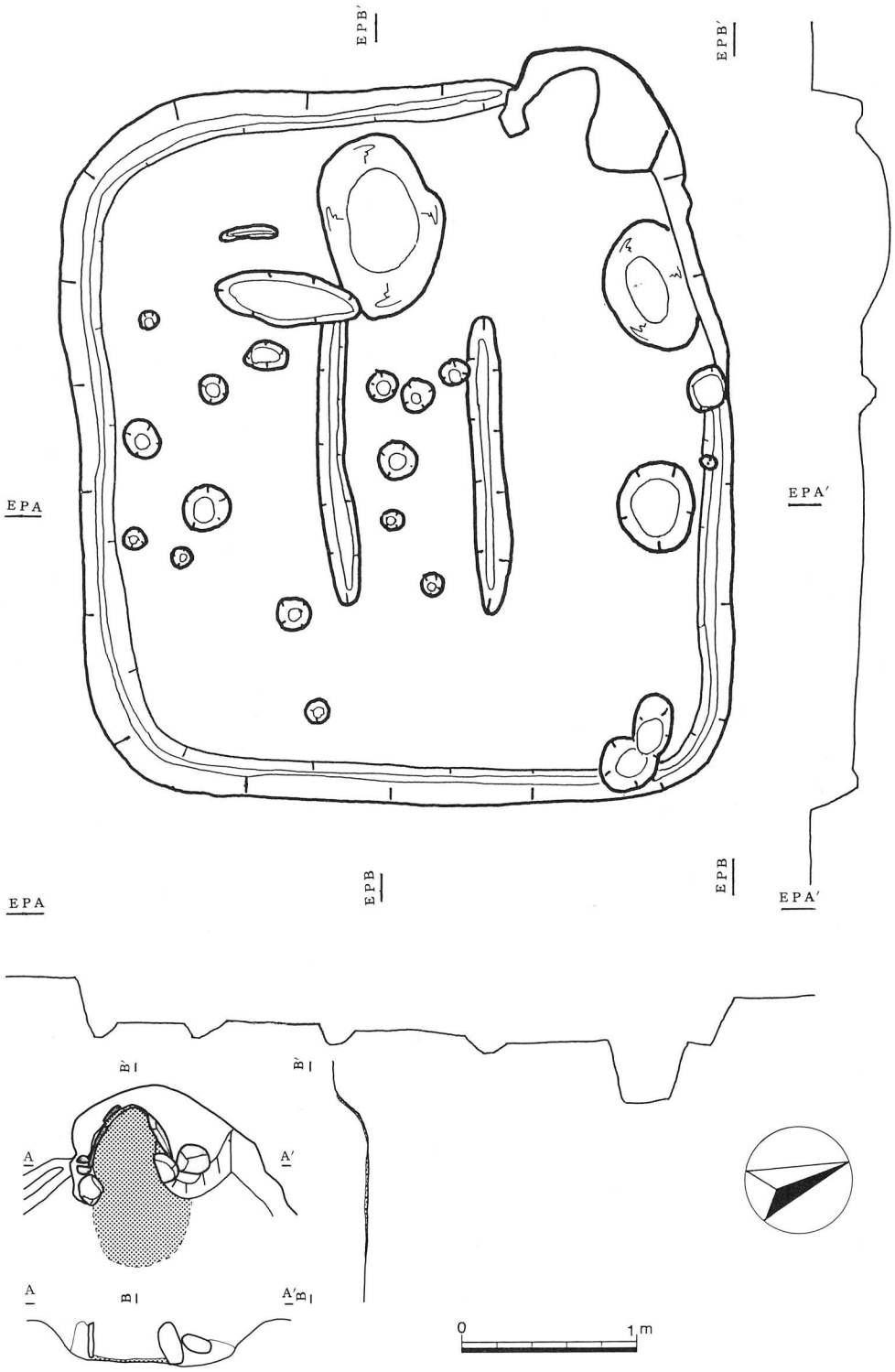
1、灰釉高台付　は口径15cm　器高4.5cm、底径7.6cmを測り、色調は灰白色で胎土は極めて細かい。胴部に2ケ所の欠損部分があり、黒色の付着物が認められ、ウルシの可能性がある。

2、土師質土器の皿で、口径13,2cm、器高3.2cm、底径6cmで、胴部内外にロクロ横なで、底部に糸切り痕がある。胎土はやや荒く、雲母及び0.2～0.5cm の黒色粒子を含む。色調はやや灰色がかった黄褐色で、底部の半分は黒色で完形である。

3、坏で、口径12,2cm、器高2.3cm、底径5.2cmである。内外共にロクロ横なでで、胴部下半から底部まで、ヘラ削りが施されている。口唇は僅かに肥厚し、色調は明赤褐色で、底部と胴部及び口縁の一部が残る。



第5図　2号住居址出土遺物



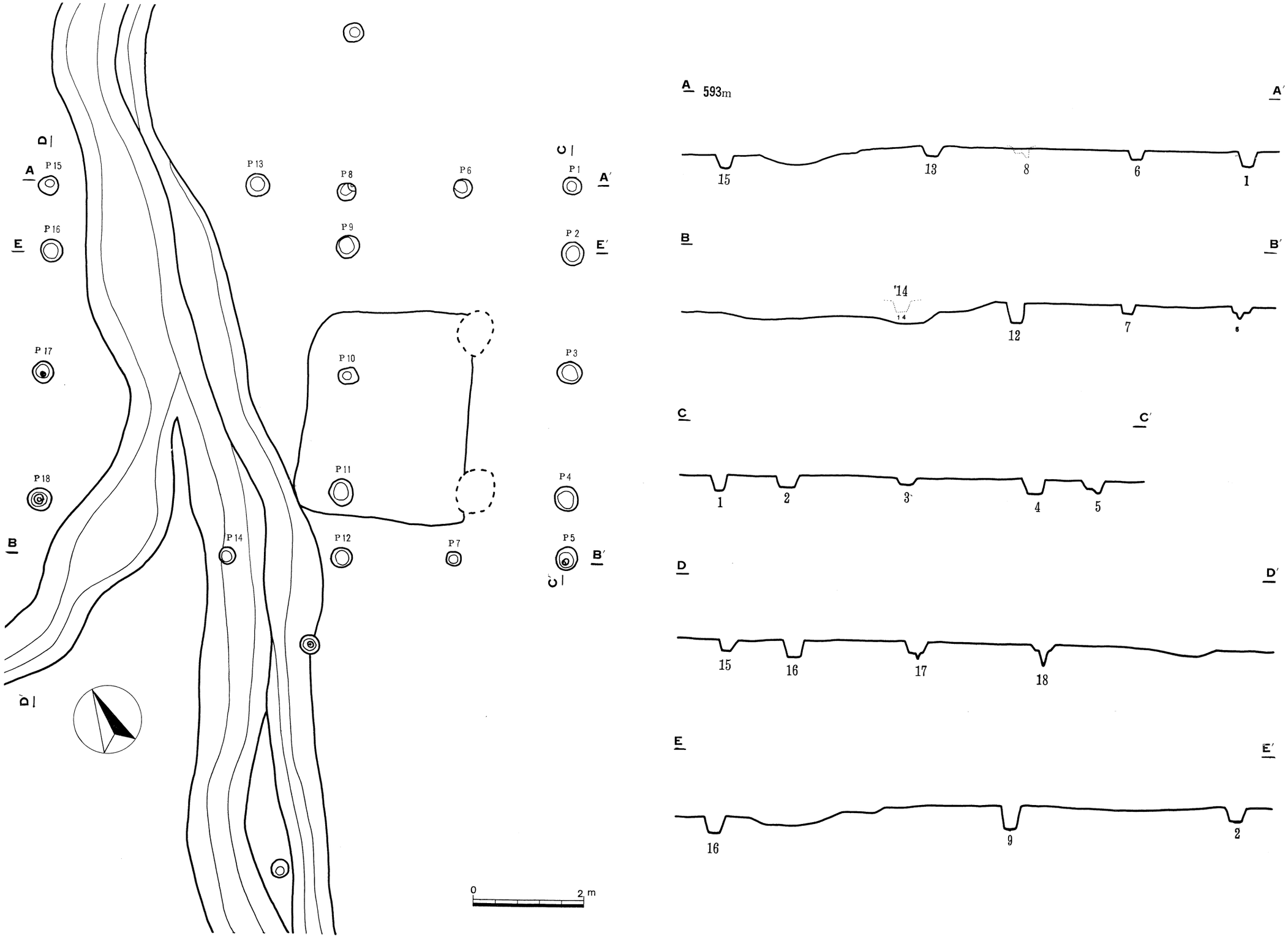
第6図　2号住居址及び竈

a）1号掘立柱建物遺構

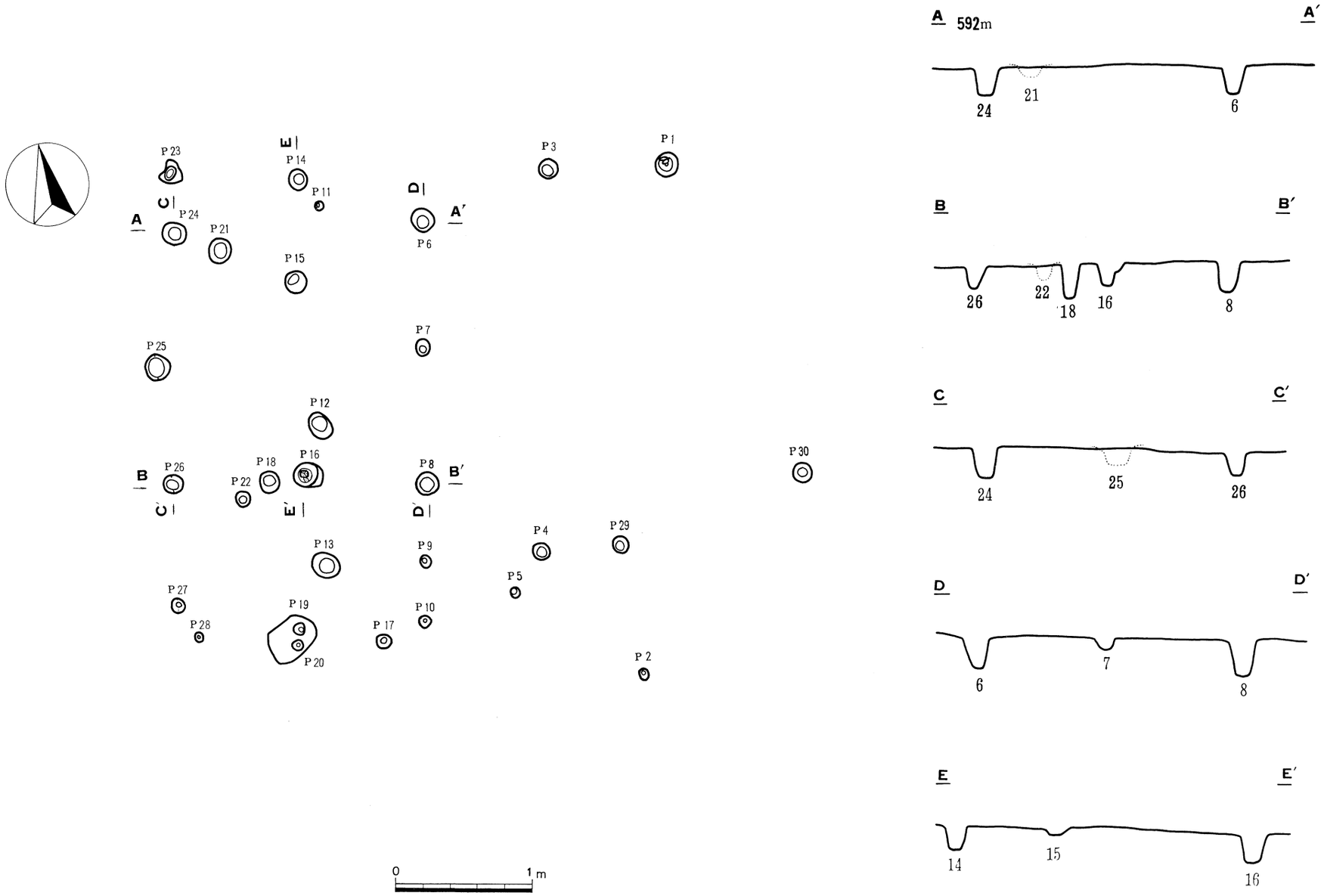
主軸はN—117°Eで、棟柱のＰ３Ｐ17を結ぶ間は桁行５間（９ｍ）を測る。棟柱Ｐ３から内側通りの柱穴Ｐ２とＰ３から南内側通りの柱穴Ｐ４の柱間の和は２間半（4.5ｍ）を測る。庇の側通りＰ１Ｐ６Ｐ８Ｐ13Ｐ15と内側通りのＰ２Ｐ９Ｐ16の柱穴間は３尺（90cm）である。南側の側通りＰ５Ｐ７Ｐ12Ｐ14と内側通りの柱穴Ｐ４Ｐ11Ｐ18も３尺を測る。工場（本丸）から南下する溝遺構によって、少くとも３ケ所の柱穴が削平されている。然しこれ等の失われた柱穴を除いても、ほぼ完形に近い掘立柱遺構、既ち桁行５間×梁行３間半が測られる。

第１表　１号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はｍ、他はcmで表わす）

No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
Ｐ１	不整円形	32×30	28.0	591.76		P10	不整円形	48×38	37.0	591.61	
2	円形	48×46	23.5	591.82		11	不整円形	50×48	28.5	591.67	
3	不整円形	46×40	12.7	591.89		12	円形	30×30	37.0	591.68	
4	不整円形	50×42	36.0	591.67		13	円形	44×42	18.5	591.87	
5	不整円形	48×38	22.5	591.78		14	円形	30×28	18.5	591.86	
6	不整円形	38×36	16.0	591.87		15	不整円形	38×36	31.4	591.61	
7	円形	24×24	20.0	591.84		16	円形	42×40	38.0	591.52	
8	不整円形	44×38	18.5	591.87		17	円形	38×38	33.5	591.48	
9	不整円形	44×40	41.5	591.65		18	不整円形	44×42	39.0	591.42	



第７図　１号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第８図　２号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

b） 2号掘立柱建物遺構

主軸はN－26°－Eで、棟柱はP14 P16で桁行1間（1.8 m）を測り、梁行P 6 P24（P 8 P 26）1間を測る方形小舎のような掘立柱建物遺構である。2号掘立柱建物遺構との間の柱穴に互間性を見出すことが困難である。

第2表　2号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

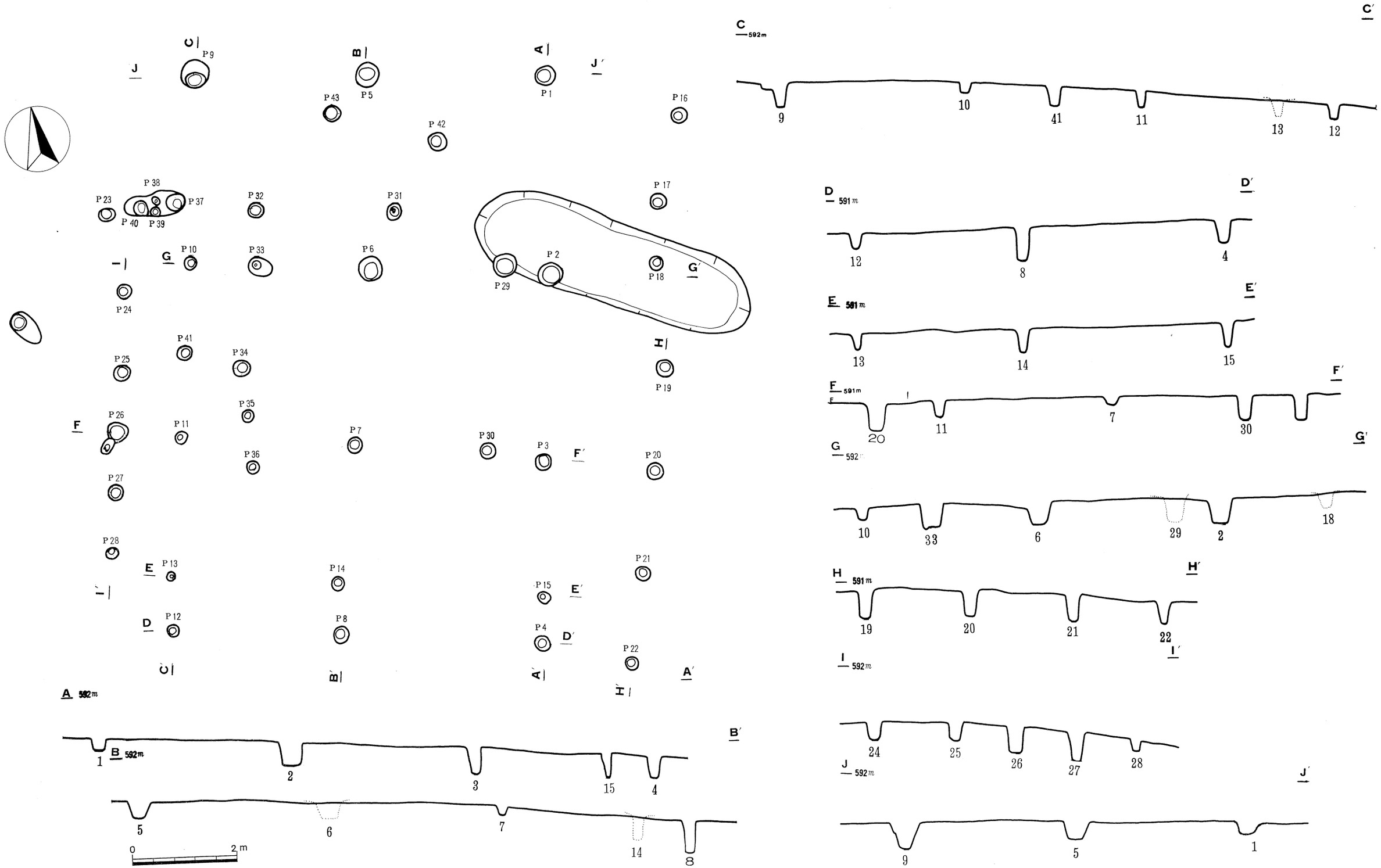
No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
P 1	円形	35×33	11.9	591.20		P16	不整円形	44×36	34.4	590.90	○
2	円形	16×13	15.5	591.16		17	円形	23×22	30.5	590.96	
3	不整円形	28×26	14.0	591.21		18	不整円形	32×29	54.1	590.76	
4	円形	28×26	14.3	591.13		19	不整円形	20×18	60.5	590.62	
5	円形	15×15	22.8	591.05		20	不整円形	16×15	36.0	590.88	
6	円形	36×32	44.0	591.90	○	21	不整円形	40×34	11.8	591.21	
7	不整円形	24×20	16.4	591.17	○	22	不整円形	24×23	20.6	591.00	
8	円形	34×32	48.0	590.81	○	23	不整円形	36×28	22.7	591.11	
9	円形	20×18	48.0	590.76		24	不整円形	36×32	46.7	590.86	○
10	円形	19×19	25.6	590.95		25	円形	38×38	25.5	591.01	○
11	円形	12×11	16.8	591.21		26	不整円形	32×29	32.5	590.88	○
12	不整円形	43×32	26.6	591.03		27	円形	24×22	29.5	590.89	
13	楕円形	44×36	41.3	590.88		28	円形	12×12	17.8	590.94	
14	円形	32×31	38.8	590.99	○	29	円形	28×26	12.6	581.14	
15	円形	32×32	13.3	591.19		30	円形	30×30	48.8	590.79	

c）３号掘立柱建物遺構

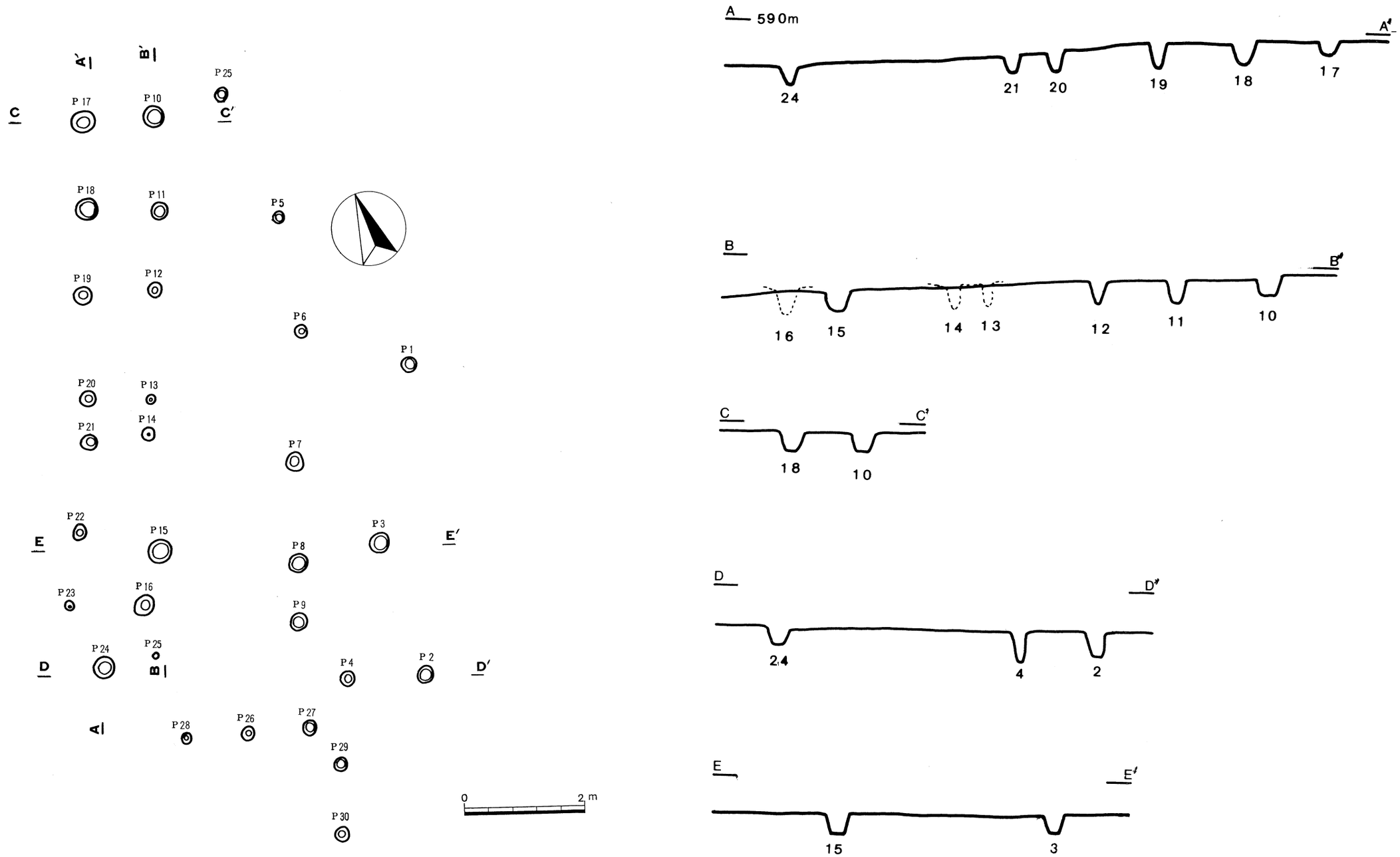
主軸はN—29°—Eで、棟柱はＰ５Ｐ８でＰ５Ｐ６、Ｐ６Ｐ７、Ｐ７Ｐ８それぞれの柱穴の間隔は２間、桁行は３間（5.4ｍ）が測られ、梁行（Ｐ１Ｐ９）は２間を測る。南梁行の柱穴Ｐ４Ｐ12から３尺内側に柱穴Ｐ13Ｐ15が認められ、これ等の柱穴は縁のような、　この建物に付属する柱穴と考えられる。建物遺構の東側に南北の柱列Ｐ16～Ｐ22、西側にも南北の柱列（Ｐ23～Ｐ28）が並ぶ。Ｐ19とＰ22までの柱穴間は１間を測ることが出来、Ｐ24からＰ28の柱穴間は４尺の間隔をとる。東西の柱列は、この建物遺構に伴う柵列のような柱列であろう。

第３表　３号堀立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

No.	形　状	規　模	深さ	底標高	備　考	No.	形　状	規　模	深さ	底標高	備　考
Ｐ１	不整円形	40×36	20.8	590.99	○	P22	円　形	24×24	42.5	590.08	
2	円　形	48×44	43.9	590.55		23	不整円形	32×26	33.5	590.66	
3	不整円形	30×28	49.5	590.24		24	円　形	30×29	53.5	590.60	
4	不整円形	32×31	43.5	590.02	○	25	円　形	32×32	30.8	590.57	
5	不整円形	48×44	34.3	590.81	○	26	不整円形	39×38	53.0	590.26	
6	不整円形	48×44	41.0	590.60		27	円　形	31×28	56.0	590.09	
7	不整円形	29×28	16.0	590.63		28	不整円形	24×23	24.5	590.26	
8	不整円形	32×28	64.5	589.78	○	29	不整円形	44×44	43.3	590.60	
9	円　形	52×50	45.4	590.62	○	30	円　形	28×28	46.0	590.28	
10	不整円形	28×22	36.0	590.77	○	31	楕円形	34×28	10.3	590.97	
11	円　形	26×24	30.5	590.46	○	32	円　形	28×28	17.5	590.91	
12	円　形	24×24	29.5	590.09	○	33	不整円形	46×36	49.5	590.54	
13	不整円形	20×16	31.8	590.18		34	不整円形	30×29	46.0	590.43	
14	円　形	28×25	46.0	590.04		35	不整円形	24×20	10.5	590.67	
15	不整円形	22×22	45.0	590.09		36	円　形	24×23	33.5	590.41	
16	円　形	30×30	48.9	591.79		37	不整円形	36×32	50.5	590.54	
17	円　形	28×28	44.3	590.72		38	不整円形	16×12	33.0	590.71	
18	円　形	28×26	27.5	590.77		39	不整円形	16×16	39.6	590.64	
19	円　形	30×28	57.0	590.32		40	不整円形	36×28	24.0	590.75	
20	円　形	32×28	49.5	590.29		41	円　形	28×28	38.0	590.50	
21	円　形	26×25	61.0	590.14		42	円　形	36×34	48.4	590.64	
						43	不整円形	32×30	30.3	590.82	



第９図　３号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第10図　4号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

d）４号掘立柱建物遺構

Ｎ―21°―Ｅを主軸とし、Ｐ25Ｐ26を結ぶ軸を中心にして、東西の柱列を測定すると、東にＰ６Ｐ７Ｐ８Ｐ９が４尺、西にＰ10～Ｐ15が同じく４尺測られる。Ｐ10から３尺西へＰ17がＰ18～Ｐ24までＰ10～Ｐ15に平行する。南北の柱列は、Ｐ17～Ｐ24までが９ｍ（５間）、東西の柱穴Ｐ２とＰ24の間が5.4ｍ（３間）を測るが、東と北東部からの柱穴の検出不足から、建物の規模は推定出来ない。

第４表　４号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

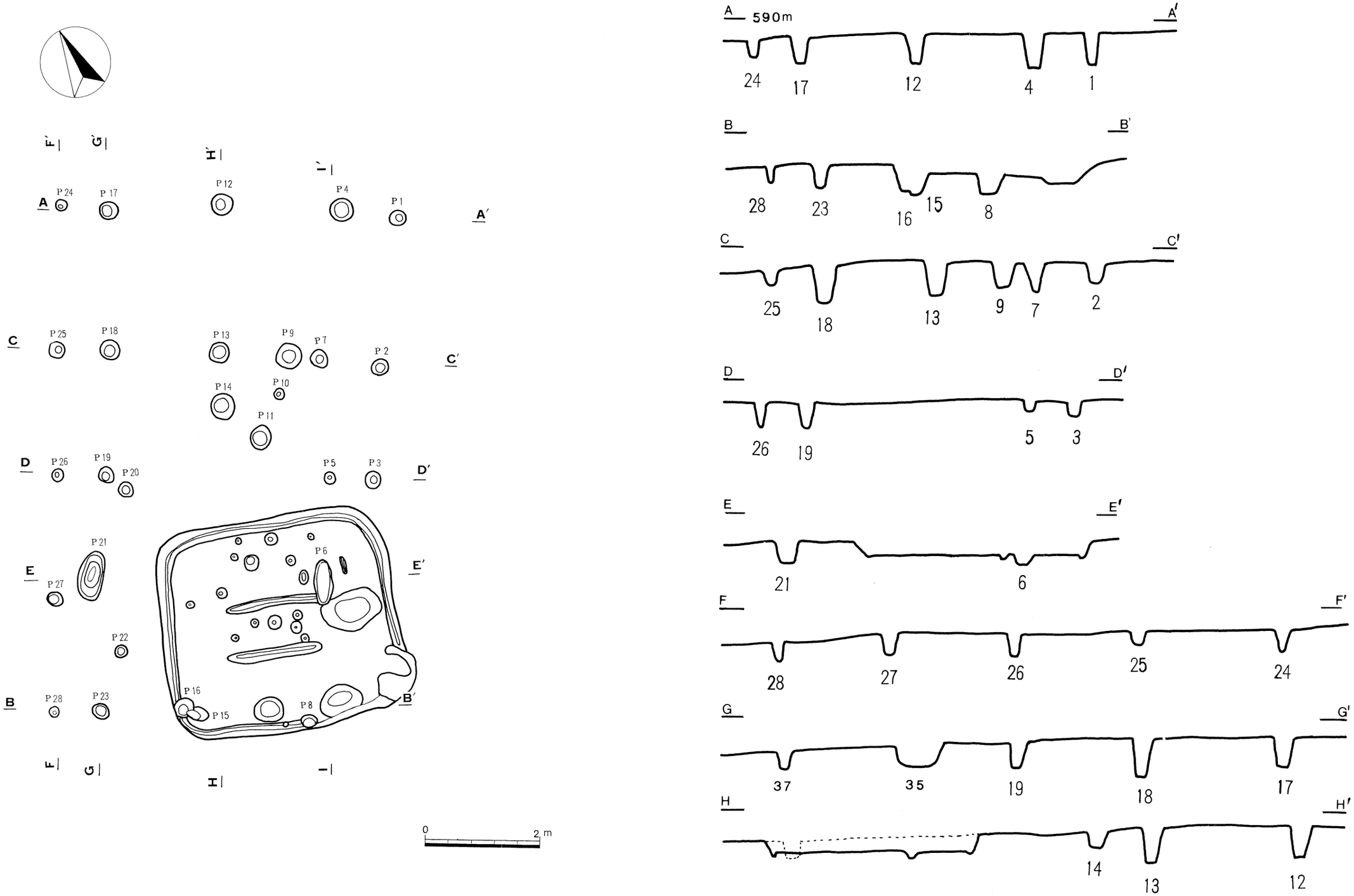
No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
Ｐ１	円形	28×27	50.5	589.15		P16	不整円形	40×32	41.9	588.95	
2	不整円形	30×28	35.0	588.97		17	不整円形	42×34	32.7	589.54	
3	不整円形	36×32	37.6	589.05		18	円形	36×36	29.7	589.50	
4	円形	27×27	94.2	588.35		19	円形	32×31	47.0	589.27	
5	不整円形	20×16	27.9	589.47		20	不整円形	34×30	41.1	589.17	
6	不整円形	23×20	51.1	589.17		21	不整円形	30×28	46.6	589.14	
7	不整円形	34×32	46.4	589.14		22	不整円形	29×24	21.6	589.21	
8	不整円形	36×32	39.6	589.01		23	不整円形	18×16	28.2	589.08	
9	不整円形	32×28	29.7	589.06		24	円形	37×36	28.5	589.00	
10	不整円形	38×36	32.5	589.53		25	不整円形	22×20	17.6	589.68	
11	円形	32×29	27.6	589.47		26	不整円形	23×22	36.8	588.87	
12	楕円形	28×24	39.6	589.32		27	円形	24×22	38.1	588.85	
13	不整円形	18×16	34.9	589.25		28	円形	20×18	31.0	588.91	
14	円形	23×22	27.7	589.24		29	円形	24×23	54.1	588.61	
15	円形	41×40	35.9	589.06		30	円形	24×24	53.8	588.61	

e） 5号掘立柱建物遺構

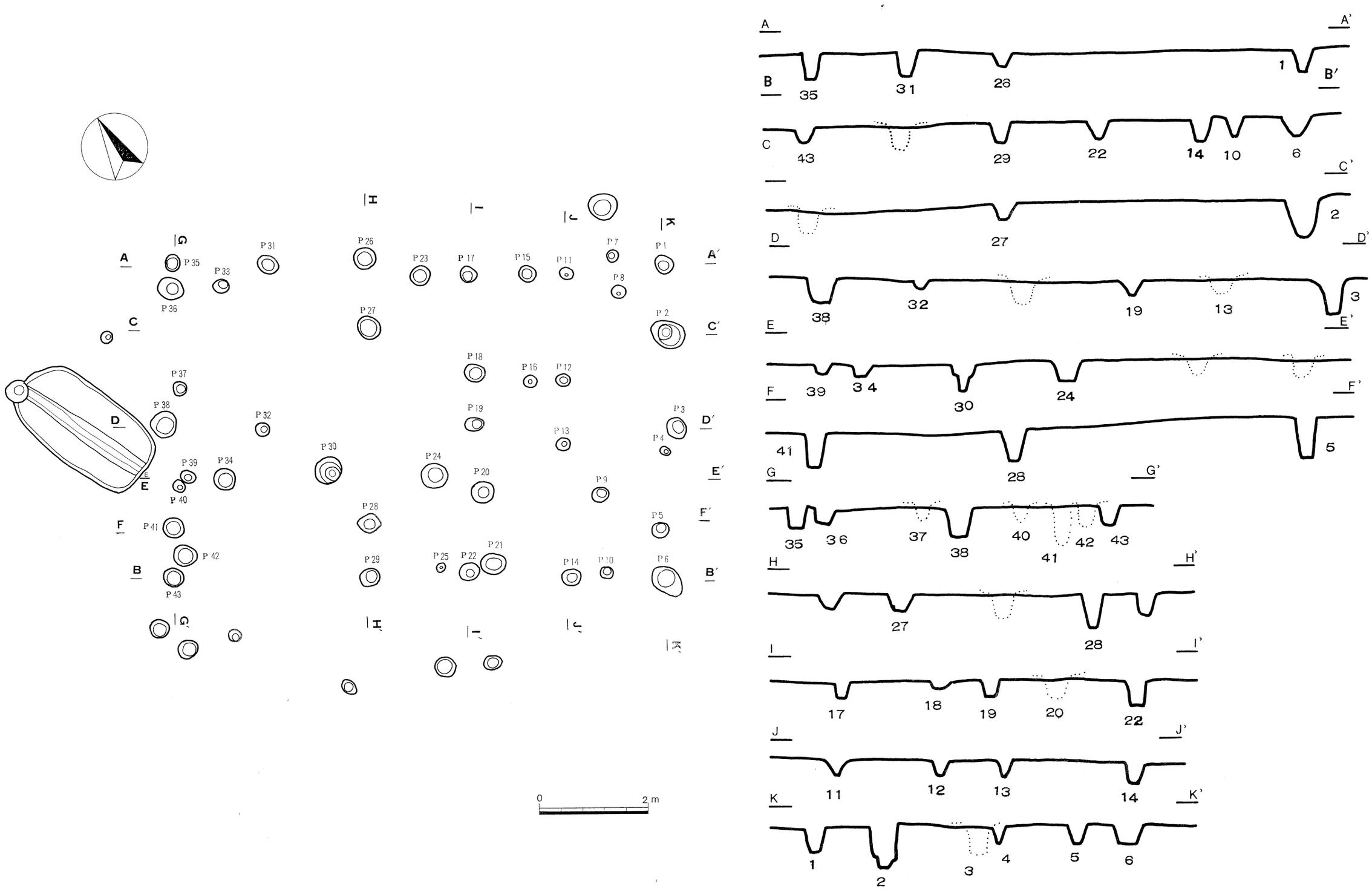
主軸はN—27°—Eで、P12を棟柱とし、東へP12からP4が1間、西へP24からP17までも同じように1間測られる。庇の柱穴P1とP4が3尺、P17とP24も3尺を測られるところから、梁行はP1 P4 P12 P17 P24が3間（5.4m）西の一番外側の柱列である側通りP24～P28が5間（9m）測るところから、遺構の規模は桁行5間× 梁行3間と考えられる。柱穴P6とP21は長楕円をうがち、2間の間隔を持ち、5号掘立と時期の異なる柱穴で、5号掘立以外の建物の一部、例えば門のようなものに使用された柱穴と推考される。

第5表　5号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

No.	形　状	規　模	深さ	底標高	備　考	No.	形　状	規　模	深さ	底標高	備　考
P 1	不整円形	32×28	54.0	589.24		P15	楕円形	36×23	58.5	588.84	
2	不整円形	32×28	34.5	589.41		16	円　形	34×33	42.5	589.00	
3	不整円形	28×26	31.5	589.34		17	不整円形	32×30	51.0	589.19	
4	円　形	40×40	61.5	589.15		18	円　形	36×34	67.5	589.02	
5	円　形	20×20	22.5	589.46		19	不整円形	28×28	57.0	589.04	
6	楕円形	160×36	41.1	589.33		20	不整円形	28×24	39.5	589.21	
7	不整円形	34×30	57.0	589.19		21	楕円形	168×46	43.0	589.14	
8	不整円形	28×24	51.1	588.99		22	円　形	25×25	36.0	589.17	
9	不整円形	50×46	43.5	589.30		23	不整円形	28×24	38.5	589.06	
10	円　形	20×18	20.5	589.53		24	円　形	22×20	39.2	589.21	
11	楕円形	44×36	24.6	589.44		25	円　形	30×28	98.5	589.35	
12	円　形	40×38	56.5	589.20		26	不整円形	24×20	44.1	589.16	
13	円　形	38×36	64.5	589.09		27	不整円形	28×26	39.0	589.05	
14	円　形	46×44	38.0	589.34		28	円　形	18×18	34.6	589.05	



第11図　5号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第12図　6号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

f) 6号掘立柱建物遺構

主軸はN—59°—Wで、P3とP38を棟柱とし、P2とP3、P3とP5は1間を測り、庇の柱穴はP1～P2が4尺、P5～P6は3尺を測る。P2に対する西側の柱穴は検出されなかったが、本遺構の規模は桁行5間×梁行3間と考えられる。P5に対する庇の入側通りの柱穴P41から石臼（第27図）が出土している。

第6表　6号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

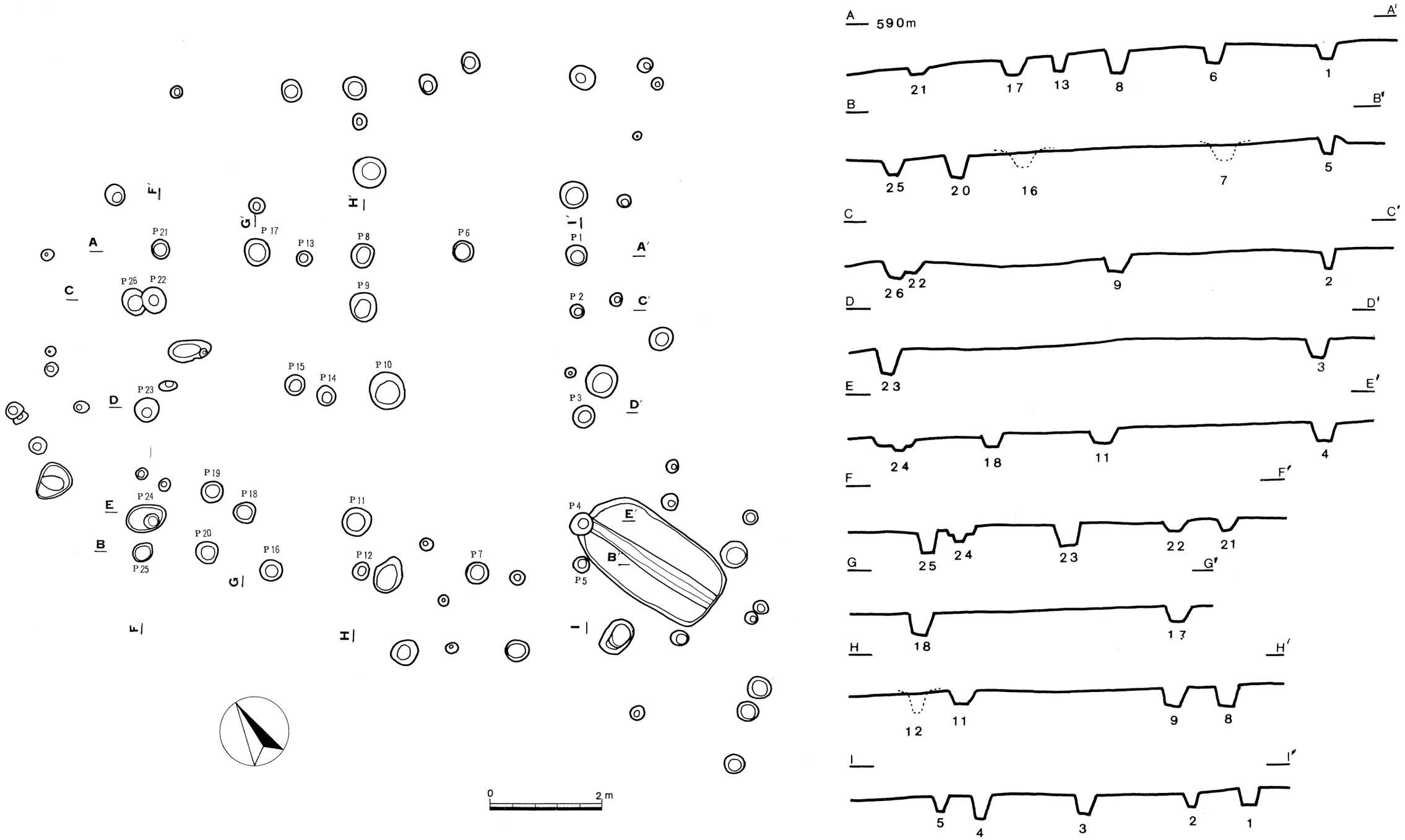
No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
P 1	円形	30×30	34.7	589.08		P23	円形	36×36	18.3	589.37	
2	不整円形	64×52	71.5	588.82		24	円形	48×48	38.0	589.09	
3	円形	40×38	70.5	588.87		25	不整円形	20×18	36.9	589.09	
4	不整円形	20×18	32.0	589.20		26	円形	40×40	24.0	589.28	
5	不整円形	32×28	73.0	588.82		27	不整円形	44×42	30.3	589.21	
6	楕円	128×86	38.2	589.15		28	不整円形	38×34	65.7	588.80	
7	円形	24×22	23.3	589.34		29	不整円形	36×32	39.2	589.06	
8	不整円形	28×26	29.0	589.28		30	不整円形	54×52	54.5	588.89	
9	不整円形	32×28	48.0	589.04		31	不整円形	40×36	48.2	589.11	
10	円形	24×24	38.8	589.12		32	円形	26×24	15.5	589.29	
11	不整円形	28×24	51.3	589.09		33	不整円形	28×24	48.2	589.11	
12	円形	28×26	29.0	589.25		34	円形	42×42	24.0	589.16	
13	不整円形	28×26	26.5	589.26		35	円形	30×28	45.2	589.11	
14	不整円形	36×28	42.7	589.07		36	不整円形	48×42	28.7	589.20	
15	円形	32×30	16.8	589.44		37	円形	28×26	16.5	589.26	
16	不整円形	26×24	16.5	589.37		38	不整円形	50×48	54.5	588.90	
17	不整円形	30×28	29.8	589.26		39	不整円形	28×24	25.5	589.05	
18	不整円形	38×34	23.5	589.28		40	円形	24×24	34.0	589.07	
19	不整円形	36×26	29.5	589.22		41	不整円形	40×36	68.5	588.72	石臼出土
20	円形	44×42	37.5	589.12		42	不整円形	44×36	38.8	589.01	
21	不整円形	48×40	53.7	588.93		43	円形	38×36	29.8	589.10	
22	不整円形	38×34	32.8	589.09							

g）7号掘立柱建物遺構

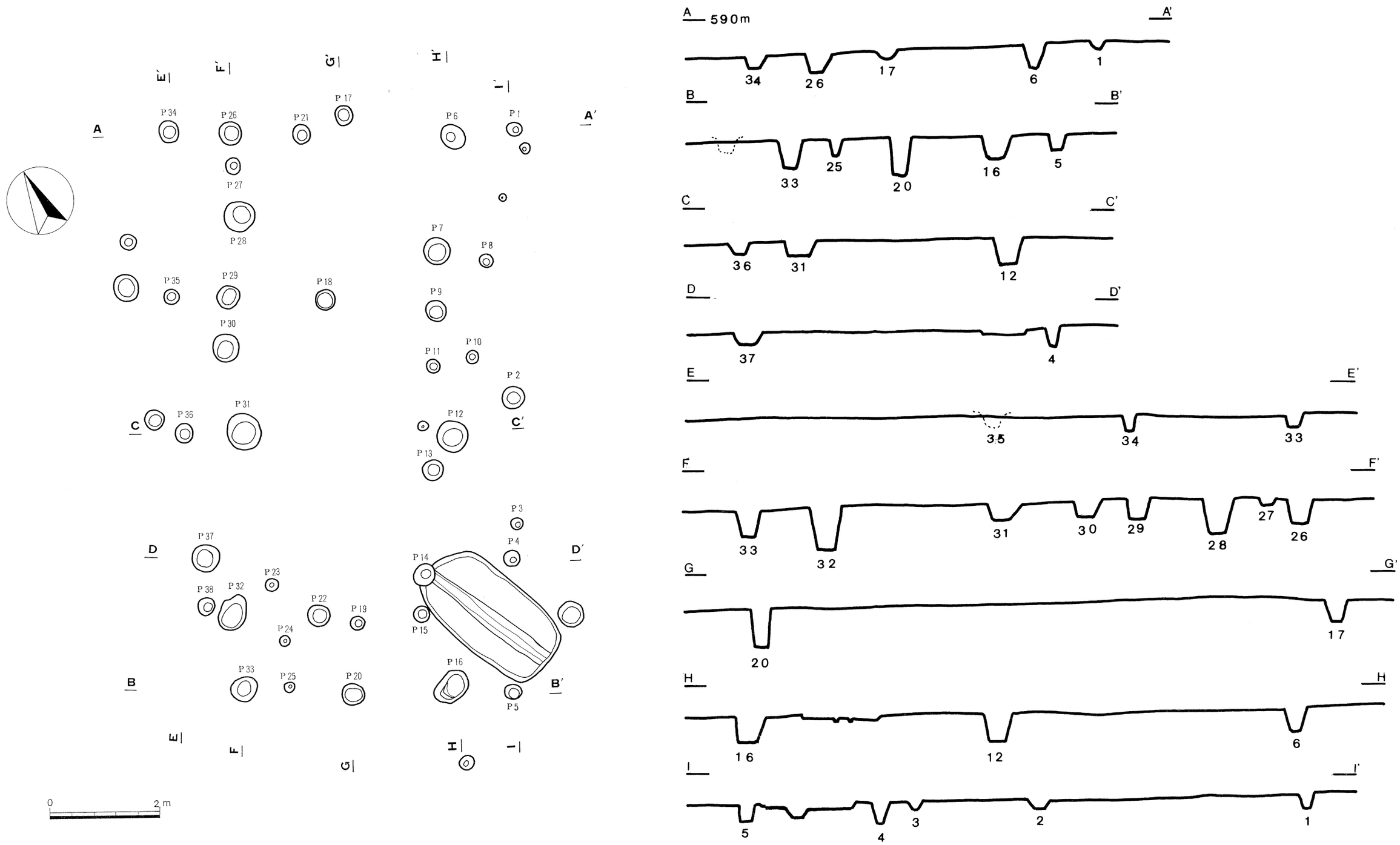
N－56°－W を主軸とし、P 3 とP 23を棟柱とし、P 2 とP 3 、P22とP23はそれぞれ1間を測り、P 3 とP 4 、P23とP24も1間の等間隔をもつ。P 1 とP 2 、P21とP22を結ぶ庇の側通りと入側通りの柱穴間は3尺～4尺を測り、P 4 とP 5 、P24とP25を結ぶそれは、2尺を測る。本遺構は桁行4間（7.2 m)×梁行3間（5.4 m）の建物址と考察される。

第7表　7号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
P 1	不整円形	38×34	27.5	589.24		P14	円形	30×30	21.0	589.12	
2	円形	24×24	21.7	589.40		15	不整円形	36×32	42.0	588.91	
3	円形	36×36	37.8	589.10		16	不整円形	40×36	18.8	589.01	
4	不整円形	44×40	44.5	589.03		17	不整円形	52×48	29.5	589.05	
5	円形	28×26	29.0	589.15		18	不整円形	40×38	29.5	588.97	
6	円形	36×36	32.0	589.18		19	円形	38×38	22.5	589.02	
7	円形	40×40	30.5	589.07		20	不整円形	44×42	38.5	588.81	
8	不整円形	44×40	38.0	589.04		21	円形	34×32	25.0	589.02	
9	不整円形	48×44	33.5	589.07		22	不整円形	48×44	19.5	589.06	
10	不整円形	66×60	26.3	589.11		23	不整円形	48×44	43.7	588.80	
11	不整円形	52×48	24.0	589.09		24	円形	28×28	21.3	588.96	
12	不整円形	34×28	34.8	588.96		25	不整円形	40×36	34.5	588.77	
13	円形	28×28	30.0	589.05		26	不整円形	50×44	24.8	589.00	



第13図　7号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第14図　8号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

h）8号掘立柱建物遺構

本遺構は7号掘立柱建物遺構と同じ区域に認められる。主軸はN—29°—Eで、P17とP20を棟柱とし、桁行は6間（10,8m）を測る。棟柱を中心にP6P26は1間、P1とP6は4尺、P26とP34の庇は3尺を測る。梁行はP1とP34で3間3尺（6.4m）である。P6P26とP12P31、P16とP33は他の柱穴に比較して、特に大きく、P12はP6P16を結んで3間を測りP31もP26P33の中央に位置し、3間を測ることが出来る。

第8表　8号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm　他はcmで表わす）

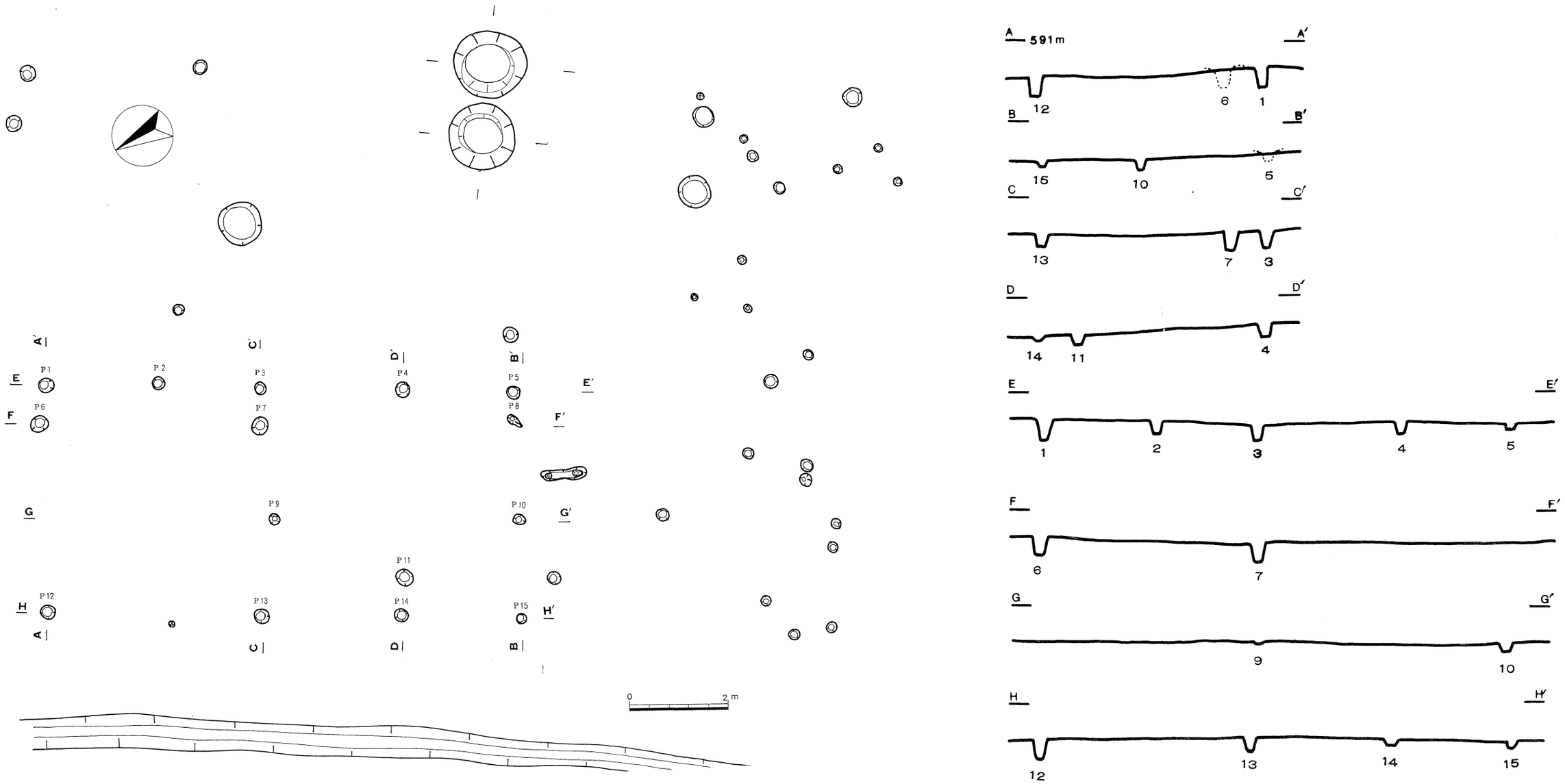
No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
P 1	不整円形	28×26	25.0	589.41		P20	不整円形	44×40	71.0	588.64	
2	円形	44×42	18.5	589.34		21	不整円形	40×30	24.5	589.30	
3	不整円形	26×24	42.2	589.05		22	円形	40×40	30.5	589.07	
4	不整円形	32×28	39.7	589.09		23	円形	24×24	24.0	589.13	
5	不整円形	32×28	32.0	589.11		24	円形	20×20	13.8	589.18	
6	楕円	50×42	54.0	589.12		25	不整円形	22×20	31.3	588.98	
7	不整円形	52×48	18.7	589.40		26	円形	44×42	44.8	589.00	
8	円形	28×26	27.0	589.34		27	不整円形	32×28	9.2	589.34	
9	不整円形	40×36	27.5	589.24		28	不整円形	60×56	58.5	588.88	
10	不整円形	26×24	28.0	589.33		29	不整円形	44×42	38.0	589.04	
11	円形	28×26	21.7	589.40		30	不整円形	56×48	33.5	589.07	
12	不整円形	60×58	53.3	588.96		31	不整円形	70×64	26.3	589.11	
13	円形	40×40	37.8	589.10		32	楕円	68×48	88.7	588.44	
14	不整円形	44×40	44.5	589.03		33	不整円形	48×46	49.5	588.74	
15	円形	28×28	29.0	589.15		34	不整円形	40×36	31.2	589.10	
16	不整円形	68×50	43.0	588.94		35	円形	28×28	30.0	589.05	
17	不整円形	36×32	58.2	589.02		36	不整円形	36×32	21.0	589.12	
18	円形	40×38	32.0	589.18		37	円形	52×52	24.0	589.09	
19	不整円形	28×26	16.0	589.25		38	不整円形	32×30	34.8	588.96	

i) 9号掘立柱建物遺構

主軸はN—29°—Eを測り、P 6 P 12とP 8 P 15の間は2間を測り、東側の庇の柱穴は、P 1とP 6、P 3とP 7、P 5とP 8の間はそれぞれ2尺～3尺を測り、西側に並ぶP 12、P 13、P 14、P 15の柱列を庇の入り側通りとすれば、2尺～3尺隔てて平行に側通りの柱穴がなくてはならないが、検出されなかった。この遺構は、4号、5号、6号と同じ桁行5間（P 1～P 5とP 12～P 15）梁行3間と推定したい。

第9表　9号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

No.	形状	規模	深さ	底標高	備考	No.	形状	規模	深さ	底標高	備考
P 1	不整円形	32×30	43.7	590.00		P 9	不整円形	25×24	5.1	590.22	
2	円形	29×28	24.7	590.13		10	不整円形	27×20	18.6	590.02	
3	不整円形	25×23	35.6	589.93		11	不整円形	36×33	26.6	589.95	
4	不整円形	32×28	32.4	590.05		12	不整円形	32×30	46.9	589.78	
5	不整円形	28×26	9.9	590.21		13	不整円形	30×29	26.3	589.98	
6	不整円形	37×30	38.6	590.04		14	円形	29×26	10.6	590.08	
7	楕円形	39×36	42.0	589.87		15	円形	20×20	13.2	590.03	
8	不整形	37×17	6.0	590.21							



第15図　9号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

堀（第２、16、17図。図版17～19）

堀は推定地を含めると四ケ所あり、いずれも尾根の真横方向よりやや南に傾いて延びている。

北堀（第２、16、17図。図版17～19）

北堀は工場の北（Ａ区）に位置し、工場とほぼ平行して東西方向に延び、城域の北限にあたると考えられる。

発掘調査前の聞き取り調査で、この附近は耕作中、馬がすべったり足をとられたりした、「ぬかる田」と言われる湿田が一部にあったそうである。発掘調査の結果、北堀は聞き取り調査で「ぬかる田」とされた場所の下に発見された。

調査範囲は聞き取り調査でわかった「ぬかる田」附近を中心にして行なったが、西側の斜面よりは雨天時の出水が多く危険であったので充分な調査ができなかった。東は調査区域外の為調査できなかった。

当初、この北堀は尾根を東西にはしり「城」の内外（南北）を完全に分断するものと考えていた。しかし、東側はしだいに高くなり堀はとだえて、代りに浅い溝状の遺構が南と東の調査区域外へ延びる。

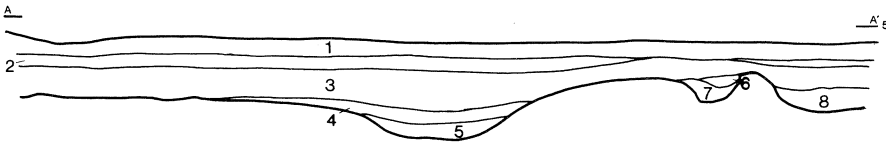
平面確認した堀の規模は東西約75ｍ最大巾９ｍ、そのうち、完掘したのは東西45ｍで表土からの底の深さ、約２ｍ～４ｍを計る。

形状は薬研にちかいが堀底が１ｍ前後ある。法面は北側がややきつく底からの勾配は約10度で、南も約10度である。第16図北堀土層図Ｃ～Ｆの各土層の１層より上には、更に発掘調査前の水田（現水田）の床土及び表土があった。また、この堀は現水田の下より、前に１～２度水田になっていた形跡がある。即ち、Ｃの第２層、Ｄの第４層、Ｅの第４層、Ｆの第２層、が「ニガ」と呼ばれる水田の床土の跡である。

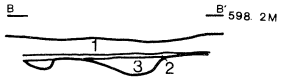
遺物は覆土中から全く出土せず、僅かに耕作土中から時期不明で火縄銃の弾と考えられる「鉄玉」が１個出土しただけであった。この為この堀の時期について断言できないが規模、形状などから戦国末に比定できるものと思われる。

南堀及び堀推定地（第２図参照）

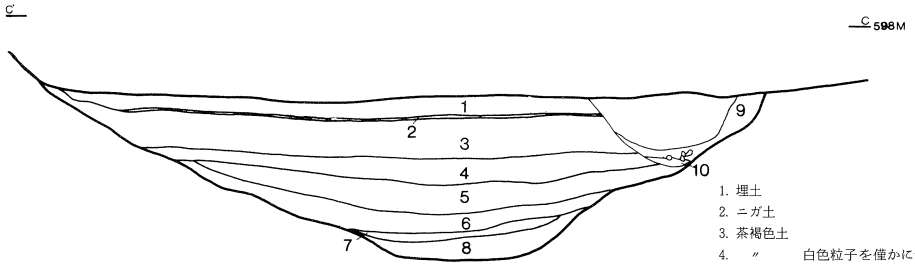
南堀はＢ区の南、調査区域外との境にあたり主要部分は調査区域外になっている。トレンチの一部に堀の法面の断面が発見されたが調査区域外との境に位置する事や、出水が多く危険な為、また調査期間の都合により充分な調査が出来なかった。この堀の更に南に聞き取調査で堀と推定できる「ぬかる田」があることが判っている。また、工場の駐車場附近にも堀と推定できる「ぬかる田」がある事が判っている。



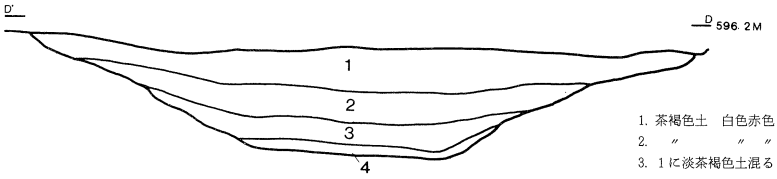
1. 耕作土
2. 黄色の強い茶褐色色土　ニガ土
3. 茶褐色土　細い白色の礫を含む
4. 茶褐色土　〃　3より礫が多い
5 茶褐色土　4より色が濃く　粘性あり
6. 灰茶褐土　粒子が細かい
7. 茶褐色土　粒子が荒い　パサパサしている
8. 茶褐色土　細い礫を含む　3より色が濃い



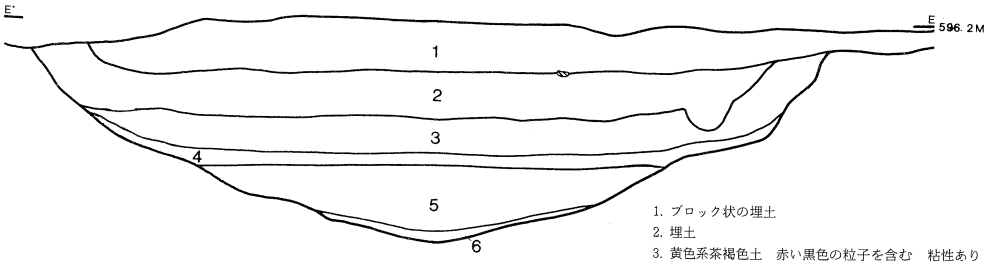
1. 耕作土
2. 床土
3. 灰茶褐色土　細い白色の礫と茶色の粒子を多く含む



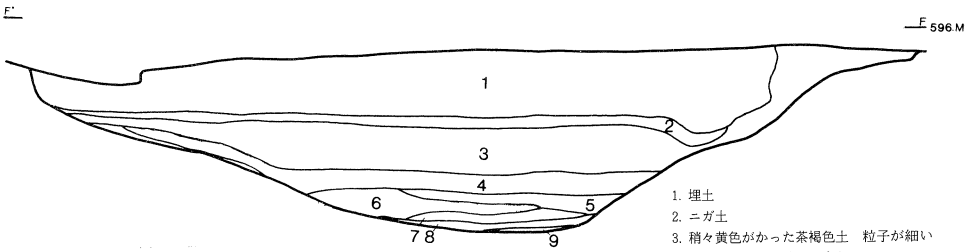
1. 埋土
2. ニガ土
3. 茶褐色土
4. 〃　白色粒子を僅かに含む
5. 茶褐色土　4より色が濃い
6. 茶褐色土　礫を多く含む
7. 茶褐色土　白色粒子　細い礫を僅かに含む
8. 〃　白い礫を多く含む
9. 灰茶褐色　粘性あり
10. 〃　砂を多く含む



1. 茶褐色土　白色赤色　黒色粒子を含む
2. 〃　〃　〃　〃1より稍々締まり有り
3. 1に淡茶褐色土混る
4. 茶褐色土、白、赤、茶色の粒子を多く含む



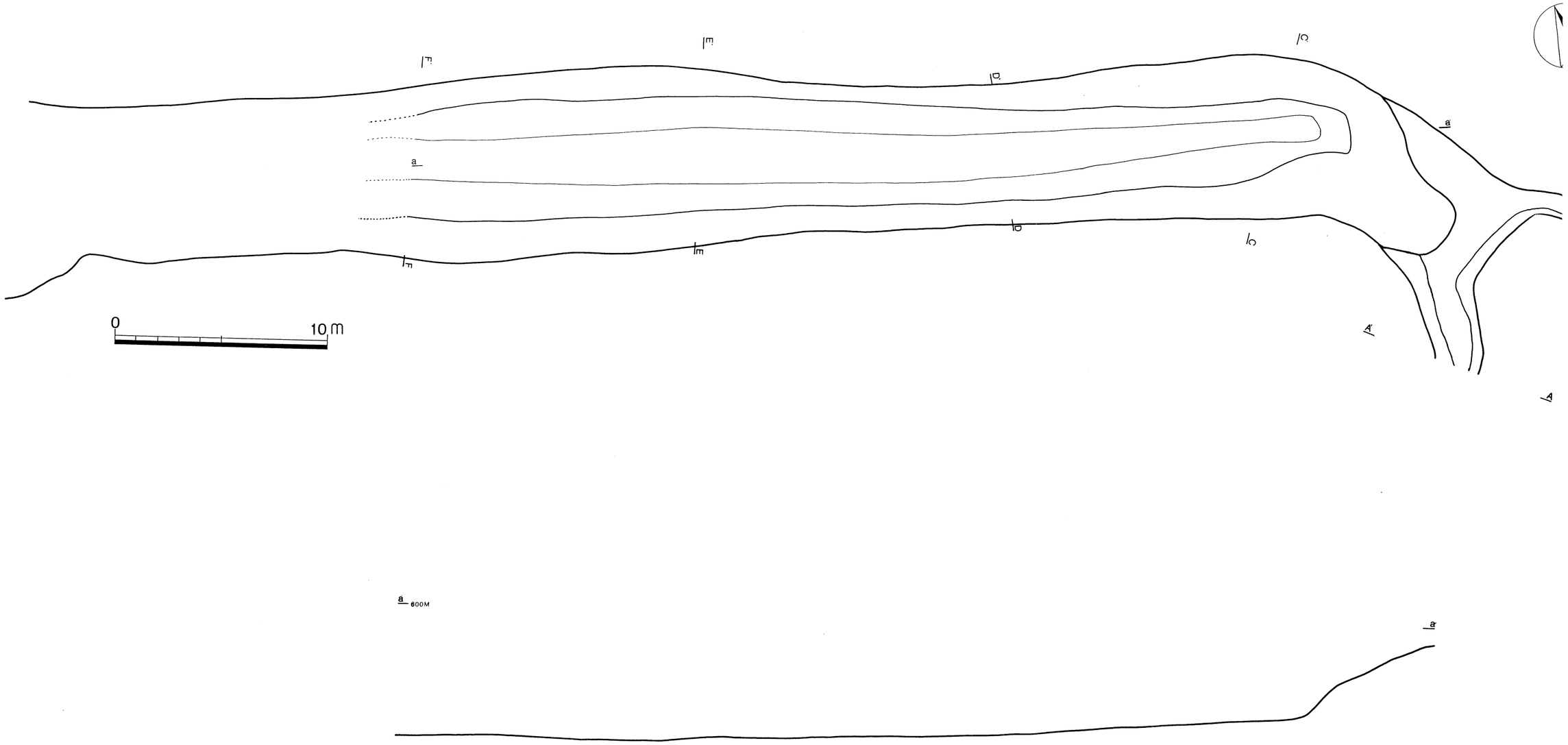
1. ブロック状の埋土
2. 埋土
3. 黄色系茶褐色土　赤い黒色の粒子を含む　粘性あり
4. 茶褐色土　黒色の粒子を多く含む
5 茶褐色土　細い礫を含む
6. 黒褐色土　砂を多く含む



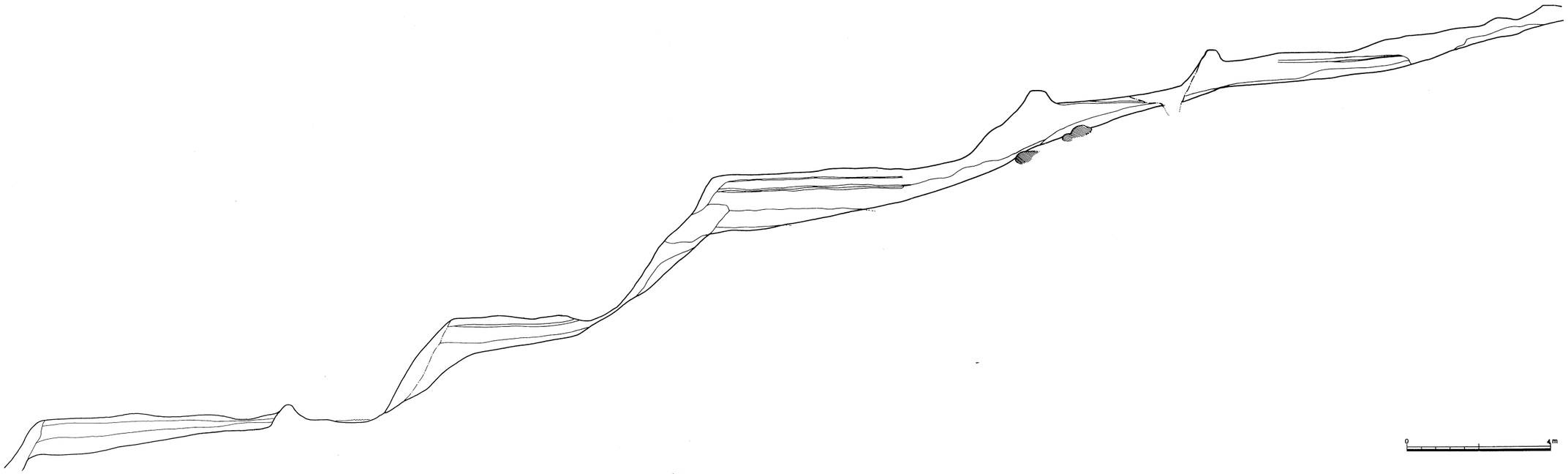
1. 埋土
2. ニガ土
3. 稍々黄色がかった茶褐色土　粒子が細い
4. 茶褐色土　白色粒子を含む
5. 淡茶褐色土　白色粒子を含む
6. 黒色がかった茶褐色土　粘性あり
7. 茶褐色土　粘性あり
8. 淡茶褐色土　粘性あり
9. 淡茶褐色土　砂粒子を多く含む

0　2m

第16図　北堀土層図



第17図　北堀平面図及び東西断面図



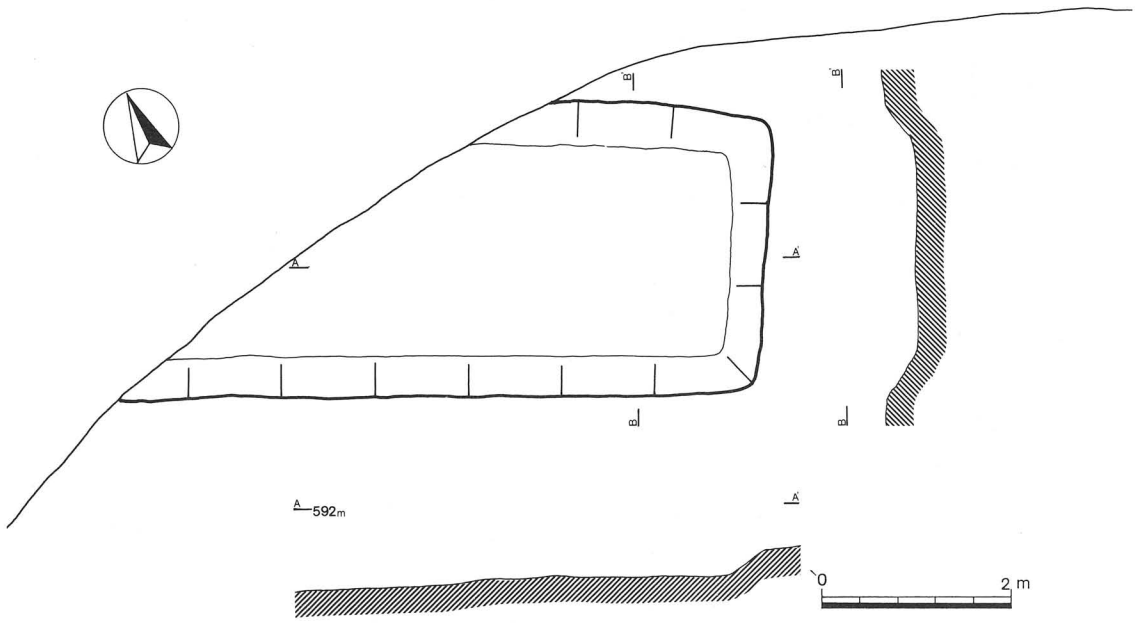
第18図　トレンチ

トレンチ

推定地を含めて４ケ所の堀が尾根を東西に走るところから、西斜面に堀、土塁、帯郭、水路等々の遺構の検出を目的に西斜面に沿って５本のトレンチを設定し調査したが、開墾による撹乱と、田普請造成に伴う削平などによって、破壊若しくは消失したものと思われ、どのトレンチからも遺構を検出することは出来なかった。西斜面に設定したトレンチの内、第一トレンチは、42ｍ93cm と最も長く、Ｂ区南側から西の斜面に沿って雛段状に造成されている３枚の田圃から調査区域内の境までとした。Ｂ地区の平坦地から西斜面の調査区域の境までの比高は11mを測る。トレンチを斜面が削平の著しい箇所と耕作が行われていた平坦地な箇所を５つの区域に分けて設定した。その層序を調査した結果、トレンチの最上部の９ｍまでの１区は地山から20°の勾配をもち、９層にあたる地山は大小の礫を含む粘性の強い茶褐色土層の上に、８層の白色粒子を含む茶褐土層が第２区の10ｍ地点に構築した土堤の盛土で切られる。盛土した土堤は耕作面から１ｍの高さで55°の勾配をもつ。10mから12mの間に崩土が見られ、１ｍの幅に地山が切られている。第２区は約2.4ｍの間は、第２層の鉄分によって黄変した灰色粘土の床土が認められ、その上を耕作土が覆う。17ｍの耕作土面から40°の勾配を持つ褐色土の盛土が続く。

３区の平垣地には二度田圃普請が行われた床土を認めることができた。耕作土の第１層は15cm～25cmで、２層の床土は５cm、第３層は褐色土の盛土で、第４層は５～６cm の小礫層、第５層は再び、灰色粘土の床土で５cm～８cm 認められる。第６層は茶褐色土の盛土で第２区の斜面を削平したものと思われる。第７層は褐色土の堆積層で、粘性が強い白色粒子を含む第８層が続く。第８層は５cm 程の厚さで1.5ｍ程認められるが、第４区との境の傾斜に構築した盛土で切られる。傾斜地の盛土は３層に分れ、耕作土から続く１ｍの傾斜の盛土は褐色土で、第７、８層を切る盛土は礫を混入して、第４区の全体に見られる盛土へ続く。第８層は26m～27,5ｍの間、削平されている。３区と４区の傾斜は約50°の勾配をもつ。第一層は耕作土で、鉄分によって黄変した床土が７～８cm を測る。４区の傾斜上に構築された耕作地の幅は3.5ｍであるが、第８層は２ｍの高さに50°の削平をうけている。削平した第８層を崩土が厚く覆う。地山を2.4ｍの幅に削り取り、底の部分は水溜りとなっている。５区は調査区域の境までで、第８層を削平した土を盛土した思われる土層が41m～43mの地点に認められている。５区の耕作土範囲は幅約７ｍ、15cm～25cm の厚さを持ち、次に黒色粒子を含む茶褐色土の下に、盛土が見られる。盛土は黒褐色土と、白色粒子の含まれる茶褐色の第８層を削平した土を盛土した部分とに分けられる。

耕作地として活用されて来た西斜面の削平された平坦地は、県内の山城の中腹に見られる帯郭や、土塁などが設置されるにふさわしい場所と思える。



第19図　堀状遺構

堀状遺構（第19図）

Ｂ区の北端で、１号溝の北西に位置し、北と北西は調査区域外にあたる。遺構は西側を残し完掘出来なかった。プランは長方形で主軸はＥ－23度－Ｓと東南東に傾斜している。

規模は、南北3.1ｍ。東西は不明だが確認された範囲で最大6.6ｍを測る。底の深さは、30cm～40cmで底は平らだが、やや西に傾斜している。法面は北で10度、東で11度、南で11度の勾配をもつ。

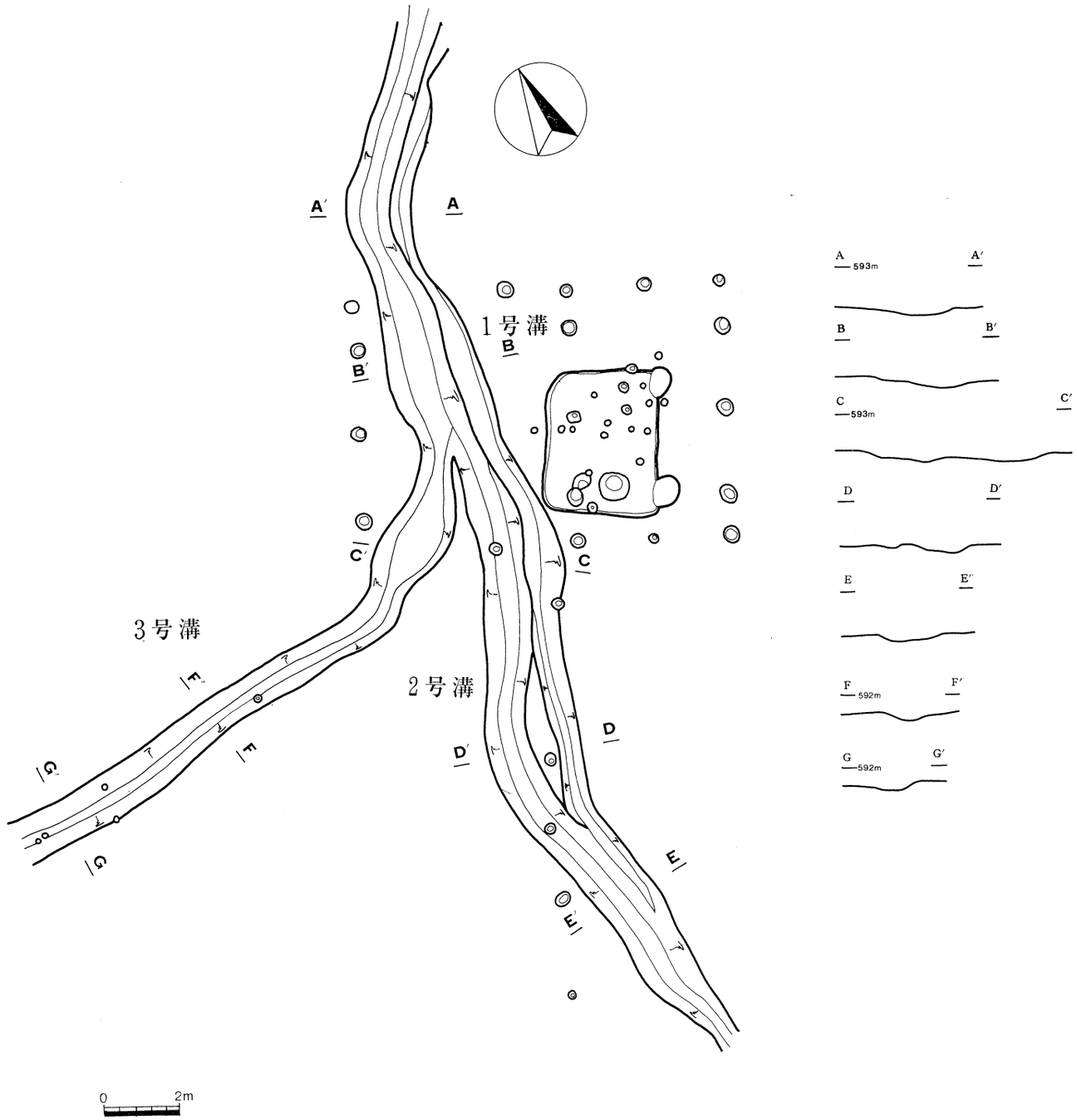
土層観察では大きくⅡ層にわかれ、自然堆積の第１層の暗褐色砂混入層が10cm～15cm位堆積した後、第Ⅱ層に30cm～25cmのブロック状の黄褐色土層がみられる。第Ⅱ層は、人為的に埋められた可能性が強い。

遺物は全く出土せず時期は不明であるが、この形態に似通ったものが若神子城（古城）の発掘調査で発見された掘りかけの薬研堀のひとつにある。この堀は「天正壬午の乱」（1582年）に比定されるもので当遺構もこの時期である可能性が強い。

溝

1号－3号溝（第20図）

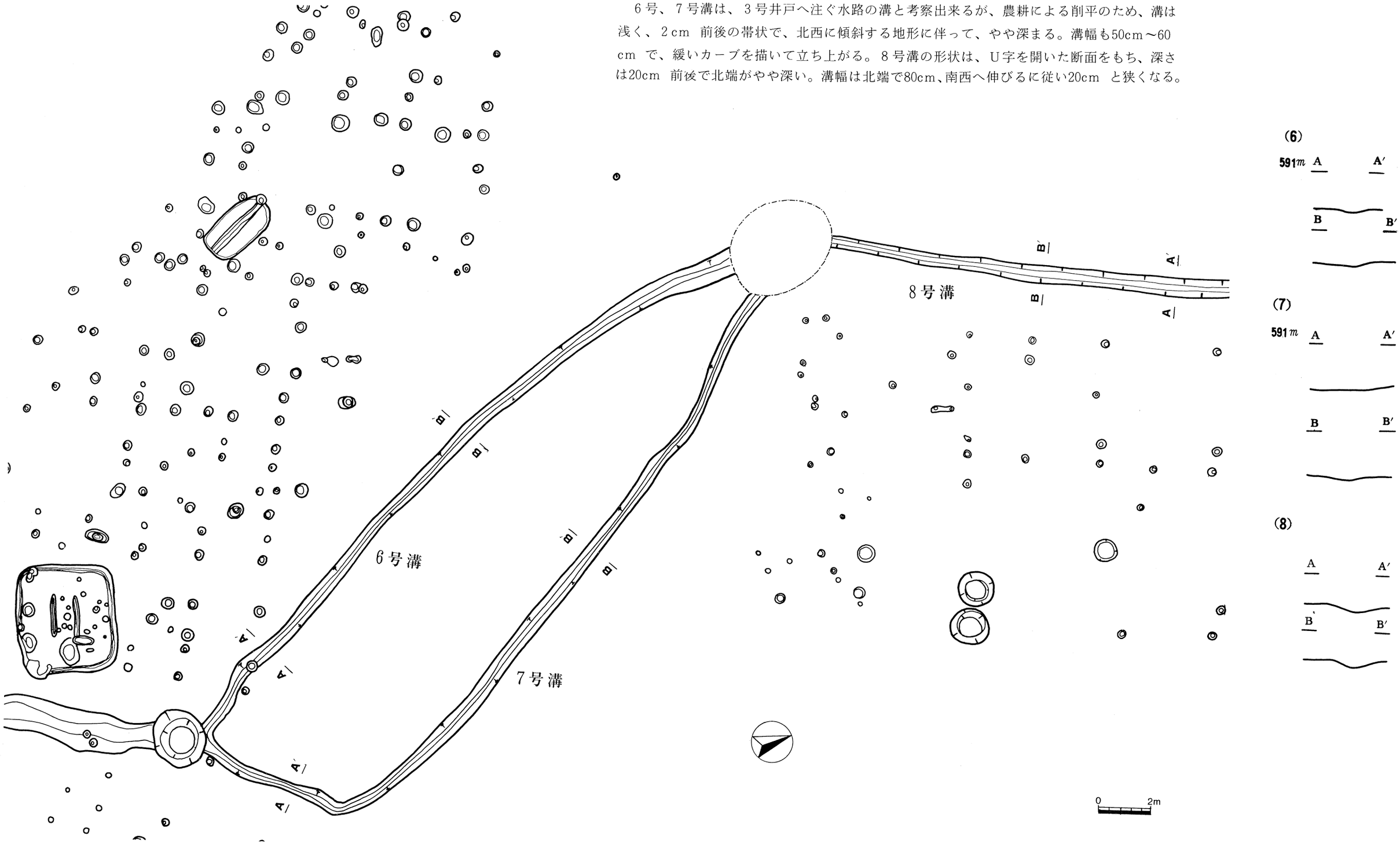
1号溝と2号溝は併行して工場敷地南側溝を起点にして検出され、1号住居址の西南隅部を通って、南東へ伸び、東側の南北に流れる農耕用水路によって切られる。3号溝は1号住居趾西側中央から約3m西より西下して、緩傾斜面に消滅する。2号溝か1号溝を切っているところから、始めに1号溝が流れ、何らかの理由で2号溝を掘ったものと考える。3号溝は2号溝より浅く全体に溝幅も狭い。2号と3号溝の床面は、礫が認められ、礫の下に砂が薄く堆積する個所が、2号、3号溝が分岐する地点から北で検出されている。2号3号共に緩い傾斜を持つV字状で、2号溝は最大幅1.6mの広い個所もあるが概して1m、深さは、3号溝と分れる6m前後は18cmから20cmで、南へ向うに従い12cmとなる。3号溝は、2号溝と交わる地点で約1.7mの溝幅をもつが1mから1.2mで西へ緩いカーブをえがき、深さは中央附近で20cm、他は平均して12cmを測る。1号溝の溝幅は2号溝によって切られているため、全容は不明だが、1m前後の溝幅で、深さは12cm前後と思われる。



第20図　1～3号溝

6号－8号溝

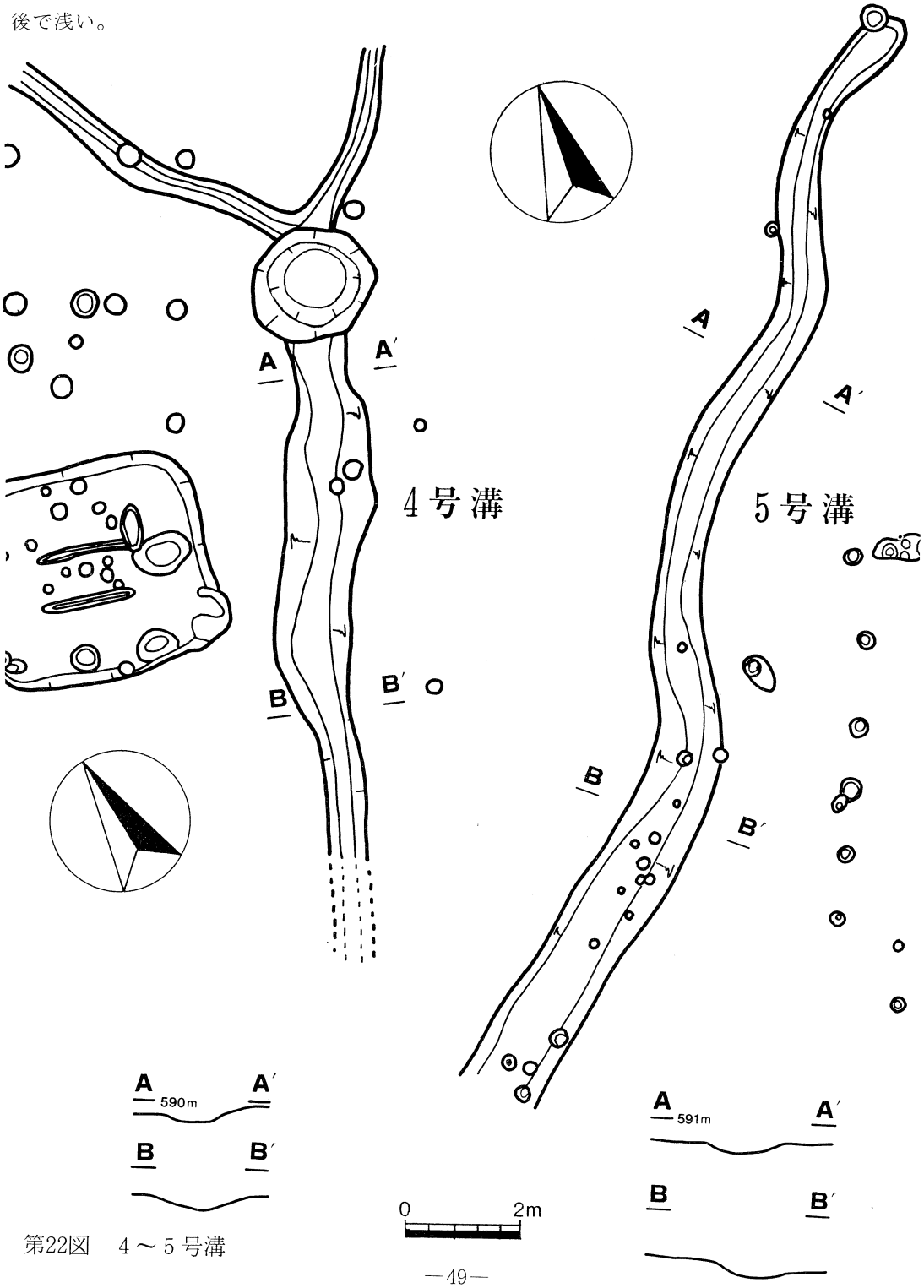
6号、7号溝は、3号井戸へ注ぐ水路の溝と考察出来るが、農耕による削平のため、溝は浅く、2cm 前後の帯状で、北西に傾斜する地形に伴って、やや深まる。溝幅も50cm～60cm で、緩いカーブを描いて立ち上がる。8号溝の形状は、U字を開いた断面をもち、深さは20cm 前後で北端がやや深い。溝幅は北端で80cm、南西へ伸びるに従い20cm と狭くなる。



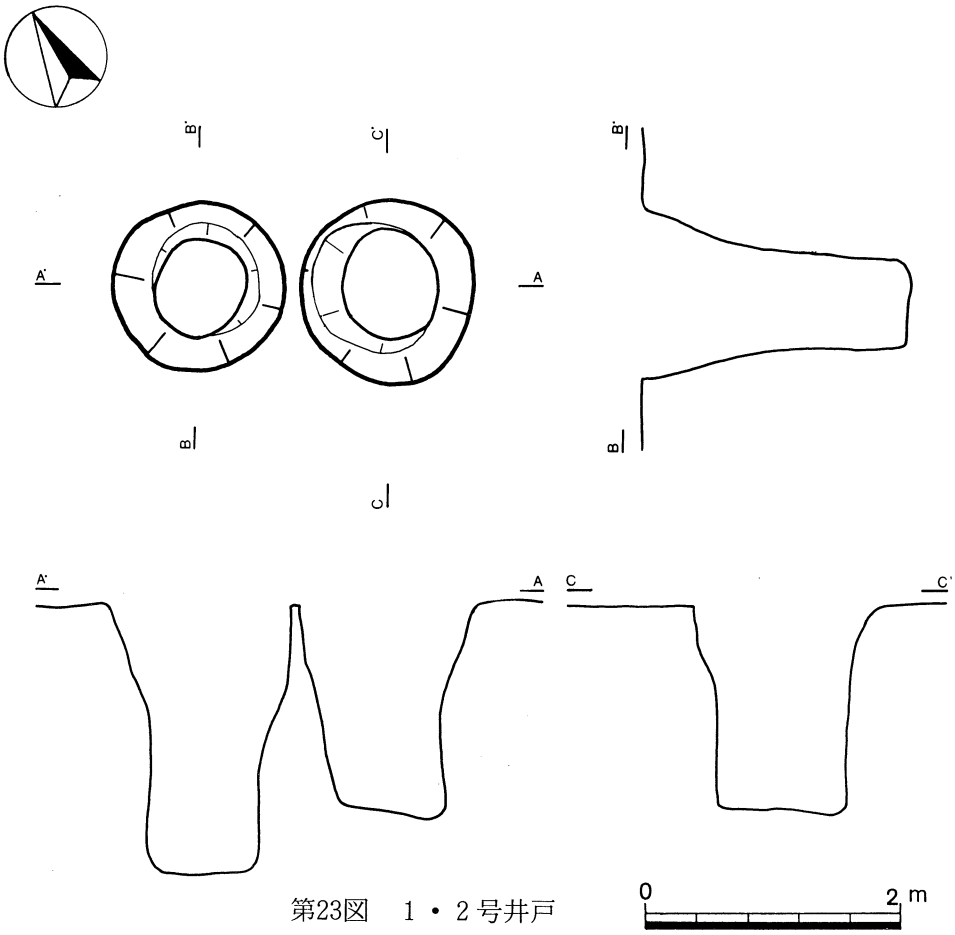
第21図　6～8号溝

4号－5号溝

4号溝は、3号井戸の排水のため設けられたと考えられる。溝幅は井戸の淵で1m、最大幅は1.6m、井戸から約6mほどから70cm と急に狭くなって南西に伸び南堀に消える。深さは井戸付近で10cm を測り、傾斜に伴い深くなり、南端で約20cm、形状は横へ広がったU字状を呈している。5号溝の形状も4号溝と同様に緩いカーブをもつU字状で、北東部では80cm の溝幅をもち、南西に降るに従い最大溝幅は1.4mと広がる。溝の深さは、10cm 前後で浅い。



第22図　4～5号溝



第23図　1・2号井戸

1号井戸・2号井戸

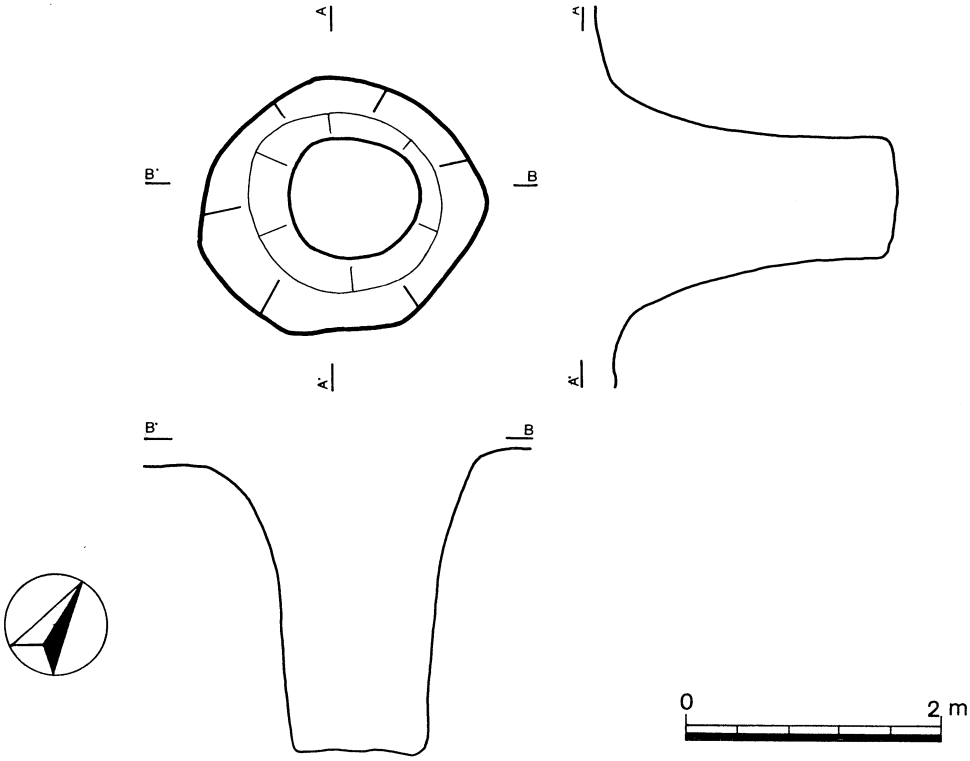
B区の北、9号掘立柱建物遺構が検出された同区域に位置する。

隣接する2つの井戸は素掘りで、高低差をつけて掘られており、平面形は円形で、底に向って漏斗状を呈している。

1号井戸の上径1.4m、下底径0.8mで、深さは確認面より約2.1mである。

2号井戸の上径1.4m、下底径0.8mで、深さは1号井戸より浅く、約1.7mで1号井戸に接する側の底はやや浅い。1号井戸では確認面から約0.6mの深さに投げ込んだと思われる大小の河原石があり、底にも2、3の石を認めた。2号井戸にも石は約0.8mの深さにあり、底に近いところからも認められた。

遺物は、1号井戸の深さ約1.6mで栗と思われる木片（4cm×25cm）1のみである。



第24図　3号井戸

3号井戸

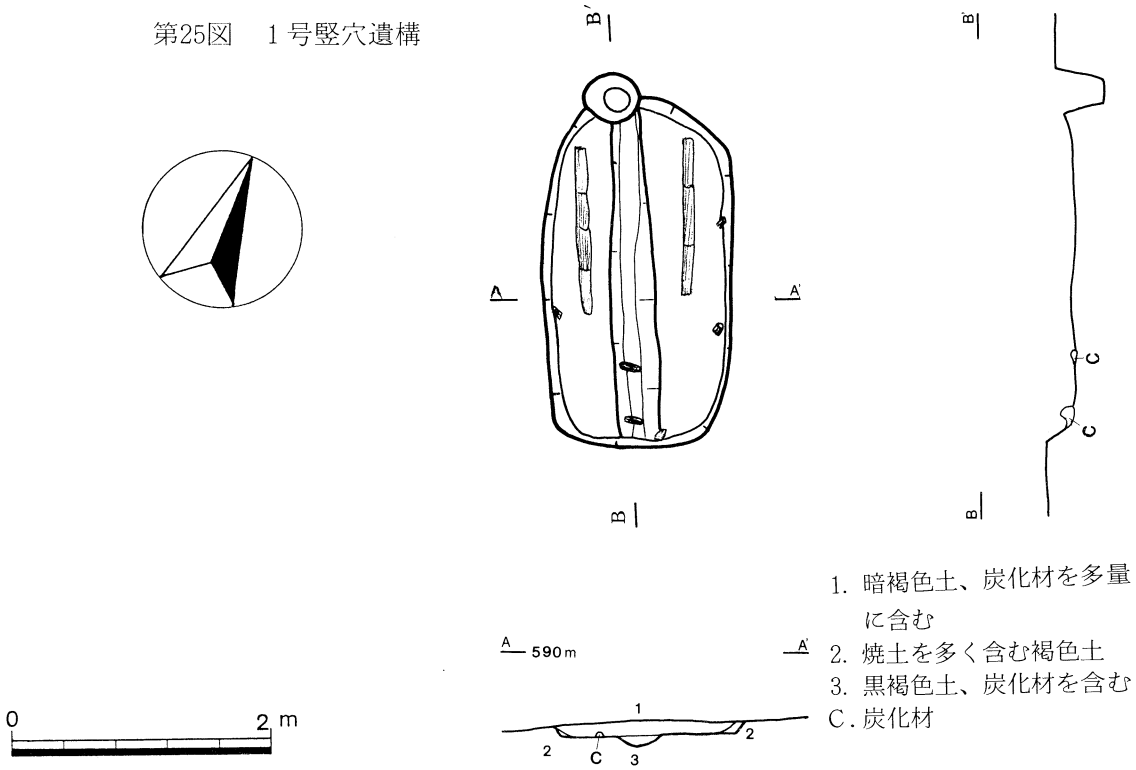
2号住居址の北東にあり、6号、7号溝が水を注ぎ、4号溝が排水のために使用されたと考えられる3つの溝を付属して掘られている。

平面形は、ほぼ円形で、1号2号井戸と同じ漏斗状に掘られ、素掘りである。
上径は約2m、下底径1.1m、深さは確認面より2.4mである。

確認面から約40cm まで、投げ込まれた河原石が埋まり、それらの集積した石の最下部から石臼〔第27図（1）〕が出土した。

更に20～30cm の深さから、1号井戸から出土した木片と同じ材質の木片が2本検出された。5cm×28cmと、5cm×26cm を測る。

第25図　1号竪穴遺構



竪穴遺構（第25、26図）（図版22～14）

竪穴遺構の形状はいずれも細長く、楕円形或いは隅丸方形をしている。いずれも竪穴内で火が炊かれ全体に焼成をうけている。覆土中には多くの炭化材がみられる。

1号竪穴遺構

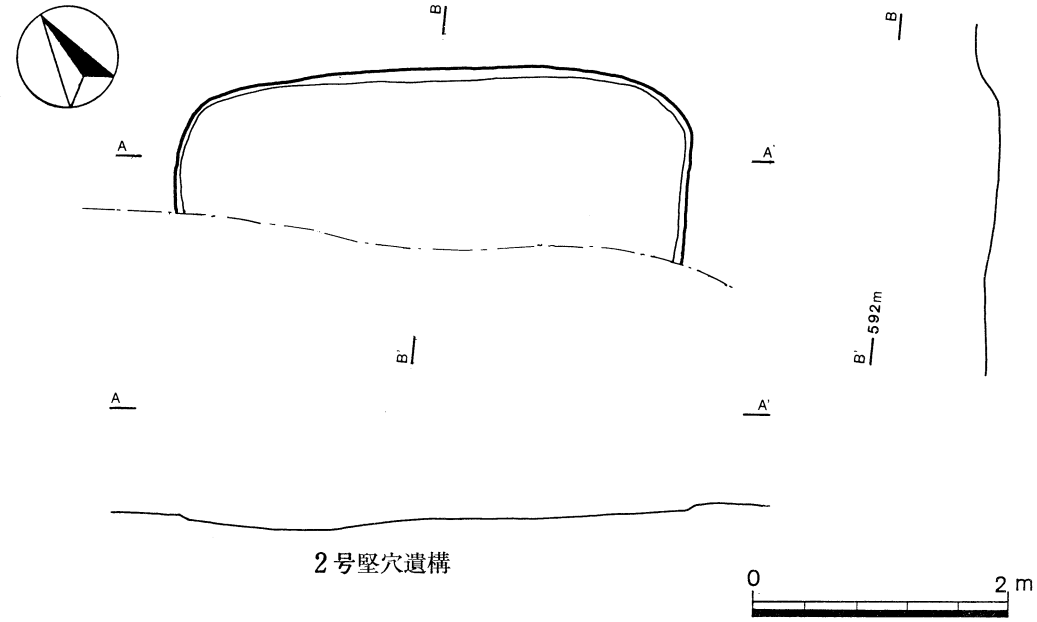
遺構は6号掘立柱建物遺構の西、8号掘立柱遺構の南西から検出され、長軸はN—21°—Wを測る。形状は隅丸方形を呈し、長軸約2m70cm、短軸約1m50cm、深さは北辺で約10cm南辺で12～13cm が測られる。床面は全体に焼成をうけており、太さ12～13cm、長さ約1,5mの2本の炭化材が覆土中から検出された。加えて、南辺中央と東辺に2ケ所、西辺に1ケ所、柱状の炭化材も検出されている。又、遺構の南北の壁を結ぶ1本の溝が発見された。溝幅は約30cmで、深さは床面から20cmを測る。出土遺物は、全く検出することが、出来なかった。遺構は、北辺のやや中央から検出された約30cm の直径をもち、深さ42cm の柱穴によって切られているところから、掘立柱建物址以前に活用された遺構と考察する。炭化材については、（3）まとめに後述する。

2号及び3号竪穴遺構

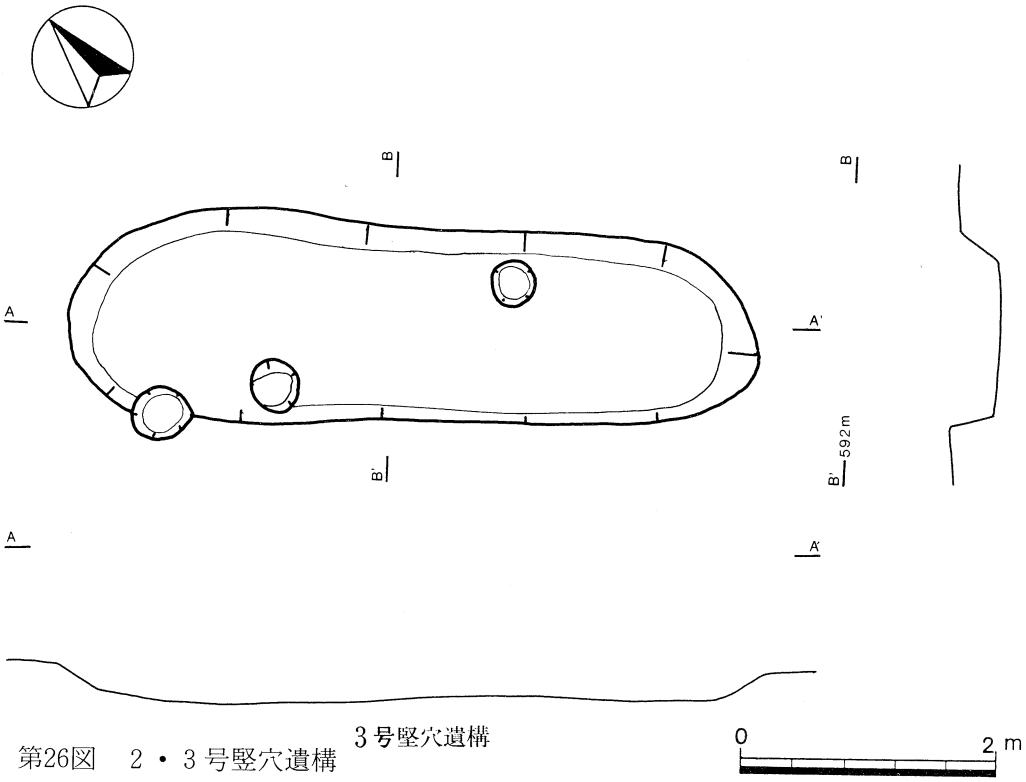
2号竪穴遺構は、4号掘立柱建物遺構の北西に位置し、主軸はN—54°—Wで、遺構の半分が耕作により削平されていた。遺構の形状は細長い隅丸方形で長軸が4mで北西から南東の向きに構築され、北西の壁の幅は90cm、南東の壁の幅は1m10cm が測られ、遺構の深さは最深部で約13cm、南東壁側で3～4cmと 浅い。長軸の北東部の壁ぎわに焼土が検出されたが、炭化材は少ない。

3号竪穴遺構は、細長い楕円形を呈し主軸はN—46°—Wで、長軸は5m40cm、短軸が北面で1m70cm、南東で1m50cmと、やや北西部が幅が広い。遺構は北から南へなだらかな傾斜

地に位置するため、深さは長軸の北側で20cm～30cm、南側で17cm～22cm を測る。底部は長軸の中央が凹状を呈し、北西部がきわだって焼成をうけていた。黒褐色の固い覆土中から炭化材が検出されている。3号掘立柱建物遺構の柱穴によって遺構の壁がきられているところから、掘立柱建物址より以前に構築されたものと推定される。

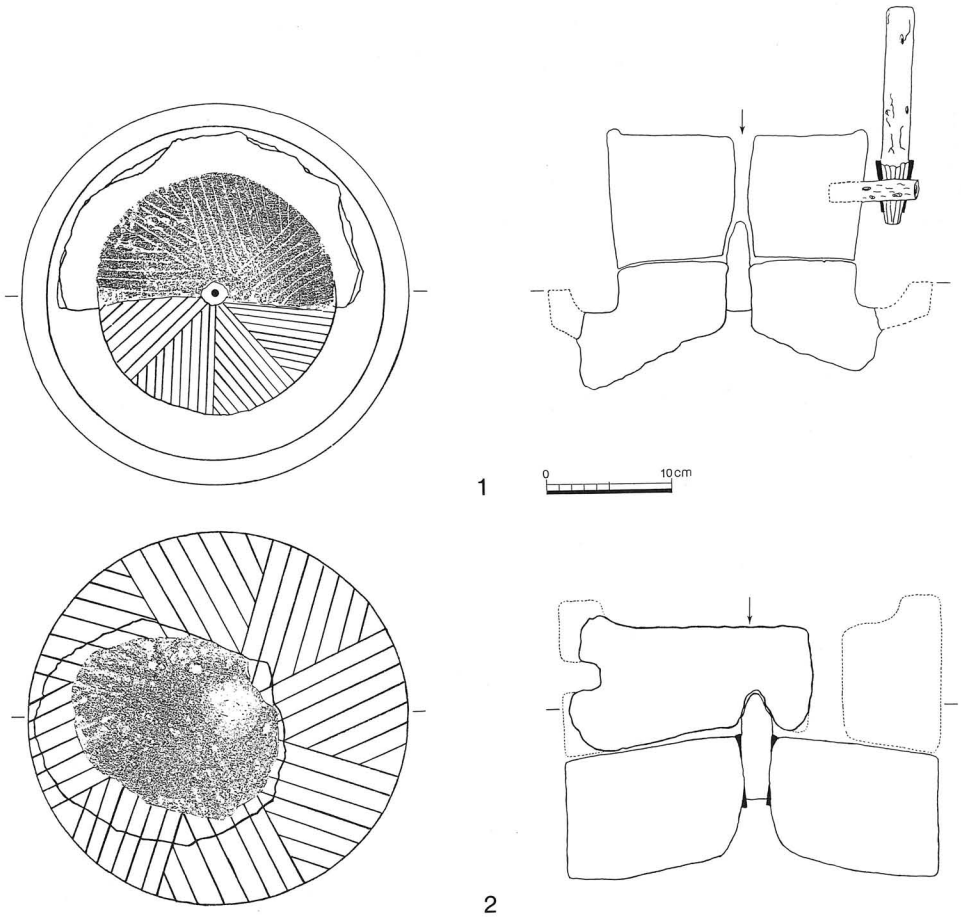


2号竪穴遺構



3号竪穴遺構

第26図　2・3号竪穴遺構



第27図　石臼実測図

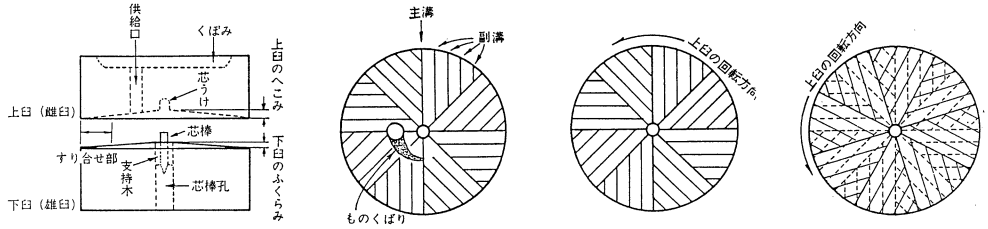
その他の遺物

石臼（1）〔第27図（1）〕

（1）6号掘立柱建物遺構のP41の底より約40cm 浮いた状態で出土した。角閃石安山岩でつくられ、多孔質粗しょう質で比較的に軽い。抹茶臼の下臼と考えられる。約1/2 が残存し、うけ台の外縁は破損している。不鮮明ではあるが、溝（目）の断面形状はV字形である。また主溝と副溝の組み合せの関係からみて微粉砕効果をねらった細目の対角平行溝で8分画（6～10溝）の反時計方向パターンであると思われる。抹茶臼の特徴としては、上臼の芯棒の孔が供給口をかねているため、芯棒と孔との間に上臼自体がずりおちない程度の遊びをもたせている。これは、作業時での上臼の動きを完全な円運動ではなく、不規則な摺動をおこさせることにより下臼のすり部の外縁（すり合せ部分）においての微粉砕効果を高めている。そのため、下臼のすり合せ部分の磨耗はかなり激しかったと思われる。これら抹茶臼の構造の仕組みから起こると思われる下臼における、すり合せ部分の激しい磨耗は、この石臼にも明確にあらわれている。信州系は六分画が多く八分画は近畿系に多い。

石臼　（２）〔第27図（１）〕

（２）３号井戸の上層部集積内より出土した。角閃石安山岩より重く、ちみつ質の輝石安山岩でつくられている。上臼の約2/5 が残存し、遺存状況はきわめて悪い。溝（目）の形式や本数や断面形状は、磨耗と破損により、明確ではなく、拓本による、わずかな陰影により８分画（７溝）、反時計方向パターンの対角平行溝と推定される。この石臼の芯の孔は、完全な中心にきておらず、微妙にずれている。また、中心附近のふくみが、部分的に大きな所がある。



第28図　石臼説明図

石臼の名称説明　①～⑥

1.主溝（Ｍａｓｔｅｒ―ｆｕｒｒｏｗｓ）。　これは、石臼の中心から放射状にのびる、基本となる溝のことをいう。

2.副溝（ＳＵｃｏｎｄａｒｙ―ｆｕｒｒｏｗｓ）。　主溝に平行に等間隔に並ぶ溝のことをいう。またこの副溝には、通気作用（ベンチレーション）がある。これは、石が熱をもつのを防ぎ、植物性の物質を変質させない作用がある。

3.分画（Ｑｕａｒｔｅｒ）。　主溝によって区分され、その１つ１つが等しいパターンによって組み合さっているものをいう。

4.ふくみ。　上下臼の外縁から中心にむけて$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$が接触しているのに対し、その場所から中心にむけて次第にひろがっていく。そこを、ふくみという。ふくみには、一旦、穀粒を含み、次第におくり出すという作用がある。抹茶臼においては、このふくみ部分が非常に小さく、なおかつ、精度を必要とするので最高の技術を要するとされている。

5.すり合せ部。　上下臼の外縁から中心にむけて$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$接触してる部分をいう。すり合せ部には、ふくみからおくり出されてきた穀粒をより細かく粉砕する作用をもっている。

6.こぼれ目。　目とり作業の際に、副溝と副溝との間に欠けやすい部分があり、それを防ぐために、あらかじめその部分に溝を入れておく。これが、こぼれ目である。このこぼれ目は本石臼には、見あたらない。

なぜ反時計方向なのか？　右手で臼をまわし、左手で穀粒を入れる作業を行なう関係上両方の手を内側へかき込むようにする方が作業しやすいためであり、また押す時に力を加えると体重をかけながら右手をまっすぐのばす方が力を入れやすいからであろう。（これは、右手利きと考えた場合である。）　清水仁量

（２）古絵図（巻頭カラー、第29図参照）

①丸茂弾正殿御在城　「甲斐国志」巻之百十二、一丸茂右衛門尉小倉村、丸茂氐ハ小笠原長清ノ後ヨリ出ヅ彼ノ譜中ニ見ユタリ身延、過去帳二妙道、逸見、小蔵丸茂右衛門尉トアル是レナリ…。弾正については不明であるが、一時期丸茂氐が中尾城を支配していたものと思われる。

②御城東つづき林石（ヘイシ石）と言う山也。山中に大道有　③此大通小倉東向境也

④東向村田地也　⑤是より上東向村分道境　⑥小倉村分　⑦八まん宮（現在あり）

⑧大蔵村　⑨上神取へ行く道　⑩市ノ口

⑪馬捨場　⑫大芝内上落口　⑬あか畑落口　⑭原、芝原、畑

⑮此堰三枝様への用成、上は　八間□□　⑯神田之墓所、古はせいばい所也

⑰村之者古屋敷跡、三軒も御座無候　⑱塩川

⑲寺ハ東向山信見院　⑳用人やしき　㉑地蔵堂　㉒孫七郎子尊堂

㉓慶長六年丑之御検地　一高弐百九拾石斗四合也（西暦1601）

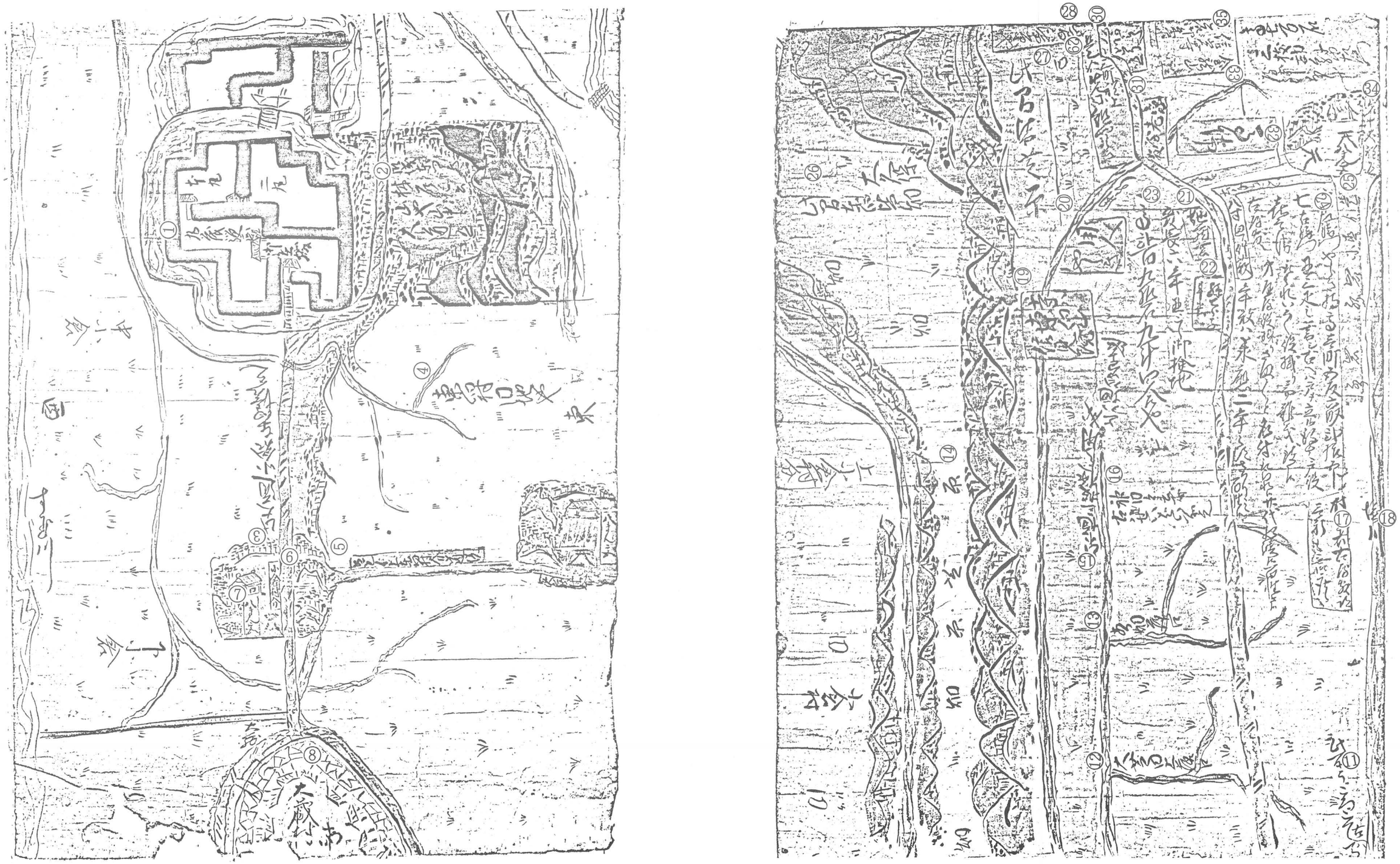
㉔市左衛門やしき持高壱町五反六畝弐拾五歩、七右衛門丑三疋之暮し右へ八戸立て候、戸役喜兵衛恥られいろいろ役掛りに而、難儀致候、古屋敷弟屋敷役掛りさまざまと名付けとられ候世代相続候、百姓に候、年数は永応二年之頃さかりの百姓に候（西暦1653年）

㉕是より直に岩なり　㉖此間東向皆畑　㉗此間皆芝原

㉘三町程上是より先に組やしき　㉙此間皆原地　㉚あみだ堂有

㉛家老屋敷　㉜馬場　㉝金龍山信光寺十七石御朱印　㉞東岩十文程有

㉟高七百石三枝勘解由左衛門屋敷なり　「甲斐国志」巻之九十七に「…三枝勘解由左衛門尉守友　虎吉ノ長男ナリ初メ宗四郎、軍鑑ニ作宗次郎奥近習六人ノ一員ナリ足軽隊将トナリ騎馬三十、足軽七十人改勘解由ト…系図永禄七年（1564）守友廿七歳為ル五十六騎ノ隊将ト云云。」また「…天正三年五月廿一日長篠二戦死ス年三十八、法名墳寺詳カナラズ…」と記されている。三枝土佐守昌吉は江戸初期の当地方の領主で、「軍鑑ニ奥近習五人ノ一人ナリ使番十二人衆トナル平右衛門ト改ム天正壬午ノ時幕府ニ謁ス起請文ニモ士隊将ノ内ニアリ任ジ土佐守ニ大坂ノ役ニ御旗奉行タリ…」。勝頼滅亡後、家康の招降の書を得てから家康に属し各所を転戦し殊功をたて、甲斐巨摩、八代両郡の内で六千石を知行した。寛永元年（1624）子六月九日、七十五才で没し枝元院に葬られた。



第29図　古絵図主要部

（3）まとめ

平安時代の遺構について

1、2号住居址は、10世紀後半代から11世紀にかけての遺構と考えられる。当地方は、9世紀後半からの集落の発見が多くなる。

開墾の時代から荘園の発生、官牧から私牧へ、そして源氏を中心とする地方武士団の成立と、甲斐国の中世を考える時、政経、軍事に亘って重要な地域にあたる。

今回発見された2軒の住居址は、その中にあって、毎年一定数の馬を宮廷に納める「駒索」の時期に該当する。

1号住居址の西に位置する1～3号溝は、1号掘立柱建物遺構より古く、特に1号溝からは平安時代の土器が数片出土している為、1号溝は1号住居址と同時期の可能性が強い。

溝は「木ノ下、大坪遺跡」の報告にも、時期不明のものとして3例ほど挙げられており、この他の末報告の中にも類例を見ることができる。

近年、鉄関係の重要な遺跡の発見がなされ、又、当地方の多くの遺跡から鉄器のほかに、グやフイゴの羽口出土例がみられることなどから、大量の鉄製の道具を必要とした開墾が広く行なわれ、溝の掘削など、予想以上の規模で行われた可能性が強く今後の調査事例に期待したい。

註① 近くに大豆生田遺跡、大小久保遺跡、湯沢遺跡がある。3遺跡とも布目瓦を出土しており、この地域が「官牧」地帯の中央に位置する事とあわせて、重要な地域であったと考えられる。

② 「延喜式」によると御牧は甲斐に3ケ所、武蔵4ケ所、信濃16ケ所、上野9ケ所、計32ケ所置かれ、甲斐では3牧で60疋、武蔵4牧で50疋、信濃16牧で80疋、上野9牧で50疋を朝廷に貢馬しており、甲斐は他国に比して規模が非常に大きかったことが　がわれる。甲斐の3.牧は、いずれも北巨摩地方に推定地をもち、武川村牧の原に真衣野牧、韮崎市穂坂町の穂坂牧、高根町念場原の柏前牧が想定されている。これらの3牧を掌握できる位置が須玉町若神子周辺にあたる。

③ 「甲斐国志」によれば、甲斐源氏は須玉町若神子に居を構えた新羅三郎義光を祖としている。

④ 昭和56年発掘調査した須玉町大小久保遺跡が山梨県初の土師製作址の発見となり、山梨編年Ⅷ期既ち、9世紀第四半世紀に位置づけられる　が出土している。

⑤ 「木ノ下、大坪遺跡」　大泉村教育委員会（1983）

⑥ 「東原遺跡」　大泉村、「青木北遺跡」　高根町、など小鍛治遺構が発見されている。原鉄の生産を諏訪地方に求められ、鉄器生産で重要な地位を占めると想定される当地方が、鉄製品による経済力、開墾能力と農業生産力の増大について、今後の事例が待たれる。

中世以降の遺構について

この城の立地は当地方の他の城に通常見られる、独立丘の頂上部、尾根の先端部、山の頂上部、尾根の最高所という場所でなく、斑山から南西方向にしだいに低くなって延びる尾根の中間部という特殊な場所にあたる。

形式は発掘調査では、はっきりしなかったが⑦絵図によれば本丸と二ノ丸の他、四カ所の郭に別れる複郭式である。

遺構の特色は⑧北と南に比較的規模の大きな堀で城を守り⑨東⑩西は河岸段丘の急崖をもって守りとしている。又、城内には⑪平坦部が多く、⑫井戸や多数の掘立柱建物址群が確認されている事などから多くの軍兵が滞陣する事が可能であったと推察される。

防御の主体は北より南方面にあったと考えられる。特に塩川側は最も守りの堅い地形をしている。反対に北は尾根をひかえ尾根からは城内を一望できる為、最も防御が弱い方向であると考えられる。この事と直接関係ないかもしれないが、この尾根上にある町営多麻団地附近の地名を「ジンガハラ」あるいは「ジンガソリ」といっている、北に弱点をもつこの城を背後で守った事の遺名であるかもしれない。城の弱点のある方向にその城が守るべき拠点や本拠がひかえ、反対に守りの堅い方面に敵の存在があったと考えるのが常識的と考えられる。尚、城の背後にある斑山には金山と推定される比較的規模の大きな⑬廃坑がある。今回確認された城域は立地、規模等から考えると戦国時代も後半のものであると推定している。

以上のことからこの城は、1，敵対する勢力が塩川対岸方面からくるもの　2，味方の拠点及び重要地が斑山から須玉川流域にあるもの　3，比較的多数の軍勢を動員させる事ができたもの、の⑭3点があげられる。これらの条件を満たすような時期は大きく2時期があげられる。まず武田家の領国形成期の最後の抗争であった。永正・享禄年間の辺見の⑮今井氏を中心とする戦いである。　この時参見できる「浦」が中尾城という説があり、『妙法寺記』には以下のような記述がある。

永正16年（1519年）当国内浦ノ（今井）兵庫殿、屋形様ト取合玉フヘキニ定マリ、今日ノ明日ノ卯月（四月）迄モ不息

享禄5年（天文元年1532年）此年九月浦ノ（今井）信本（元）武田殿ニ敵ヲ被食候、去間信州ノ衆大勢雷ハ養候時、浦ヘコモルリ被食候、去程ニ一国寄テ浦ノ城ヲ責被食候、サレトモ終ニ浦信本（元）劣被食候而屋形ヘ降参申候、去間城ヲ屋形渡シ申候而、ヒサシタニ御ツメ被食候、一国御無異ニ成候

とあり、「浦」に信州の兵を含む大勢の兵が滞陣し、甲府市方面に勢力をもつ武田信虎がその支配下にある国人たちを総動員して攻撃を行ない遂には降参して城を明け渡したとある。この浦の城を中尾城の北東で塩川の対岸にあたる江草の⑯獅子吼城とする説があるが塩川左岸にあるこの城は右岸域、中尾城方面から八ツ岳南麓地域に拠点をもつ勢力には不利な点が多い、すなわち、⑰天正壬午の乱（1592年）の際、若神子に本陣を置く北条勢の一部が滞陣し、韮崎方面から穂坂方面にかけて布陣した徳川勢の攻撃を受けた。この時、救援にむかおうとした北条勢が塩川を越えられず、遂には落城したという事があり、塩川を渡る兵力の移動には大変不利な城である。又、この城は平坦部が少なく大勢の兵力が長く滞陣するにも不利な城であったであろう。

次の時期は先述の天正壬午の乱があげられる。『甲斐国志』巻之四十七には以下の記述がある。

○中尾ノ塁蹟　小倉村⑱　方三十二歩平坦ニ塁アリ高サ弐間許り里人⑲清光時代ノ塁ナリト云ウ村名ニ因ルニ昔シ屯倉ヲ置キシ処カ又天正壬午ノ時ニ増築セシナラン……　とある。

このほか、この城に関する史料として　北巨摩郡誌　に「武田信光の居城にして、後信玄の時に至り、小幡山城守虎盛の子、主計頭又兵衛……功によって中尾城を賜はるを、十五・六年前迄は湟渠外郭を存せしが、今は田圃と化して、附近に町田・籠田・女郎田・番殿等の名称残れり」⑳とある。

今回の調査で確認された遺構、遺物の年代を現時点でどこに位置づけるかは困難であるが、今後の土師質土器の編年成果に期待し、かつ、柱穴等から出土した炭化物の年代測定などを実施し、さらにふえつづける周辺町村の研究成果㉑をふまえたうえで結論づけてゆきたい。

註⑦　巻頭図判（古絵図）の黒く帯状になっている部分が土塁であると考えられ、そのまわりを掘や崖が囲んでいる。郭はそれら土塁や堀などによって大きく６つある。

⑧　図判18、19参照

⑨　図判２－２　参照

⑩　図判１、図判２－１参照

⑪　傾斜は少しあるがほぼ平坦な地形で、現在工場敷地となっている所でもさほどの比高差はなかった様である。図判６は丸茂種市氏所蔵の10数年前の貴重な写真である。上段の左は工場建設前、県道方面から北へ丸茂氏宅と八ツ岳を望む。上段右は現在、工場駐車場附近から西南方向で若神子坂の北城（図判４－１ａ参照）を望む。中段・下段は南から北にかけての物で建物の手前に「ぬかる田」といわれる掘の推定がある。

⑫　井戸の年代を確証するものは出土していないが配置からみて掘立柱建物址群と同時期の物と考えている。又、工場敷地内には湧水もあったということである。

⑬　この廃坑に関する伝承が全くなく、信玄以前のものかもしれない（第１図、図判３－２ａ・５参照）

⑭　この城の軍略的意味から単純に考えると３つになる。

⑮　今井氏の別称が浦であることの考証は広瀬広一氏『武田信玄伝』にある。

⑯　第１図及び図判２－１・３－２参照

⑰　若神子の本陣と獅子吼城の中間にあたり、南に北条方の最前線である大豆生田砦がある。第１図及び図判２－１・３－２・４参照

⑱　60ｍ前後の小規模なものとして記述しているが実際は本報告のとうりである。

⑲　義清の子で逸見冠者黒源太（1110年～1168年）と称した

⑳　信義の子で東向に信光寺がある。

㉑　中でも長坂町小和田館跡の調査は時代的にも近く注目される。

須玉町埋蔵文化財発掘遺蹟より出土した木炭片木片についての考察

各市町村に於いて、圃場整備事業が急テンポに実施され、宅地造成、道路新設による工事等進められ、埋蔵文化財の発掘も事業に合せて緊急発掘され調査されている。

須玉町に於いても、担当者の指導のもとに実施され貴重な出土品も何点か見受けられ当時の生活様式がしのばれる。この発掘出土品の中に木片、木炭片が混入しており、当時どのような樹木の分布があったのか、それらが何に使用されていたのか等を知る上で貴重な資料と云える。

北巨摩地方では台風の落し子ともいえる白州町のグランドキャニオンから古代の植物（ＦＬＯＲＡ）化石が出て話題をよんだ。化石による樹木の種類はトウヒ属（Ｐｉｃｅａ）であり、亜寒帯針葉樹林の分布が多くあったのではないかと専門家の間でも云われている。

今回須玉町で発掘された木炭片、木片を観察してみると、木炭片には松属（Ｐｉｎｕｓ）の赤松（P.densiflora Sied et Zucc）や、桧科（Cupressaceae）と思われる年輪がうかびその他の部分は沈む軟かい樹木の特徴がみられた。この木炭片の中で注目したいものに、ブナ科（Fagaceae）のクヌギ（Q.acutissma Carruth）、コナラ（Q.serrata Th—unb）が見受けられたことである。木炭材では最高級品の材料であり、松桧類の軟らかい炭で早く火をつくり、クヌギ、コナラ類の炭で長時間火をもたす方法を取ったのかは判明しがたいが、同じ場所からの出土を考えた時、前記の例も考察の余地があると思う。又当時炭焼きの技術があったか疑問であるが、現在も使用している白炭（炭焼きがまの中で生木を燃焼させ土をかけて炭にする）と黒炭（炭焼きがまの中でむし焼きにしてできる炭）の製炭抜術の前にふせ焼きという方法がとられており近年でも家の自家使用の目的でふせ焼きと同じ方法をとって使用している人の話を耳にした。この方法は前者の白黒炭の技術と異なることは、炭がまを造らずに土を少し掘りその中に材料の木を入れ土をかぶせて火をつけ製炭する方法で簡単に炭が作れるが品質は悪いようである。

木片については、栗（Castanea Crenata Sied et Zucc）の木であるが、どこに使用したか判らないが、井戸跡から出土したという調査員の話に栗は水に強い性質をもっている所から井戸のどこかに使用されたものと思われる。城郭、神社、仏閣の建立に昔から桧材栗材の使用が目にひくが、水に強いという性質の他に、木材が他の物に比較し秀れており芳香性に富み仕上りが美しい点、風格にものをいわす建築材にはうっていけの材料である。もう一つの大きな特徴は針葉樹には「ヤニ」を多く含んでおり「ヤニ」が浸透することにより耐久性に富む。

これからの発掘の中で垂直に土中深く入った木がみつかった場合松類か栗とみても不自然ではないと思われる。

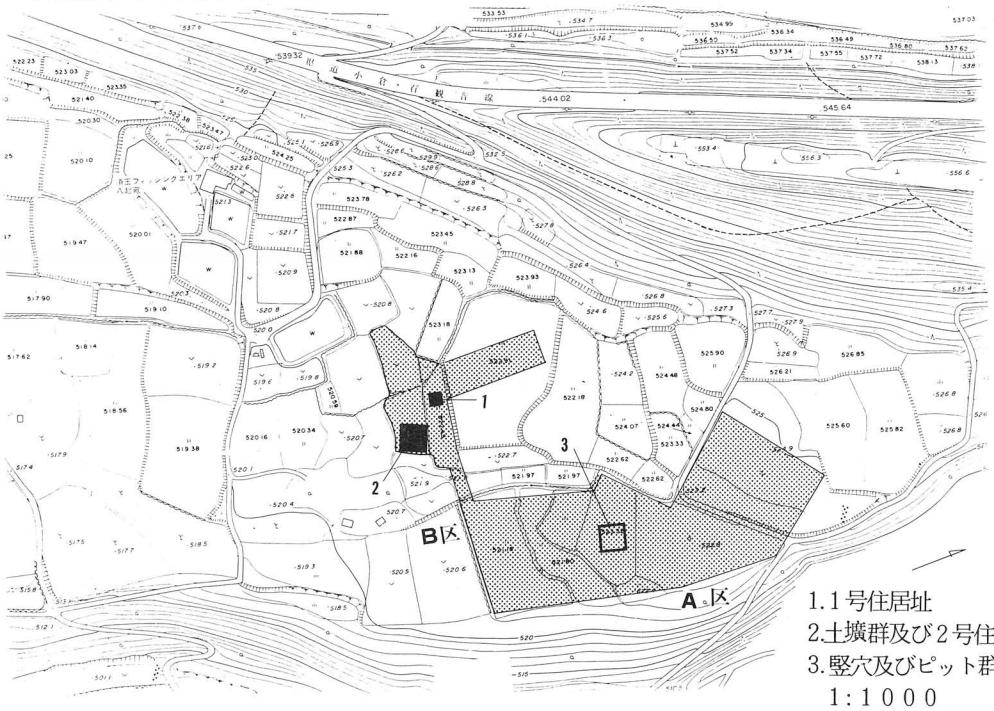
以上が今回出土した木炭片、木片についての所見の一端である。　　（小尾　勝）

Ⅳ 塚　田　遺　跡

遺構の概容

調査範囲は、北は桑畑と李畑の他に野菜畑などの畑地と、南は藤田の集落まで続く水田を有する緩傾斜面である。調査区は下小倉から藤田へ通ずる塩川沿いの町道に沿って、北の緩斜面にある畑を主にした北東部をＡ区とし、水田が大半を占める南東部から尾根裾に近い南西部の比較的平坦な地域をＢ区とした。Ａ区から町道沿い南東部には、大小の礫が多く、遺構の検出には困難を極めた。第一層は耕作による有機質の黒色土層、第二層は黒褐色土層、第三層は、礫を含む黄褐色土層からなる。確認面までの深さは北東部で20cm～30cm、南東部で40cm ～50cm が測られた。検出された遺構は、性格不明の竪穴及びピット群で、礫と安山岩の河原石が竪穴やピット群の底や、立ち上りに突出している。Ｂ区では、表土除去の際、二度に亘る田作りが行われたことが確認された。確認面は、低部河岸段丘上の二次堆積層で、黄褐色混じりの赤褐色土である。１号住居址は、この二次堆積層に構築された鎌倉時代と思われる隅丸方形の住居址である。住居址の西側周辺の精査に伴って、縄文土器片と陶器片が採集された。この地域より約10ｍ南東、50cm～60cm 段丘下の平坦地からは、土壙群と２号住居址などが検出された。確認面は黄褐色土層で、土壙は覆土が暗褐色土のものと、白味がかって、サラサラした砂状の明黄褐色土のもの、更に黄褐色のロームブロックが混入する暗褐色土のものとがある。

２号住居址と西へ５ｍ程離れた範囲には、こぶし大、人頭大の礫が多く、土壙域より暗い褐色土層である。出土した遺物から、縄文時代後期後半の遺構と比定されるが、耕作による削平と撹乱がひどく、平面プランで確認することは出来なかった。土壙域で表土除去中に、北宋銭と硯が発見され、２号住居址とその周辺から、天目茶碗の一部、陶器片、砥石、鉄釘と思はれる鉄器などが発見された。

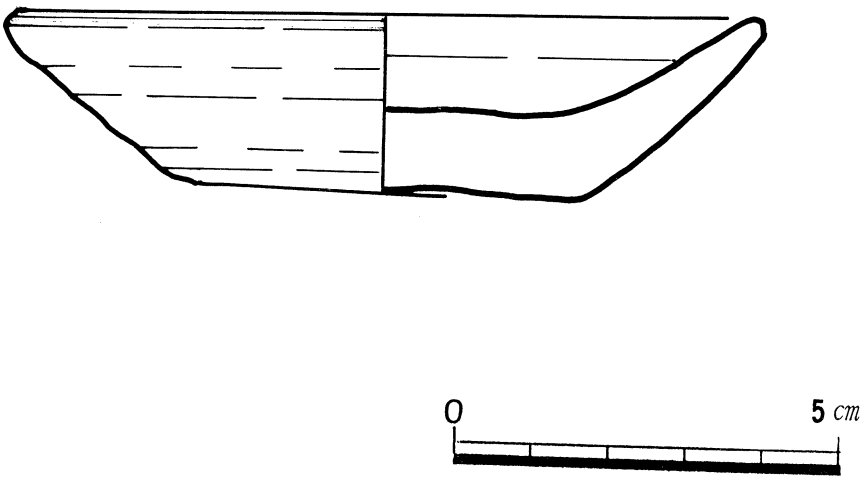


第30図　塚田遺跡調査全体図

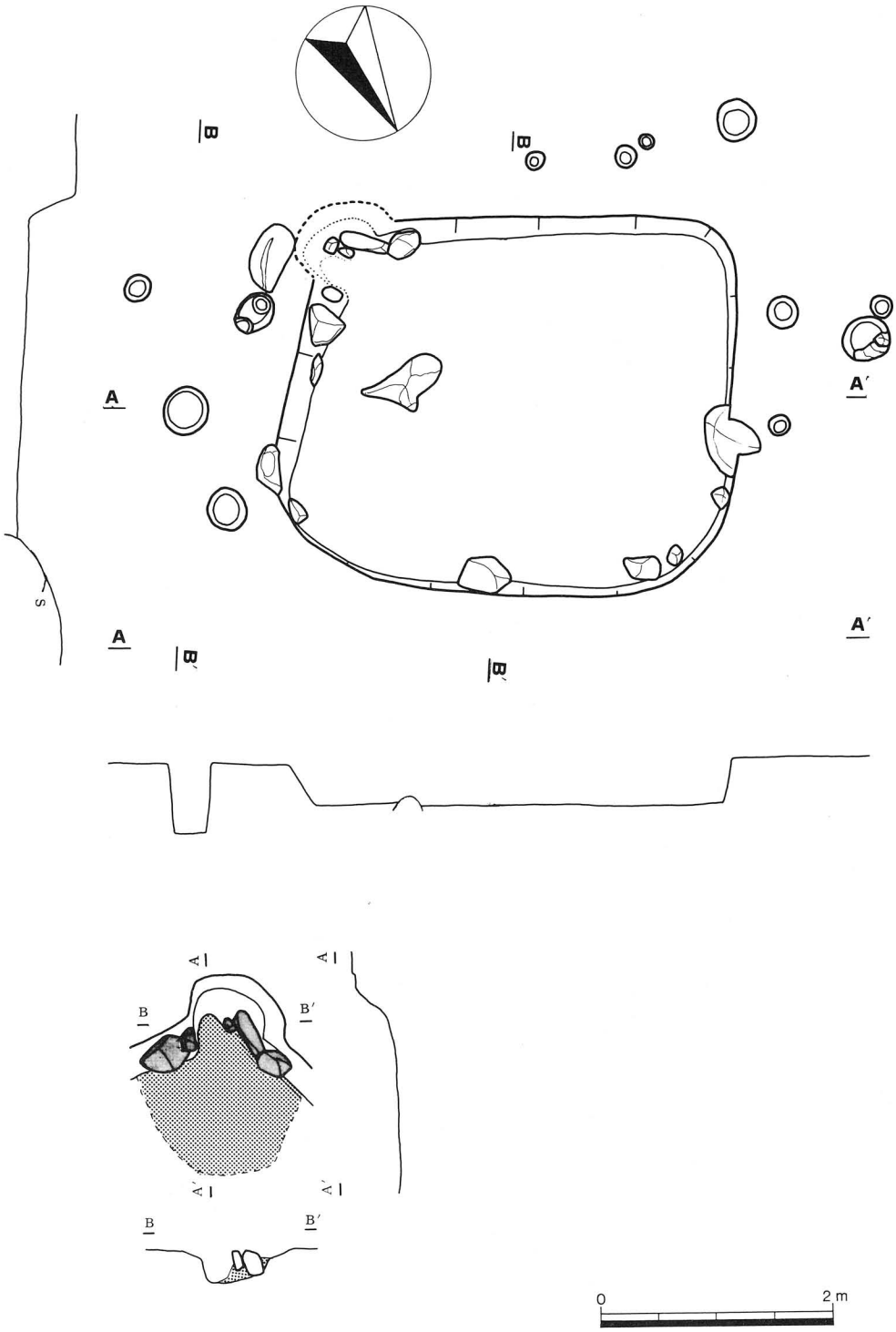
第31図　塚田遺跡B区遺構配置図

1号住居址

B区南西部で発見された住居址で、低位河岸丘上の二次堆積層に構築された遺構である。確認面は、赤褐色土層で、プランは隅丸方形で北辺は3.6m、東南の壁に竈を持つ東辺は2.5m南辺3.4m、西辺2.7mを測る。東壁と西壁を標準にして主軸はN-16°-Wで壁の立上がりは比較的良好で、北壁34～39cm、東壁36～38cm、南壁32～36cm、西壁28～41cm を測る。周溝は認められず、住居内の柱穴も全く見当らない。床面は全体的に良好で、竈は東南の壁隅にあって2、3の袖石が撹乱された状態で検出されたが、煙道や、天井石、支柱などは消失していた。焼土は、竈入口部から縦1.1m、横1.4mの半円形の拡がりに認められた。東壁の近くから縦30cm、横73cm の自然石が埋まった状態で発見され、住居の中央からも縦60cm、横80cm、高さ50cm 程の自然石が発見された。覆土の除去作業の段階で、多量の石を除去したので、住居廃絶後に人為的に投入されたか、流水によって運ばれたものと推定される。出土遺物は土師質の皿が1個と、竈内から山茶碗片が1個出土した。皿は口径10cm、器高2.5cm、底径5cm で、底部に糸切り痕を残し、ロクロ横なでて、胎土荒く、黄褐色を呈している。口縁の一部に煤が附着している。ほぼ完形で、出土状態は、西壁隅近くの床上4～5cm の壁に、器形の半分が突きさされた状態で出土した。（第32図）住居周辺の精査中に、西壁の中央から約80cm 離れた地山から猪口状の土師質土器の一部が出土し、同じ地域の精査に伴って、諸磯C式に比定されるボタン状貼付文をもつ土器の口縁部破片（第47図No.4～No.14）などが出土した。



第32図　1号住居址遺物実測図



第33図　1号住居址

2号住居址

B区南東部で土壙の南から検出された。縦横約5mの範囲に柱穴と土壙を伴った規模と推定されるが、東側調査範囲限界の壁隅に、わずかな住居址の立上がりが認められただけで、プランは削平によって撹乱されており、住居址を検出することは出来なかった。

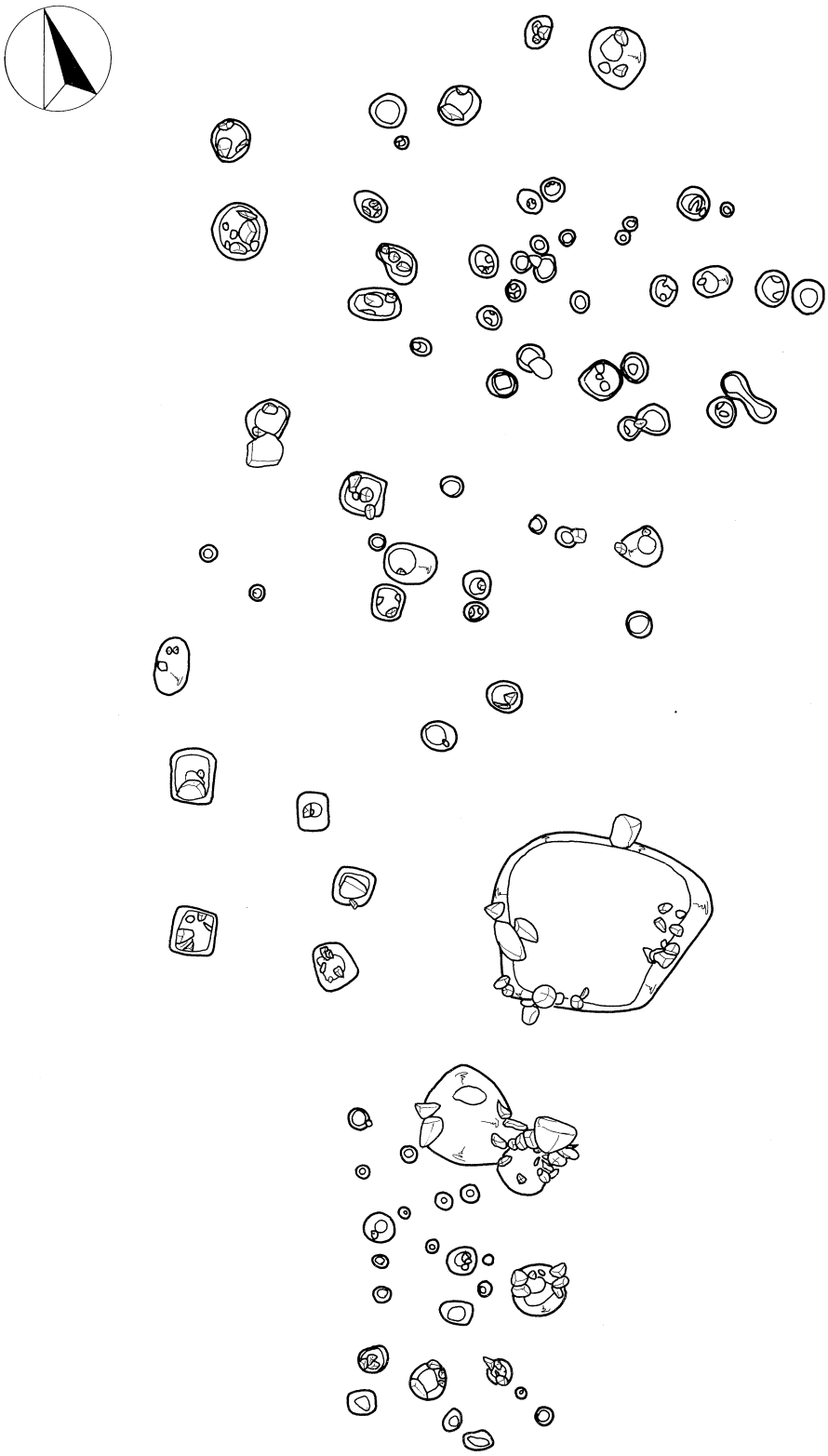
柱穴は、中央付近に認められ数個の土壙を囲むように、北西3m、南西3mと鍵の手状を呈した柱列があり、外径は20～30cm、底径10cm～20cm前後で、深さは30cm～40cmを測る円錐形に掘られている。更にこの柱列を囲んで、東西、南北にほぼ等間隔の柱穴が検出され、最大径40cm、最小径20cm 前後の円形プランを持ち、深さは30cm～40cmが測られる。然しこの二本の柱列は北西部で交わり、西部は土壙で切られ、南部も調査範囲外の地域に消える。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期後半に比定される沈線による刻目が口縁に沿って施かれ、下部に突起を伴う隆線で区画した長方形の枠の文様を持った土器片や、安行1式に平行すると思われる時期の、縄文を欠き沈線による円文を施す波状口縁の一部が出土しているところから、本遺構は、縄文時代後期後半のものと推定される。

2号住居址から西へ5m程離れた範囲で土壙とピットが検出されたが、No.55No.61No.54No.56に囲まれる土壙及びピットは、形状は不定形であり、ピットも不規則な配列から、性格不明である。

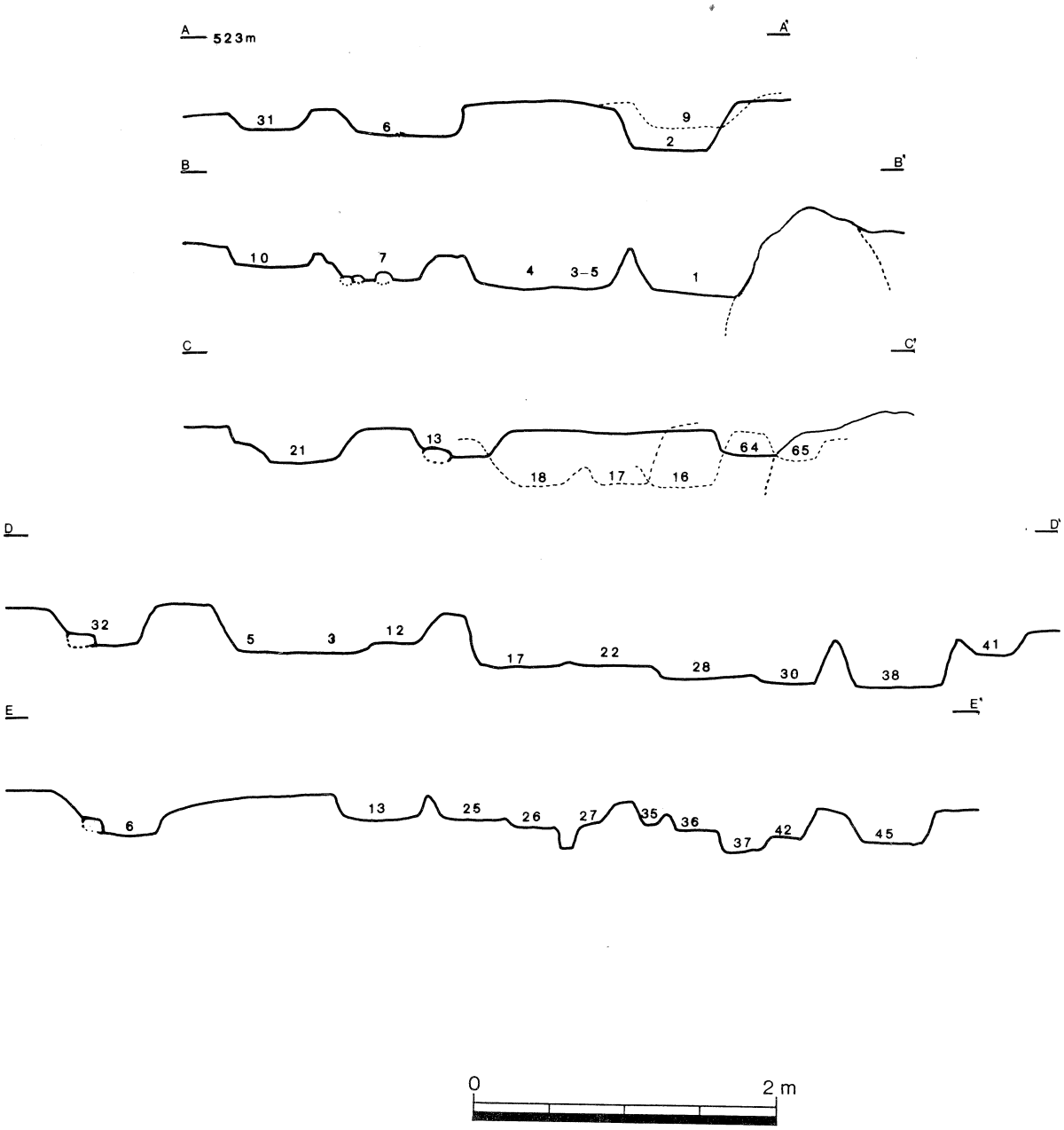
竪穴及びピット群

調査区域A区で検出された本遺構の層序は、第1層が耕作土で、第2層が黒褐色土で、第3層が大小の円礫を含む二次堆積の黄褐色土層である。検出された竪穴やピットは、一つとして礫の含まれぬものはなく、竪穴の底面や、立ち上がりに突出している。規模や形状も異なり、方形のプランをもつもの9、円形プランのもの約60、皿状の底をもつ、浅い掘込みをもつもの13、長楕円形のもの3を数える。最も大きい竪穴は、隅丸方形に近い形状を呈し、最深部で約40cm が測られ、一辺は東西3m、南北3m40～50cm を測る。底面は凹凸がはげしく、大小の円礫が散在し、壁の立ち上りも、多量の岩石にはばまれ、垂直ではなく、南辺は、幅40cm前後の傾斜面をつくる。床面からは焼土も、遺物も検出されない。

表土除去中に寛永通宝1枚が北東部で、その近くから天目茶碗の口縁部片が1個検出された。これらの竪穴やピット群には規則性がなく、掘立柱建物遺構とは認めがたい。最も大きい竪穴も、土採り場の跡とも考えられ、他のピット等は、北部に桑畑、李畑が残るところから、抜根の跡に、土石が流出して埋めたか、土石が流出した土地を耕作し、やがて抜根した址とも考えられるが性格不明のピットである。



第34図　竪穴及びピット群


A
523m
A'
31
6
9
2
B
B'
10
7
4
3-5
1
C
C'
21
13
18
17
16
64
65
D
D'
32
5
3
12
17
22
28
30
38
41
E
E'
6
13
25
26
27
35
36
37
42
45
0
2 m

第35図　土壙群、断面図

第36図　土壙群・２号住居址、平面図及び断面図

土壙群

遺構は、Ｂ区南東部で１号住居址が発見された区域と比高１ｍ位低い平坦地から検出された。遺構は、土壙71基で、２号住居址と柱穴が一部で切り合って発見された。土壙71基のうち、方形プランをもつもの25基、長方形プランのものが18基、円形プランのものが19基、不整形のプランをもつものが19基を数える。No.３、No.４、No.５の中央部で表土下10cm 程の深さから骨片と骨粉が検出され、白色がかった明黄褐色でサラサラした砂状ローム層から若干の炭化物も検出された。表土から15cm～30cm の深さに散在していた。 骨片 は、No.13の表土下約15cm の深さで発見されている。No.17は（図版 34 ）、表土下約20ｃｍ の深さに河原石が敷き並べられ、石を除去したあとからは、骨片や骨粉はなく石の真下から鉄釘と思われる鉄器（第49図No.２） １本が出土した。方形プランをもつ土壙、No.１ No.４ No.７ No.10No.31は、やや北よりの西へ向き、同じプランを持つNo.12No.13No.14No.19No.20は南よりに西へ向く。No.17No.18No.23No.25の円形プランのものは西へ向く。西へ向くNo.22No.23No.29をきって、No.16No.28があり、No.34No.67を切ってNo.38が比較的深く円形に掘られている。これは、地形の形状や他の土壙に左右される結果であろうが方向性をうかがうことが出来る。

土壙の深さは東隅の二つの巨石に近い土壙程深く、西へ向って掘られている土壙ほど浅い。深いもので、80ｃｍ 前後で、浅いものは20ｃｍ を満たぬものもあり、40ｃｍ 前後のものが最も多い。方形土壙の一辺は約１ｍが平均して測られ、長方形のものNo.６No.９のように、長径が1.８ｍ、短径が1.６ｍを測るものもある。円形プランをもつものは直径１ｍを測るものもあるが平均して80ｃｍ 前後である。

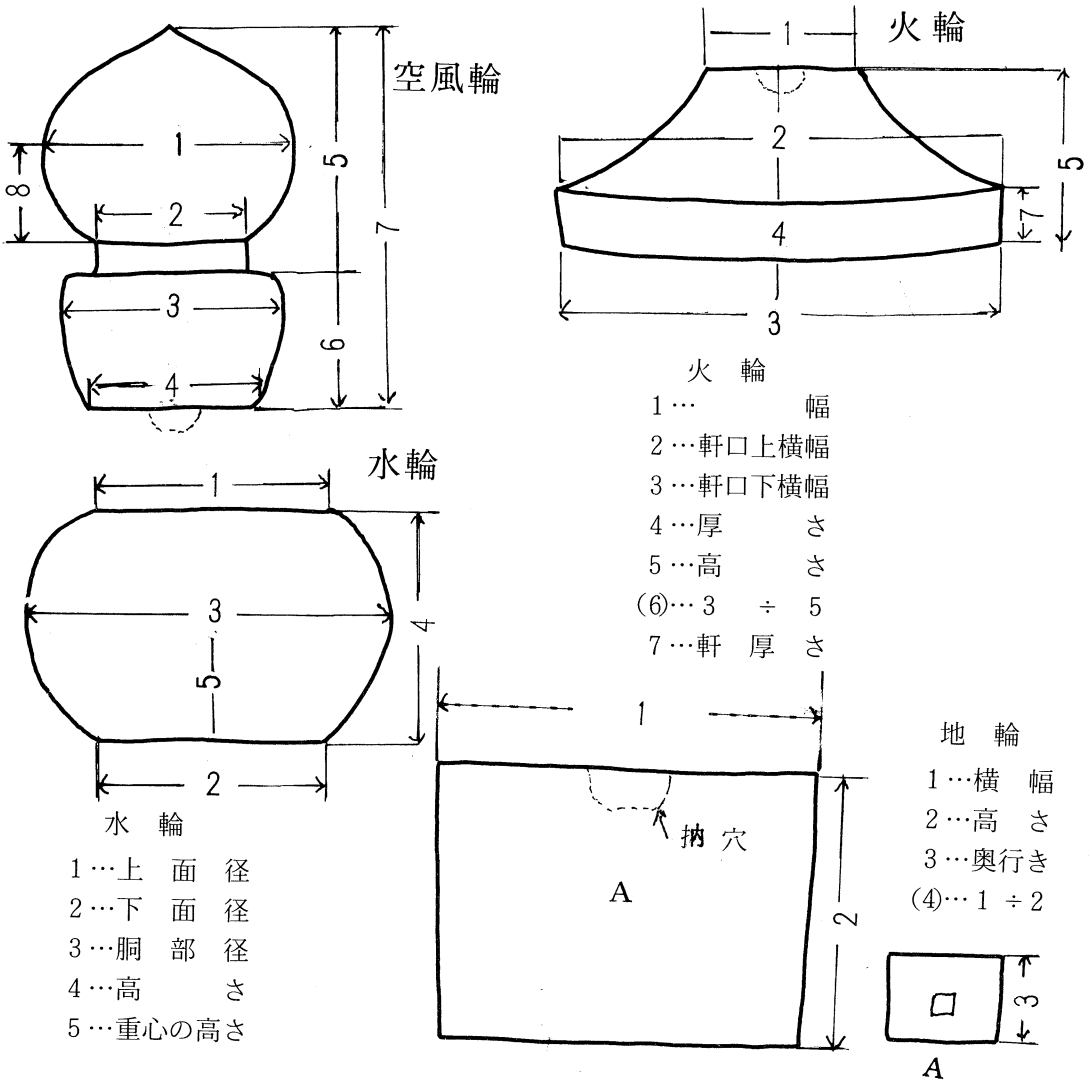
検出された土壙群の特色は、狭い地域内に方位は少しずつ異るが、一定の方向へ掘られているものと、切り合いが目立つ。表土除去の作業中にこの区域から検出された陶器片は、古くは13世紀代の四耳壷片と、14世紀、15世紀の天目茶碗の一部及び底部、降って江戸期の飴釉の碗片等がある。（カラー図版１及び94ページ）

（２）遺物　塚田遺跡の石造物

一．五輪塔　塚田遺跡から出土又は散在していた五輪の各部は一基（空風輪No.２、火輪No.17、水輪No.18、地輪No.17）を除いて、凡て一対として把握出来ず、年号や記銘もないので的確な判断は出来ないが、室町時代から江戸初頭にいたる範囲の五輪と推定される。発掘調査した墓壙群周辺にあった田圃を区劃する石積の上に積替えされた五輪塔が散在し、排水溝の傍にも幾基認められ、石積の河原石と一緒に地輪、水輪が使用されてもいた。検出された五輪塔の石質は、角閃石安山岩で空風輪が17、火輪33、水輪22、地輪26で、他に無縫塔の完型１と完型と思われるもの１、そして用途不明な石（貫通した孔をもつ方形で半壊した石）とである。

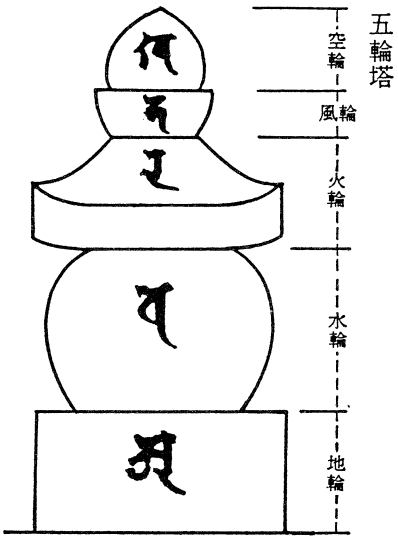
１）空風輪　（第38図１～17）

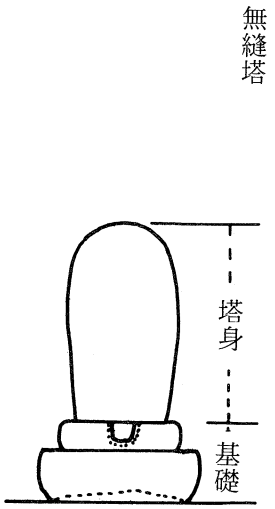
宝珠だけを取上げた場合、１、２、３のように蓮の蕾に似て少しおしつぶしたような、ふくらみを持った古い形式が認められ、頂点を尖らせ、両側の曲線が直線に近くなって固い感じがする桃山期から江戸初頭のもの16、多くは頭が張り、裾ですぼまる室町時代末期のものである。



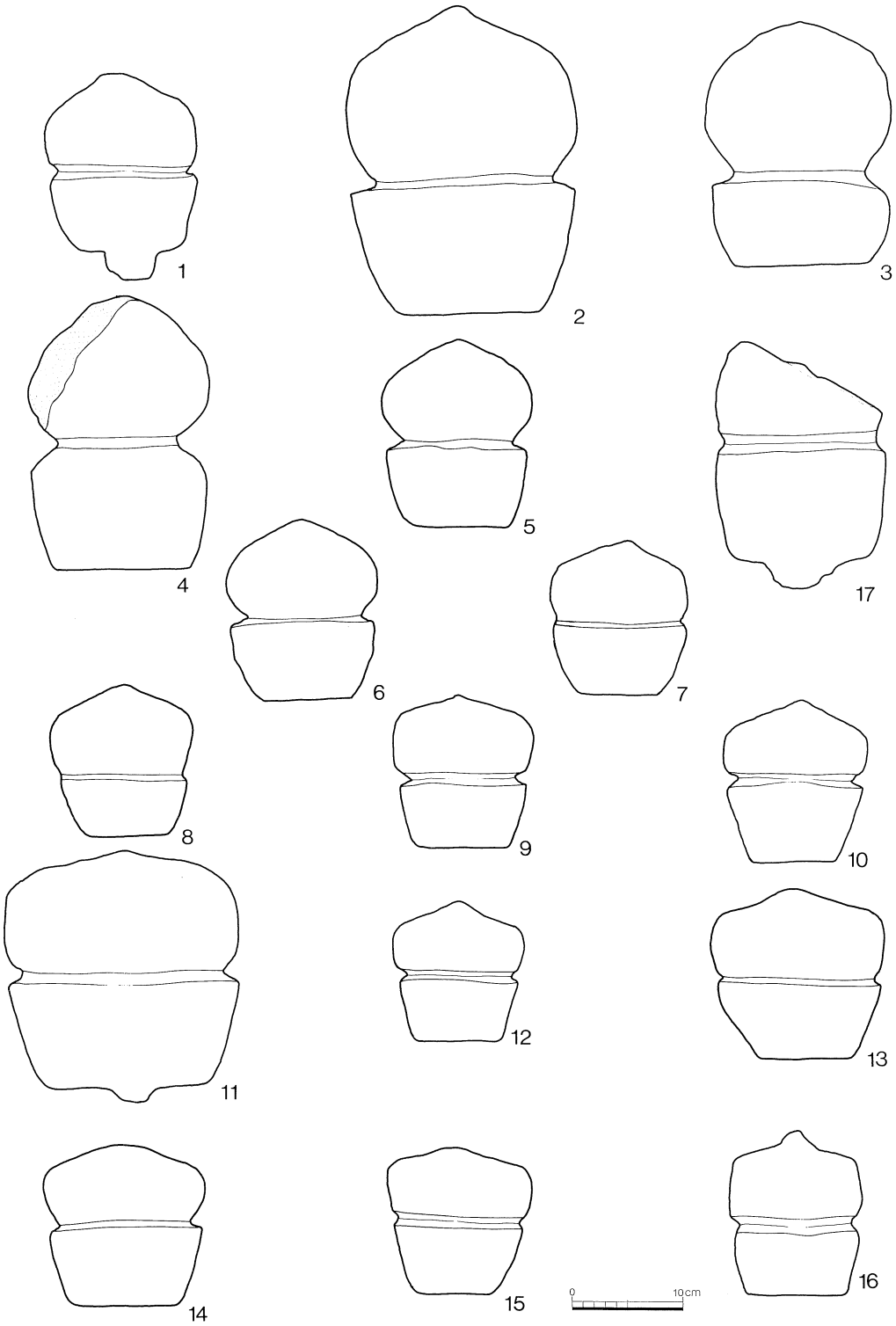
第10表　空風輪計測表

図判番号	1	2	3	4	5	6	7	8	備　　考
1	13.5	11.4	13.1	9.0	10.1	16.4	26.5	3.3	底部突起 中5.8 L 2.4
2	22.5	15.7	19.9	12.0	17.8	11.0	28.8	4.7	
3	16.8	11.6	15.9	12.0	16.3	5.7	22.0	5.6	
4	16.2	10.5	15.7	11.7	16.3	8.5	24.8	4.2	
5	13.3	9.6	12.5	7.8	10.0	7.0	17.0	3.3	
6	13.5	10.1	13.0	7.9	9.9	6.5	16.4	3.5	
7	12.2	11.0	11.9	6.6	7.9	6.0	13.9	2.2	
8	12.6	10.7	11.1	6.5	9.0	4.8	13.8	4.3	
9	12.4	9.2	11.3	7.6	8.0	5.8	13.8	3.7	
110	12.9	10.0	12.2	7.2	8.1	6.6	14.7	2.9	
11	21.1	17.8	20.6	14.1	12.1	9.4	21.5	4.0	底部突起 中4.3 L 1.1
12	11.7	9.2	10.5	7.0	7.3	5.5	12.8	2.9	
13	15.4	13.5	14.6	7.6	8.8	7.5	16.3	3.7	
14	14.3	11.5	13.6	8.6	7.5	7.0	14.5	2.8	
15	12.8	10.7	11.4	6.3	7.2	7.0	14.2	3.8	
16	11.8	9.7	11.4	8.4	9.0	5.8	14.8	2.7	
17	—	13.4	15.3	—	—	12.5	—	—	上部欠損 底部突起 中6.7 L 2.2

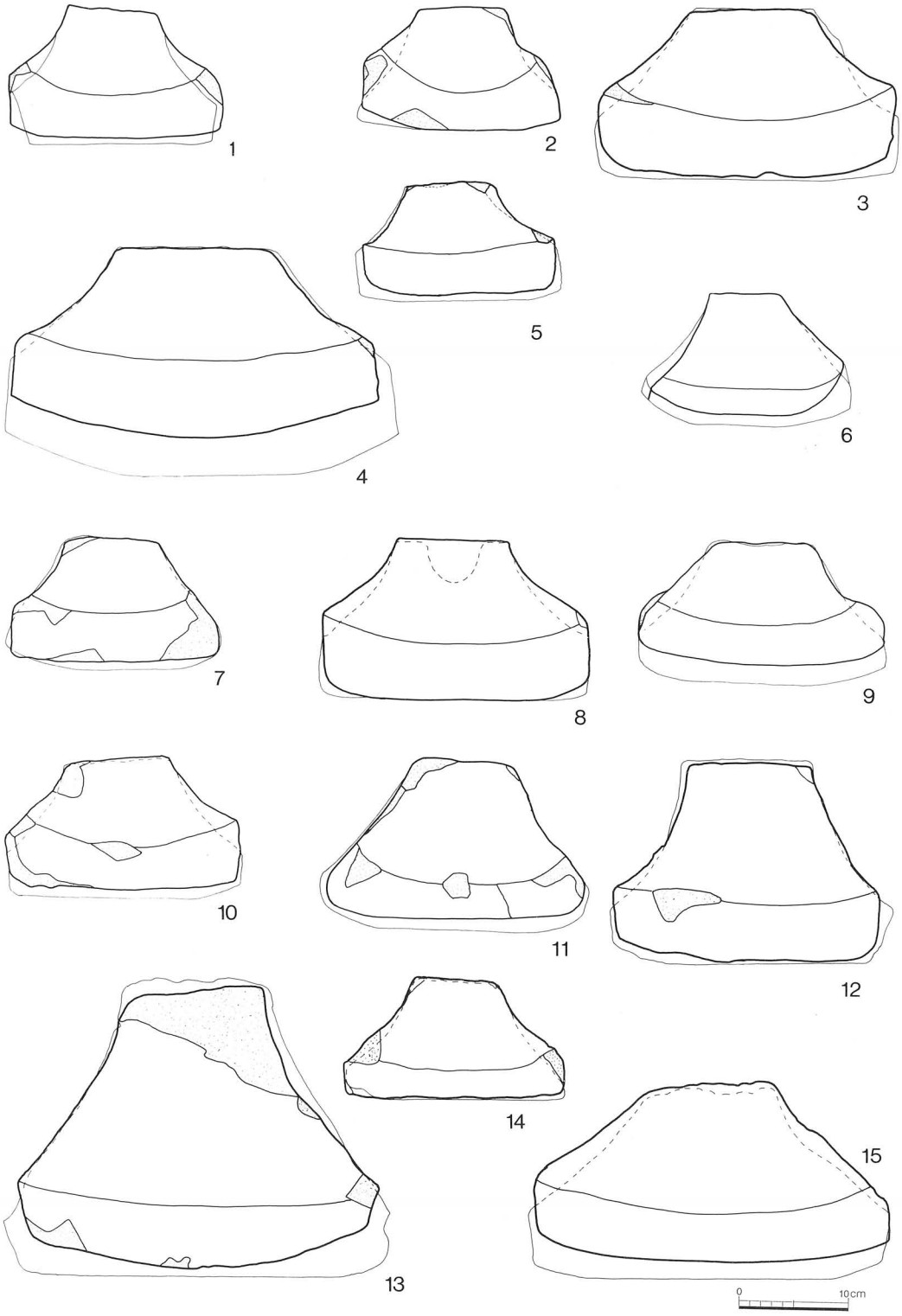




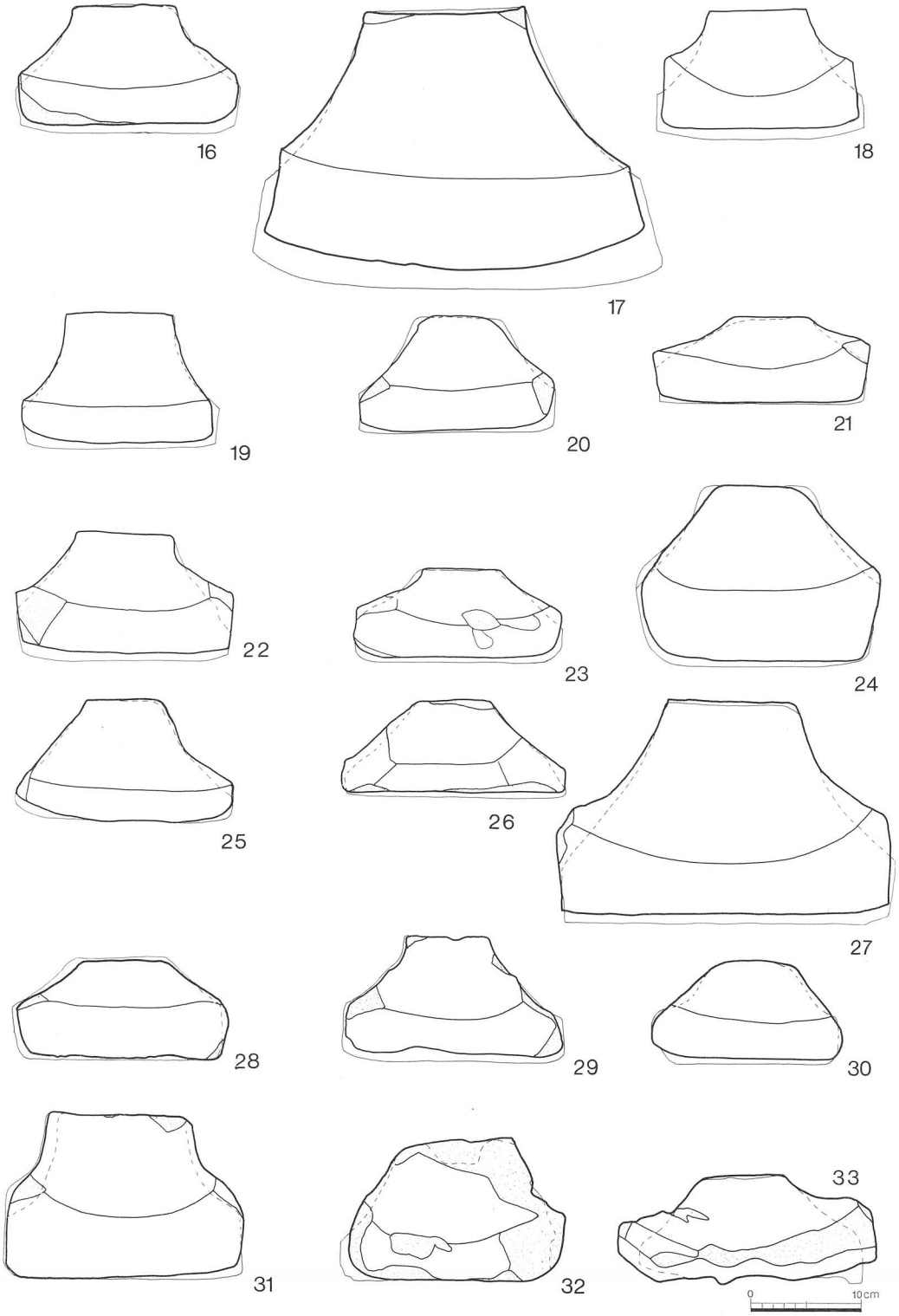
第37図　五輪塔・無縫塔説明図



第38図　空風輪



第39図　火　輪



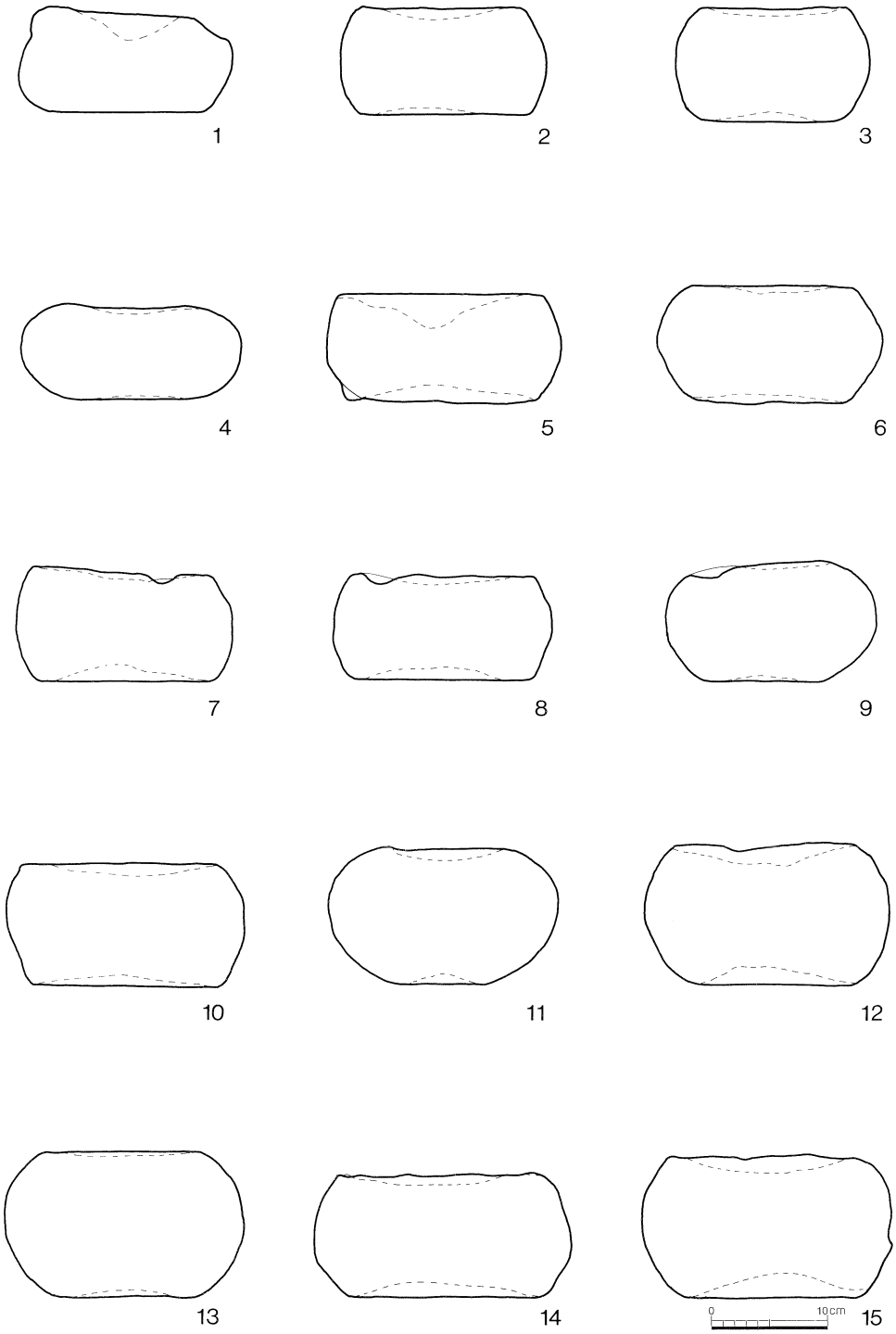
第40図　火　輪

2）火　輪（第39～40図１～33）

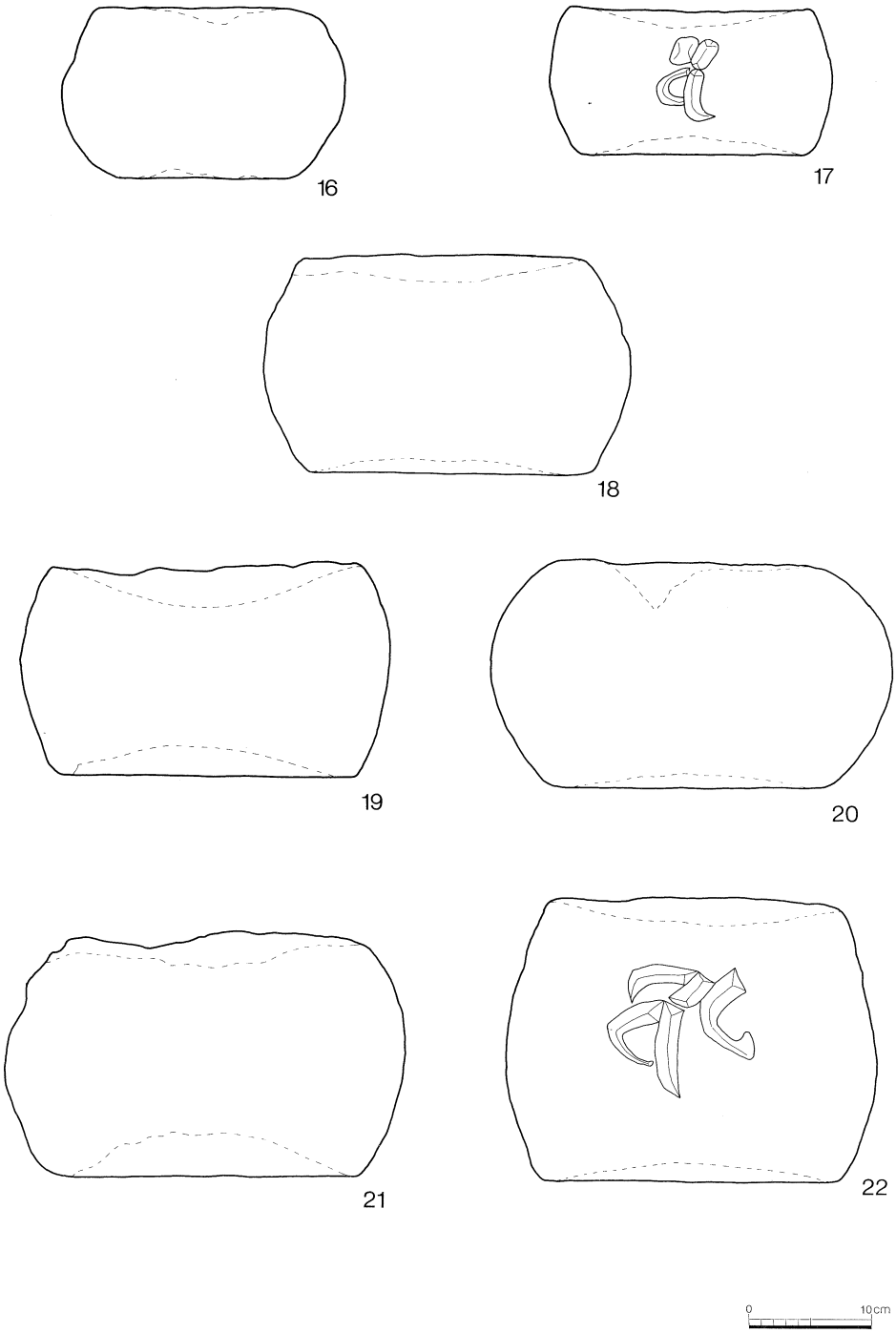
室町時代の特徴として、辺縁が厚みを持ち、隅角部が中央より厚みを増し、頂点の高さがやや低くなる１、２、３、の他に、同時期の屋根の流れと降り棟の反りが大きい13、17があり、19、31のように棟幅が広く、軒の下端が水平で上端のみ両端を反らし、軒口を内斜めに切る安土桃山から江戸初頭のものが検出されている。22、29、31は耕作や積替えによる破損が原因と見られる隅角部を欠損したものが多い。急激に小型化へ移行した室町末期の軒に反りが見られ、上辺と頂点との間隔が著しく短かくなる５、10、14、16が目立ち、概して室町末期から江戸初頭に比定できるものが多い。

第11表　火輪計測表

図判番号	1	2	3	4	5	6	7	備　　考
1	8.1	19.6	19.3	3.9	12.9	1.50	5.5	
2	8.0	16.2	18.2	3.4	11.2	1.63	5.6	
3	11.1	26.3	24.3	5.3	15.8	1.54	6.8	
4	13.8	37.2	33.4	7.1	21.1	1.58	5.3	
5	8.2	17.4	16.7	3.8	10.9	1.53	4.5	
6.	6.4	17.4	16.9	2.4	12.2	1.39	2.4	
7	8.5	19.0	18.8	4.3	12.3	1.53	4.3	
8	10.3	23.9	23.9	5.2	14.8	1.61	5.2	風輪の受け穴有り　中＝4.9　L＝3.7
9	8.0	19.5	22.2	3.5	13.1	1.69	4.1	
10	9.4	19.7	20.6	3.4	13.1	1.57	6.0	欠損有り
11	8.4	20.6	22.0	3.1	15.8	1.39	4.5	欠損有り
12	10.4	23.7	23.0	5.3	18.5	1.24	5.0	
13	10.7	32.8	30.4	5.6	27.4	1.11	4.9	欠損有り
14	8.2	19.4	19.5	2.5	11.2	1.74	4.4	
15	10.6	30.4	31.6	4.4	18.0	1.76	5.0	
16	9.5	19.7	19.4	3.3	11.8	1.64	3.3	
17	14.4	31.4	34.5	8.83	26.0	1.33	7.5	
18	8.7	16.8	17.8	2.9	11.9	1.50	5.0	
19	9.9	17.1	17.4	3.3	12.5	1.39	2.5	
20	7.7	18.0	17.0	3.7	10.7	1.59	3.5	欠損多
21	6.7	19.6	18.0	3.0	8.0	2.25	4.3	
22	7.8	20.0	18.9	4.0	11.8	1.60	5.0	
23	7.3	18.8	17.9	2.6	8.6	2.08	3.3	
24	7.7	21.1	18.3	6.5	16.7	1.10	7.5	
25	7.0	18.7	19.0	2.9	11.4	1.67	2.4	表面にノミ削り
26	5.9	20.2	20.2	2.6	9.0	2.24	2.8	各部欠損多
27	11.3	29.4	29.6	4.6	20.6	1.44	8.0	
28	7.7	18.9	16.1	4.7	9.5	1.69	4.0	
29	7.3	18.6	20.0	3.1	16.9	1.18	4.5	
30	－	17.0	17.0	3.1	9.8	1.73	－	
31	12.5	21.5	21.8	5.3	15.2	1.43	7.5	
32	－	20.5	20.0	3.4	13.2	1.52	－	
33	6.9	22.6	23.3	2.0	10.0	2.33	3.9	



第41図　水　輪



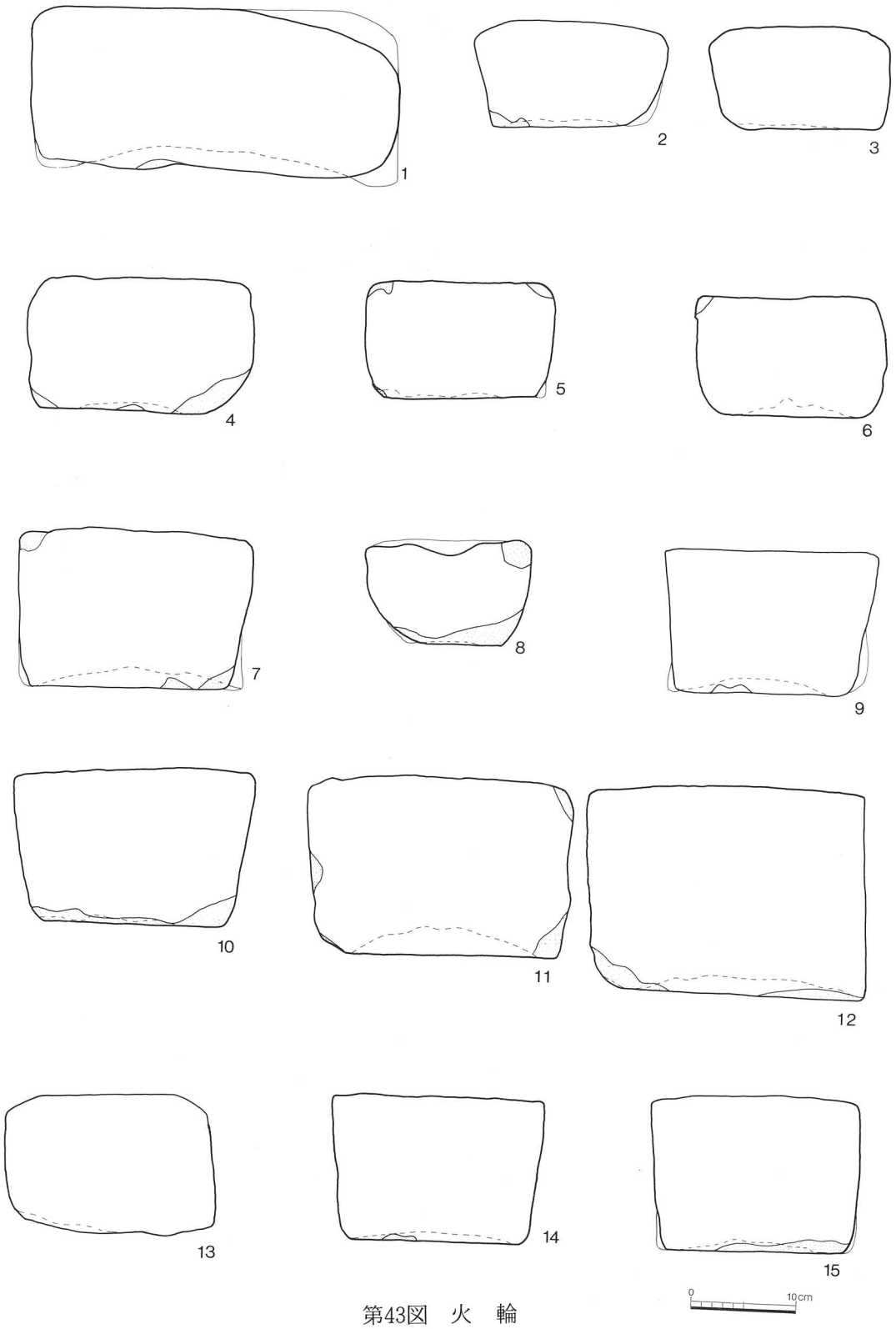
第42図　水　輪

3）水　輪（第41～42図１～22）

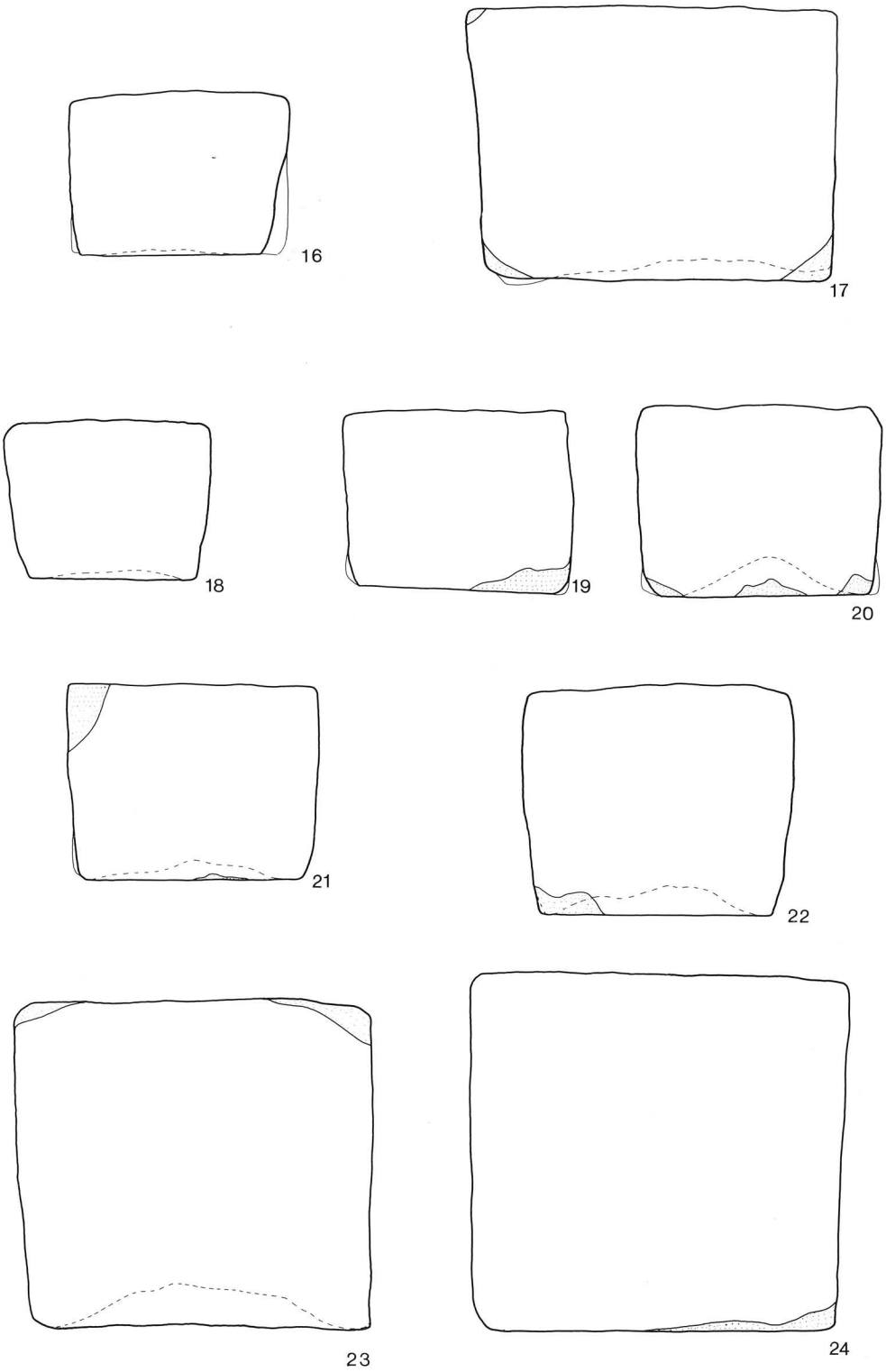
上端の径が下端より大きく、その重心、つまり、最大径が中央より高い位置にあるのが普遍的な構造形式である。鎌倉期の角張った球形や、肩が張り出し裾ですぼまった壷形は見当らないが、円柱形でゆるやかな曲線を持つ22は、梵字（バー）が陰刻され、その切込角度から室町中期以降のものと思われる。整美な書体と雄大な梵字の鎌倉期や、南北朝より更に書体に力を失い、大きさも小さくまとめられている。四方五大の梵字陰刻された唯一の17は陰刻角度と形状から桃山、江戸初頭に比定される。素面の16、18、19、20、21も室町期と思われ、11、12、13 15は重心の高さが高く、張りが水輪の中央より上部にでているところから室町後期から桃山にかけてのものであろう。そろばん玉のように　円形に近い形状を呈し、小ぶりの水輪は室町時代後半を上限に桃山、江戸初期と考察され、全体の半数以上を占める。

第12表　水輪計測表

図番号	1	2	3	4	5	備　考
1	12.5	12.9	17.9	9.0	4.5	
2	13.3	14.0	17.3	9.5	4.6	
3	12.5	11.1	16.4	9.9	4.7	
4	11.5	10.0	19.0	8.4	4.0	
5	16.0	16.9	19.7	9.4	5.1	
6	13.3	13.6	19.0	10.1	4.4	
7	14.7	14.2	18.4	9.9	4.2	
8	15.4	14.4	18.5	9.2	4.8	
9		9.9	17.9	10.5	5.2	
10	15.8	15.5	20.0	10.6	7.0	
11	10.4	7.4	19.4	11.8	9.0	
12	15.8	13.0	19.7	12.2	6.5	
13	11.5	13.1	20.2	13.6	5.7	
14	16.6	16.1	21.7	10.7	5.0	
15	15.7	14.5	21.2	12.3	6.9	
16	15.7	13.7	23.2	14.4	7.5	
17	19.2	18.2	23.1	12.4	5.9	ババー バンバク） 4方向に ぼん字有り
18	22.6	22.8	30.3	18.2	8.6	
19	24.9	24.0	30.2	18.0	10.2	
20	20.2	21.9	33.1	18.9	9.9	
21	21.8	24.1	33.0	24.0	10.9	
22	24.0	24.0	30.4	23.6	8.3	（バー） ぼん字有り

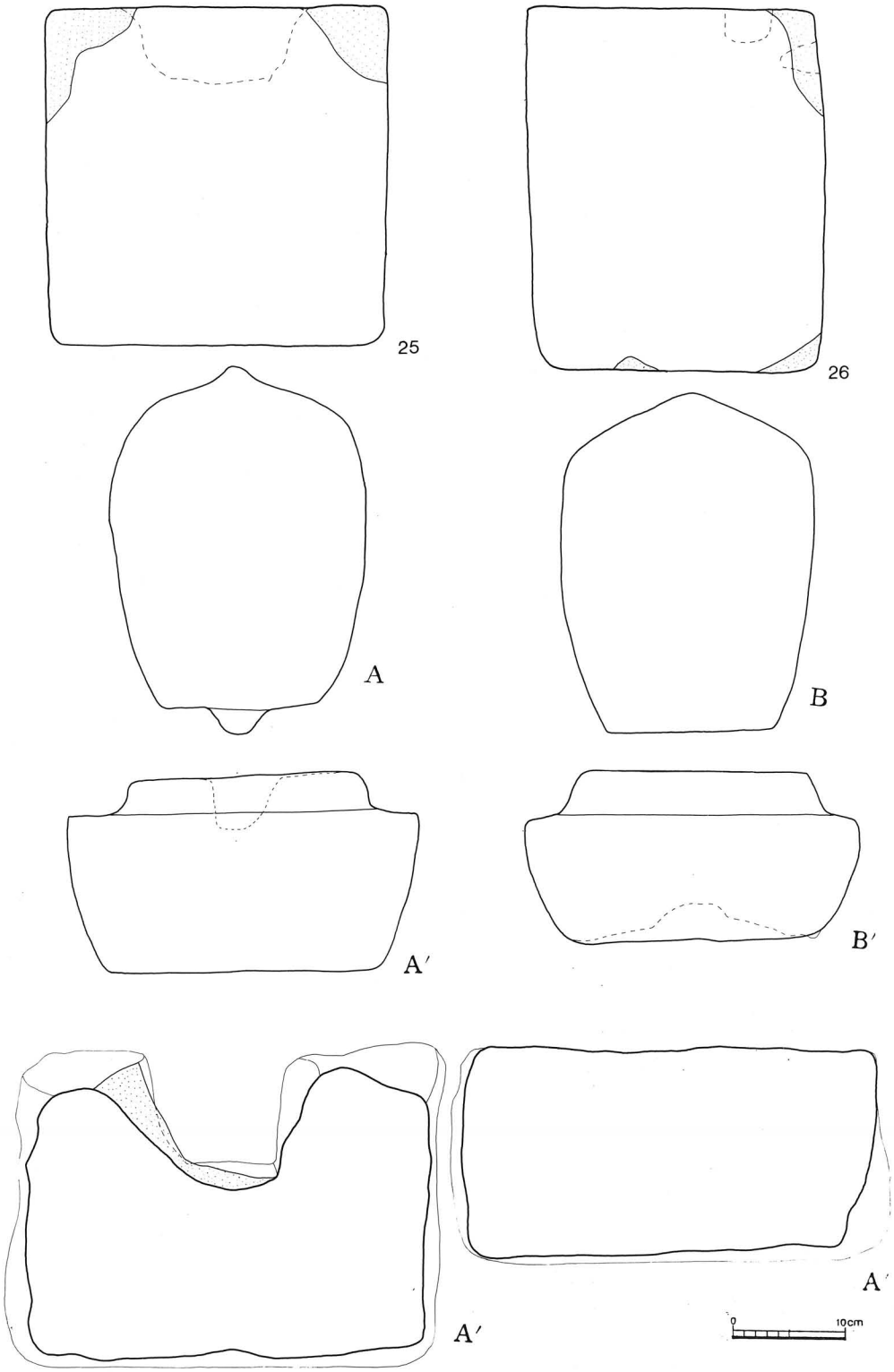


第43図　火　輪



第44図　火　輪

0　10cm



第45図　火　輪

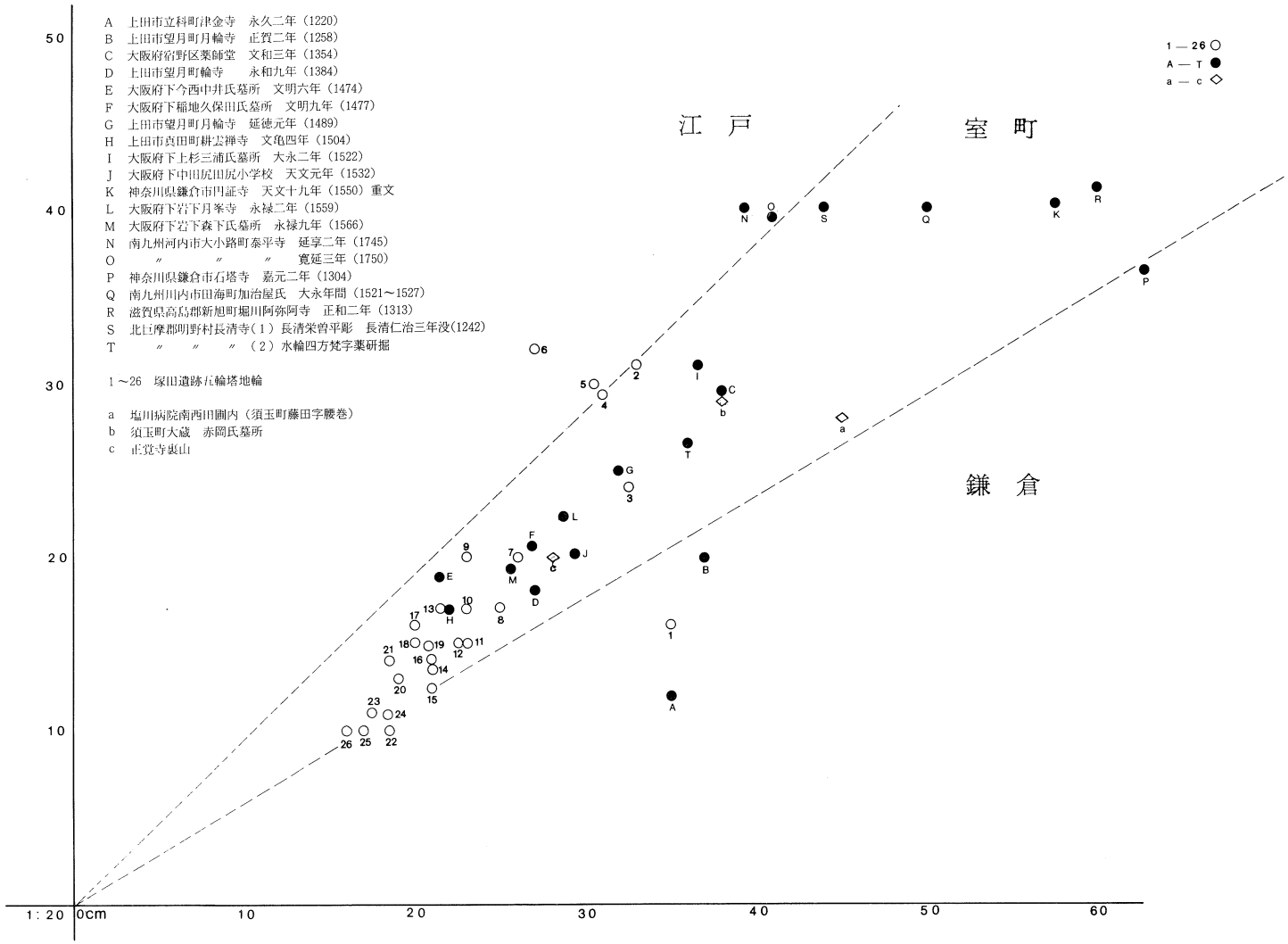
4）地　輪（第43～45図１～26）

基礎の背が低い程、古いということが年代推定する場合の一般的な見方であるが、これは様式論に基づく編年であり、様式論は概念であって絶対的なものではないが、平安時代の地輪は著しく低く、江戸時代の藩主クラスの墓の基礎は巨大で、鎌倉期の地輪に劣らぬもので、数値を基準とすることは一考したいが、第43図１を形式上から測定すれば、幅に対して余りに背が低いところから平安時代迄遡上ることになるが、本遺跡からこの時期に比定される遺物の全く出土していないので、室町時代に見られる地輪の台座と考えられる。だが、土壙群に伴い、鎌倉時代の陶器片が出土しているので、年代推定表から割り出される編年は、更に古くを示唆しているようにも思われる。背が低いということは、高さに対する幅の比率が大きいということであり、一般に形式上、比率が1.5以上は時期的に古いといわれる。当遺跡に散在する地輪の特徴は、７、９、13、14、15、16、18のように画一化した小型の地輪が目立ち、火輪にもその傾向が濃く、生前中に造立して安楽浄土を願う逆修供養塔と思われるが陰刻がない粗面故、実証出来ない。正覚寺の五輪塔は積み替えられ、この寺域に持ち込まれたもので、藤田の南、塩川病院傍の五輪塔は、鎌倉時代末から室町初頭の造立で、大蔵の赤岡邸墓所の五輪塔が造立される時期より古く三尺の全高である。明野村長清寺の二基の五輪塔の内、長清栄曽の字を刻む五輪塔は、文字は貧弱な平彫りで、各輪に互間性がなく、火輪、地輪に室町初期の形式が見られ、空風輪、水輪は積替えたもので、更に降る。他のキリークの陰刻された一基は、鎌倉期末から室町初頭の造立と考察するが、今後、細部の調査が必要であろう。

他府県の五輪塔の地輪と、当町内の３基の地輪、明野村長清寺の五輪塔の地輪、併せて塚田遺跡に散在、収集した地輪を、形態からみた年代推定表として掲げて見る。（第14表Ｐ―87）

第13表　地輪計測表

図判番号	1	2	3	4	備　考
1	34.5	16.6	34.2	2.08	
2	18.1	10.3	18	1.76	
3	17.1	9.9	16.2	1.73	
4	21.3	12.9	21	1.65	
5	17.9	11.2	17.6	1.60	
6	18.2	11.5	17.9	1.58	
7	23.0	15.2	21.5	1.51	
8	15.7	10.0	15.7	1.57	各部欠損
9	20.5	13.7	20.3	1.50	
10	22.6	15.1	21.2	1.50	
11	25.1	17.1	24.7	1.47	
12	27.0	19.9	25.5	1.36	
13	19.8	13.7	19.3	1.45	
14	20.1	13.9	19.5	1.45	
15	19.8	14.9	20.3	1.33	
16	19.2	14.5	20.2	1.32	
17	32.3	24.8	31.5	1.30	
18	18.0	14.1	17	1.28	
19	20.5	16.2	20.2	1.27	
20	21.5	16.9	21.7	1.27	
21	21.6	17.4	21	1.24	
22	23.5	20.4	23.2	1.15	
23	31.0	29.6	29.5	1.05	
24	33.0	31.7	32.6	1.04	
25	30.4	30.0	30.1	1.01	柄穴有り
					中＝135
26	26.5	32.2	27.2	0.82	L＝ 7.0



第14表　地輪年代推定表

二．無縫塔（卵塔）（第37図）

中世の新型式の塔婆である無縫塔は、禅宗と共に渡来し、初めはその開山僧のみに使用されたが、南北朝から室町時代には各宗の僧侶にも使用されている。又、僧侶以外の上流人にも稀に造立されている。これは俗界を離れた寺領内に造立されるので、その出土或は散在から寺院址の存在を知る事が出来る。本来は卵形で縫目のないところから無縫塔と名づけられたが、二つの形式を持つ。一つは基礎、竿、中台、請花、塔身の五部からなる重制と、他は基礎、請花塔身の三部からなる単制である。前者は塔身が低く、後者は高い。重制の起源は古く、単制は南北朝以降で、室町時代は、重制が普遍的で、単制は末期以後に流行し、近世に及んでいる。ちなみに桃山時代以降になると、室町期から現われる塔身の頂上の尖りが現われるが、塔身の表面に短冊形または長楕円形のくぼみが刻みつけられ、法名が刻まれてくる。通常、山号、寺号、院号更に僧名、入寂年号が刻出される。当遺跡の二基は以上の点から室町時代後期を降らないと言える。

民間信仰のたかまる室町時代は、経済生活が十分に自立化出来ぬところから、少しでも負担の軽い簡易形式のものや小型化が目立つ。粗面も荒叩きが多く、卵塔の請花には仰蓮の単弁すら見当らないのは、この時代の経済的背景を、変哲のない小さな五輪塔と形と共に微証している。

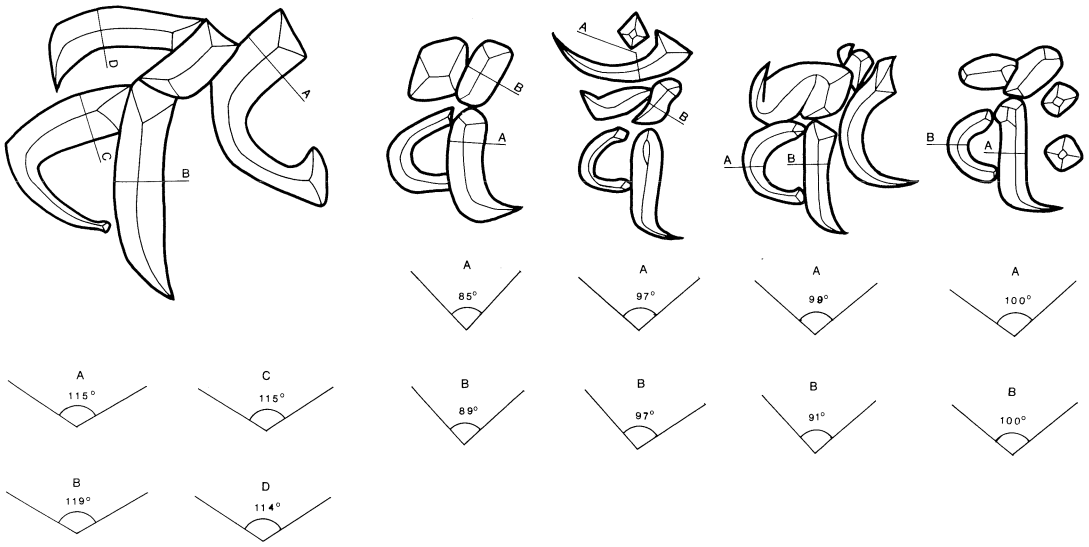
五輪塔の概説

五輪塔を含む石塔には、層塔、宝塔、多宝塔、宝篋印塔、経塔、念仏塔、庚申塔、六地蔵塔無縫塔等々幾種類もあるが、殆どが墳墓であり、供養塔である。それ等は、権力や信仰の変遷に伴いながら、時代の推移と共に盛衰の道をたどる。仏教が伝ってから奈良時代までの信仰のあり方は、主として釈迦信仰であったため、釈迦像や舎利（釈迦の骨）を安置した仏塔（多層塔）や霊廟が造立される。平安期は密教の伝播と共に宝塔、多宝塔、五輪塔が新しい石塔として現われる。貴族的色彩の強い平安時代の五輪塔はおおらかで全体が古風である。鎌倉時代に近づく頃から念仏唱名の浄土宗、題目の日蓮宗が起こり、宋から臨済、曹洞の禅宗が入り、武士や庶民にまで教化が進み、やがて宗派を越えて鎌倉期の近くに生まれる宝篋印塔と共に、二大主流となり雄大で洗練された五輪塔の爛熟期になる。南北朝は、鎌倉の型が固定化し、大形でどっしりした姿から温和になってゆく。民間信仰は南北朝末期から目立ちはじめ、善根功徳を死者のために行なう追善供養や、自分の死後を回向するための逆修供養は室町時代から末期の戦国期にかけての四百年間にわたり伝習となって、地蔵石仏、六地蔵が流行し、庶民の個人的な石塔、石仏が多く作られるようになる。それに伴い五輪塔をはじめ石造物は急激に小形化し、手法も退化し簡略化される。より低い階層の人々の造立が流行すると庶民的な一石五輪塔や四石を積みあげた五輪塔へと移り変ってゆく。室町中期から末期に60cm～75cm　の二尺～二尺五寸前後の小五輪塔が盛んに造られ、天正、慶長の頃を頂点とし、江戸時代に入ると急激に減り始め、元禄頃で終り代って墓標の造立が盛んになる。江戸中期以降確立した寺請制度が庶民の石塔墓を普及させたのである。中世の葬制は、土葬と火葬の二形式が行われ、後者は武士或は寺院関係の者など特定の身分の者のみ行なわれていたというの一般的な見方である。

塔形と梵字

五輪塔の起因については諸説が多いが、真言密教により創始されたものといわれ、印度の古代思想における宇宙構成の根元を表わす五大要素（地・水・火・風・空）が万物を形成するという思想から五字真言が成立し、五輪塔形式が確定されたともいわれている。この塔形は、下から地輪（基礎）は方形、水輪（塔身）は球形、火輪（屋藍）は笠状、風輪（請花）は半球状空輪（宝珠）は宝珠形からなるものをいう。五輪塔は五大思想に基づく五輪図形と説かれているので、下から地、水、火、風、空輪と呼ぶ呼び方と、建造物の塔婆として構成されているから、下から基礎、塔身、屋蓋、請花、宝珠と呼ぶ呼び方がある。各輪を別々に造るのが本格であるが、空、風輪だけを一材で彫成し、他を別材で造るのが普遍的に行われ、室町末期の一石五輪塔は、一材で文字を彫るのに都合よくして地輪をやや長く造っている。

各輪の四方に密教の大日観に基づいて、胎蔵界大日如来や、金剛界大日如来が種子（梵字）で表現されている。東方発心門（キャ、カ、ラ、バ、ア）、西方菩提門（キャン、カン、ランバン、アン）、南方修行門（キャー、カー、ラー、バー、アー）、北方涅槃門（キャク、ラクバク、アク）の四門の種子を配するのが本格であり普遍的であるが、後に正面だけに東方発心門の五大種子を配するようになる。更に簡略して塚田遺跡で発掘された五輪塔のように水輪に各門の種子を配したり、東方発心門の一種子や、修行門の一種子を墨書したり、薬研彫するようになり、更に進んで各輪が素面のものが一般的に造られるようになる。



陰刻角度	時代	彫り方	陰刻角度	時代	彫り方
153°～162°	平安時代(末)	浅い平底式と鋭い薬研彫	130°～140°	室町時代	書体は力を失い、大きさも小さくなる、薬研彫
160°～162°	鎌倉時代	平底式で中後期は薬研彫	110°～140°	戦国時代	〃
141°～143°	南北朝時代	書体は力を失い、大きさも小さくなる、薬研彫	100°以下	桃山江戸時代	書体も大きさも貧弱な薬研彫

第46図　梵字の陰刻角と編年

ま　と　め

塚田遺跡の発掘調査に伴い、南西部から骨片、骨粉を含む土壙群と、内耳土器片、陶磁器の破片北宋銭、釘を含む鉄製遺物が検出され、室町時代後半、戦国期に比定される五輪塔が、最も多く散在し、基礎に反花が刻まれない簡素な無縫塔も認められたことから、廃寺址の存在を予測したのであるが実証する遺構を検出するには至らなかった。戦乱の中に領地を守り、多くの武士は殺世を余儀なくされ、農民は田畑を焼かれ、略奪をほしいままにされ、死と直面する武士や農民が来世の安楽、西方浄土に仏の救済を求め、各宗派を越えて五輪塔を墓塔、供養塔、更には、逆修供養塔として、造立した時代13世紀を上限に江戸期の陶器片が、出上しているところから下限は江戸時代までの土壙で中世の埋め墓ではなかったかと推考する。当遺跡から検出された石造物を含む遺物の推定年代と隣接する集落の寺の建立期、中興期に何らかのかかわりがあると思われ、今後、更に考察を深めたい。大蔵の臨済宗嵩雲山少林寺（弘安五年1282東漸寺空外大和尚開山、天正10年1582織田信長の兵火に罹り、文禄二年1593鳳岩座元再建）。藤田には大永三年（1523）創立曹洞宗正覚寺末藤田山顕光寺。東向に同宗同末の金滝山信光寺（永正二年1505心叟和尚伽藍再建、第子玄桃和尚開山し万治二年（1659）焼失し、享保年間九世戒厳和尚復興、小倉は慶長三年（1598）建立の寂光山妙観寺、文明年間（1469～1486）日蓮宗に改宗し永正六年（1509）開山した日蓮宗見栄山見本寺がそれで、15世紀から16世紀に創立或は再建されているのである。

参考資料

近江の石造美術（２）　田岡香逸著
浄光寺五輪塔修理工事報告書（神奈川県）浄光明寺
石塔の形式から見た津具盆地　岡崎石造美術研究所
日向畑遺跡　上田市真田町教育委員会
川内市史石塔編　鹿児島県川内市
おさき墓地石塔碑群　熊本県教育委員会
蓮華寺跡相良頼景館跡　熊本県教育委員会
石造美術入門　川勝政太郎　社会思想社
葬送儀礼の民俗　佐藤米司著　岩崎美術社

まとめ

土器類

縄文土器

発掘調査Ｂ区域内の南西部（第31図）は二度に亘る田普請が行われており、第一層耕作土、第二層黒褐色土第三層褐色土に大別されるが、一号住居址が検出された第三層は黄褐色混じりの赤褐色土、二号住居址が確認された第三層は暗褐色土、土壙域は明黄褐色土である。

分布状態は、縄文前期中葉（黒浜式）（第47図No.１～No.３）は１号住居址が確認された区域から検出された。この期の土器は、釈迦堂遺跡と大泉村で採収され、須玉町でも桑原南遺跡から前期初頭の土器が発掘されている。同区域から諸磯Ｃ式に比定される土器片（第47図No.４～No.13）も検出された。No.16は十三菩提式土器といわれるものであるが、ここでは諸磯Ｃ式の一群として把えられよう。この区域の第二層、第三層から検出された土器の大半を諸磯Ｃ式が占める。

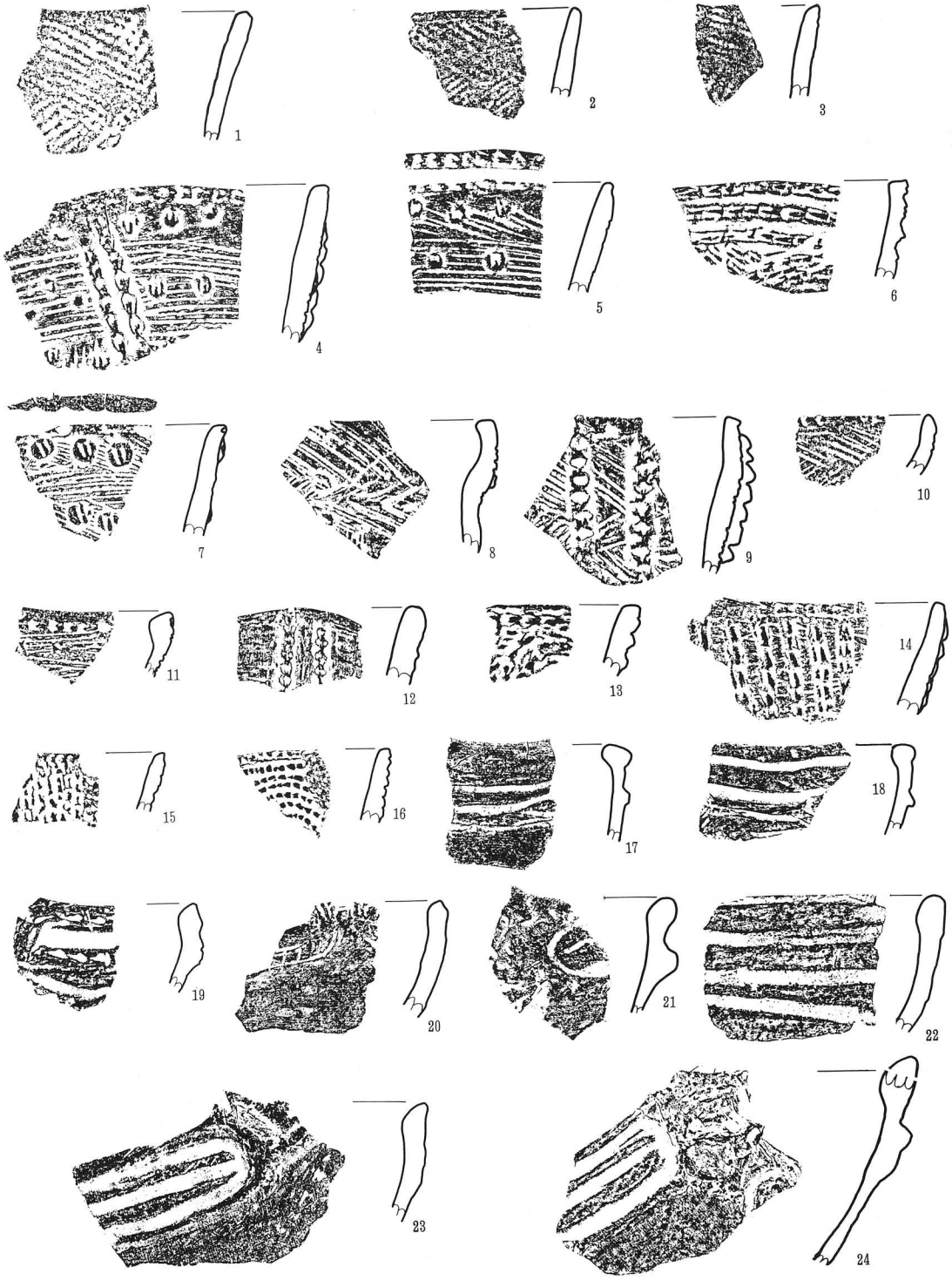
２号住居址の黒褐色の覆土から検出された土器は、縄文後期後半に比定され、加曽利Ｂ式以降に位置づけておきたい。関東でいう曽谷式又は安行Ｉ式に平行するものであろう。

従来県内で余り知られなかったものであるが、最近では、大泉村の金生遺跡、高根町の青木遺跡等で類例が発見されている。

これらの縄文土器は比較的狭囲な区域の覆土、或は表土精査中に散布しているものを採集したもので、遺構は耕作によって破壊されたか、当遺構全域が緩い傾斜の地層で、大小の角礫や円礫が混入していることから、土石が流出し、遺構も、それによって消滅してしまったものか今後検討する必要があると思われる。

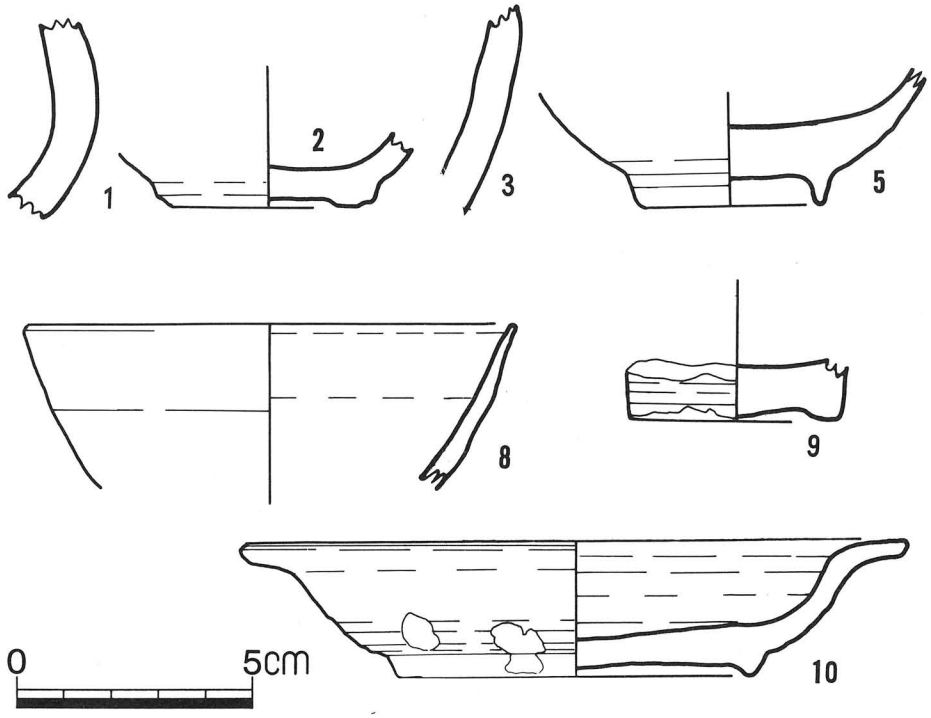
引用参照文献

1. 花鳥山石器時代遺跡報告書　八代町誌　樋口清之
2. 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第４集、第５集
   高井東遺跡　　埼玉県教育委員会　　昭和50年３月
3. 日本歴史地図原始古代篇（上）柏書房　1982
4. 大山柏、竹下次作、井出佐重
   山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告書　史前学雑誌　13－３

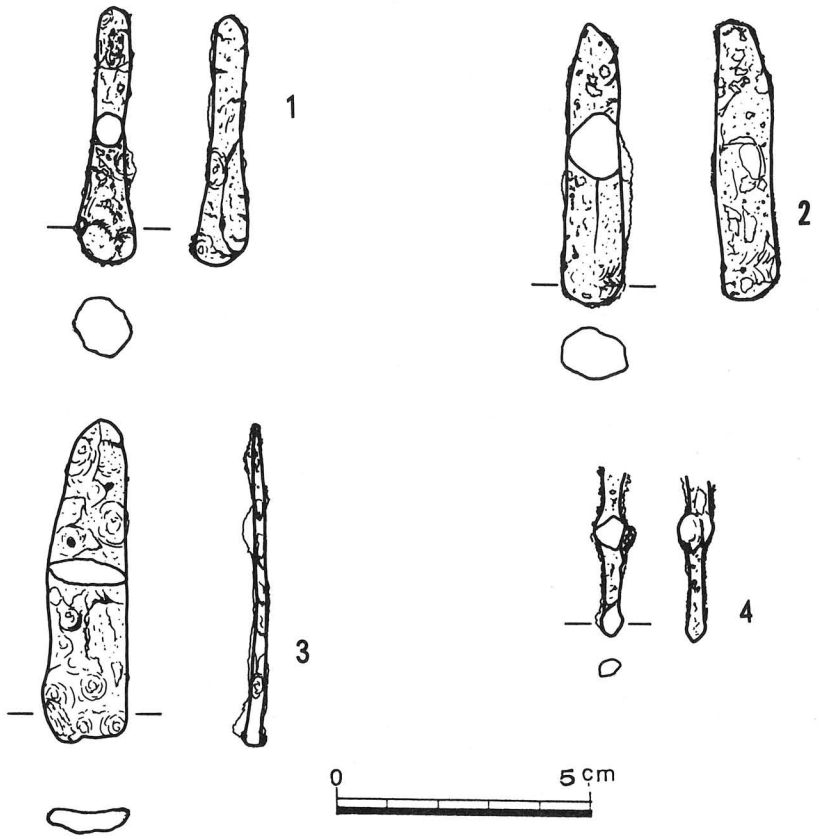


第47図　縄文土器拓影

0　5cm



第48図　陶器



第49図　鉄器

陶磁器（カラー図版１）

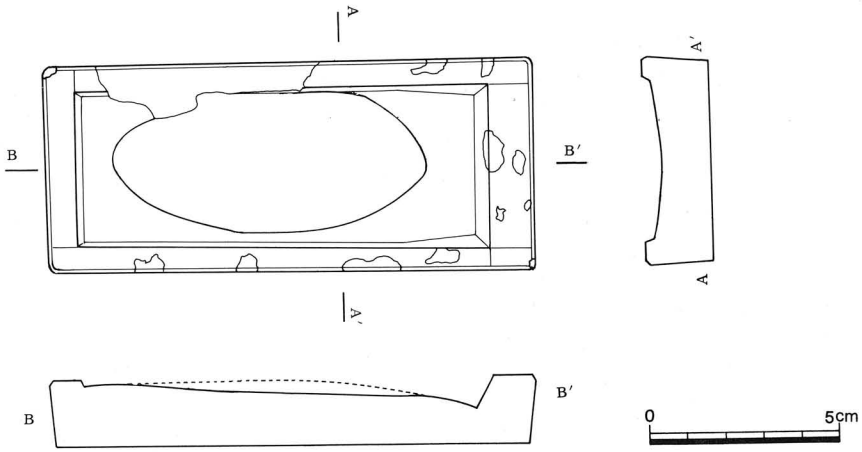
1. 四耳壷片　13世紀代につくられ、灰釉で釉が安定せず、発泡している。（１号住傍表採）
2. 天目茶碗底部　14世紀前半の半地下式の窯で焼かれた**窖**窯Ⅳ期前半に比定され、須恵器の削り出し高台出現した最初のころのものである。（土壙南表採）
3. 瓶子片　14世紀代で、三本の条がひかれ、灰釉である（トレンチ100―35～40内）
4. 天目茶碗口縁部片　中国製で、胎土は炻器質で、14世紀代のものと思われる。（調査区域Ｂ区北東部表土排除中検出）
5. 天目茶碗腰部　15世紀初頭で瀬戸製である。**窖**窯Ⅳ期前半に当ると思われる。腰部から下部は化粧掛けを施し、削り出し高台で、胎土良好（２号住居址東南の土壙覆土中）
6. 天目茶碗底部　15世紀中頃で、**窖**窯Ⅳ期後半に当り、削り出し高台である。高台端までガラス質の釉が流れおちている。（土壙11表土排除中検出）
7. 合子片　灰釉で小蓮弁文が肩から胴部に描かれている。鎌倉時代末（土壙南表土排除中）
8. 山茶碗片　白瓷系陶器（平安時代の灰釉を施した陶器を白瓷という）で、窯跡が山中にあり、廃棄された椀、皿などが山肌にガラガラ露出している様相からこの名が出た。大東Ｉ式に比定され、西暦1400年代前後に相当する。山茶碗の中でも最後の時期に相当する。（１号住居カマド内）
9. 天目茶碗底部　17世紀初頭で登り窯初頭に当り、高台の削りにシャープさが見られない。総織部と同時期のものである。（土壙南表土排除中）
10. 緑釉皿　総織部で元和年間既ち17世紀初頭に比定される。銅緑釉をかけ、釉下に線刻や花彫刻などによる文様が施されている。鉢、皿、香炉などがある。（土壙の西グリット110―50内表採）
11. 白磁の皿　中国製　17世紀　（土壙南表採）
12. 中国製青磁片　（グリット100―40内表採）
13. 14　江戸期の飴釉で碗の底部と腰部

以上、永い年代間を持つ陶器の検出は、往時、相当の権力や財力がなければ所有不可能な陶器であり、調査地域Ｂ区の土壙周辺から多く検出されたことは意義が深いと思われる。

陶器類判別　愛知県陶磁資料館　井上喜久男氏
参考資料　美濃焼　田口昭二著　ニュー・サイエンス社

鉄器

Ｂ区発掘調査に伴い出土した鉄器は４本で、腐蝕がはげしく、長さ5.4cm 最大径1.2cmの鉄釘と思われる鉄器が土壙№17の表土より20cm 下に並べられた石の下から出土している。（第49図№２）長さ4.9cm、最大径1.0cm の鉄器（第49図№１）は、土壙№35から出土したが、腐触がひどく、角釘と思われる。土壙域の西側での表土除去中、検出されたのが小ぶりの鉄器で、長さ3.3cm、幅は３cm、厚さ２cmで、中断された角釘の先端部と考察される。（第49図№４）以上３点はいずれも頭部が欠損している。残る１点は、長さ6.4cm、幅1.6cm、厚さ２～３cmの鉄器で、刀子と思われる形状を呈して１号住居址周辺の表土除去中、ニガ下より検出されている。（第49図№３）



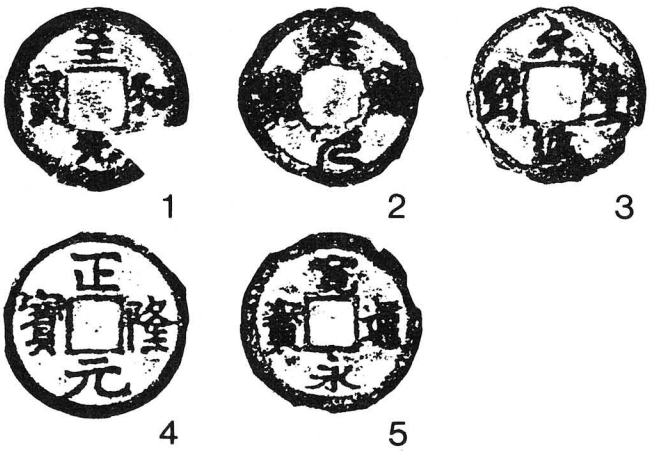
第50図　硯

硯（第５０図　１）

長さ13cm、幅5.5cm、高さ1.8cmの砂岩（粘盤岩に近い）製の方形硯である。各辺の縁は面取りされ、上面の縁部に巾4.2mm×長さ10,6mmの割りつけがなされた線状の痕跡が確認される。首部の縁は他に比べて巾が広い。池部は岡部から緩かに落ち込み、首部の内側縁から斜め28°の切り込みが池部の底をつくる。岡部の磨耗の度合から、相当長い間、利用されていた事がうかがわれ、中央からやや左寄りに墨を摩る癖がある人物が所有していたとも考えられる。上面の縁部の一部と外周及び底部全面は、河岸段丘上の二次堆積の地山に包含されている無機物が粘着している。津金伸二

古銭

①至和元宝・（北宋）、至和二年（1055年）②熙寧元宝・（北宋）熙寧元年（1068年）③元豊通宝・（北宋）元豊元年（1078年）此銭は西京阜財監、衛州黎陽監、永興軍、華州、陜府、絳州垣曲監、舒州同安監、厳州神泉監、興国軍富民監、衡州熙寧監、鄂州宝泉監、江州広寧監池州永豊監、饒州永平監、建州豊国監、韶州永通監、恵州阜民監の十七銭監で鋳造された。④正隆元宝・（金）、正隆元年（1157年）⑤寛永通宝・豊後国直入郡竹田古町鋳、寛永十四年（1637年）鋳地に山城国京都説がある。（以上は、奈良県立橿原公苑考古博物館の大和考古資料目録館蔵古銭資料第２集を参考にした。）津金義尚



第51図　古銭

（3）まとめ

塚田遺跡は斑山の南麓から南西に形或された尾根の東側の低位河岸段丘上に立地し、本遺跡の北と西は、この尾根によって視界が遮られる。下小倉と大蔵の境をなす峠から藤田へ到る町道の東は急崖となり、町田という小字名を残す水田が塩川沿いに広がる。緩傾斜面をなす調査地域の内竪穴及びピット群を検出した北東部を中心に、町道沿いの南北50～60m、東西40～50mの区域は、流水によるものと思われる礫が散在し、所々に巨岩が埋まり、巨岩は南東部程目立ち礫は少ない。A区の表土排除中に僅かな遺物の出土にとどまり、住居址や、掘立柱建物遺構の柱穴のような性格の把握が容易な遺構は検出されず、抜根と思われるピット群と、竪穴が発見された。

B区では、鎌倉時代に比定される遺物を伴った住居址が一軒と、縄文時代後期後半住居址が土壙群の南から検出されたが、わずかな壁の立ち上りを確認しただけで、住居址のプランは把握出来なかった。

B区、特に南西部には、室町時代末期と推定される五輪塔が田の畦や配水溝脇におかれ、田を区劃する石垣に利用されていた。南東部一区劃の呼称が「コツ・骨」という小字名をもち、この「コツ」のすぐ西から70基以上の土壙群が検出された。

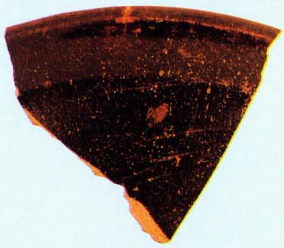
土壙群が所在する区域の確認面には、調査区域全体に認められた大小の礫が殆どなく、土壙群の東で巨岩が2ケ、土壙の一部を埋めている。露出部分だけで1.7m×1.6mと、半分は調査区域外に残るもの1.8m×1mが測られ、人為的な投入でなく流水による埋没と考えたい。

五輪塔の地輪に枘骨穴があることと、土壙内から骨片や骨粉が検出されていること、土壙内から天目茶碗の一部が発見され、釘と思われる鉄器が出土している。北宋銭や、硯のように極めて身辺なものが確認面に近い層から検出されていること等、特殊な土壙群として、中世墳墓の形態を比較検討しながら研究をすすめたい。

1. 四耳壷片

2. 天目茶碗部

3. 瓶子片



4. 天目茶碗口縁部片

5. 天目茶碗腰部

6. 天目茶碗底部

7. 合子片

8. 山茶碗片

9. 天目茶碗底部

10. 緑釉皿

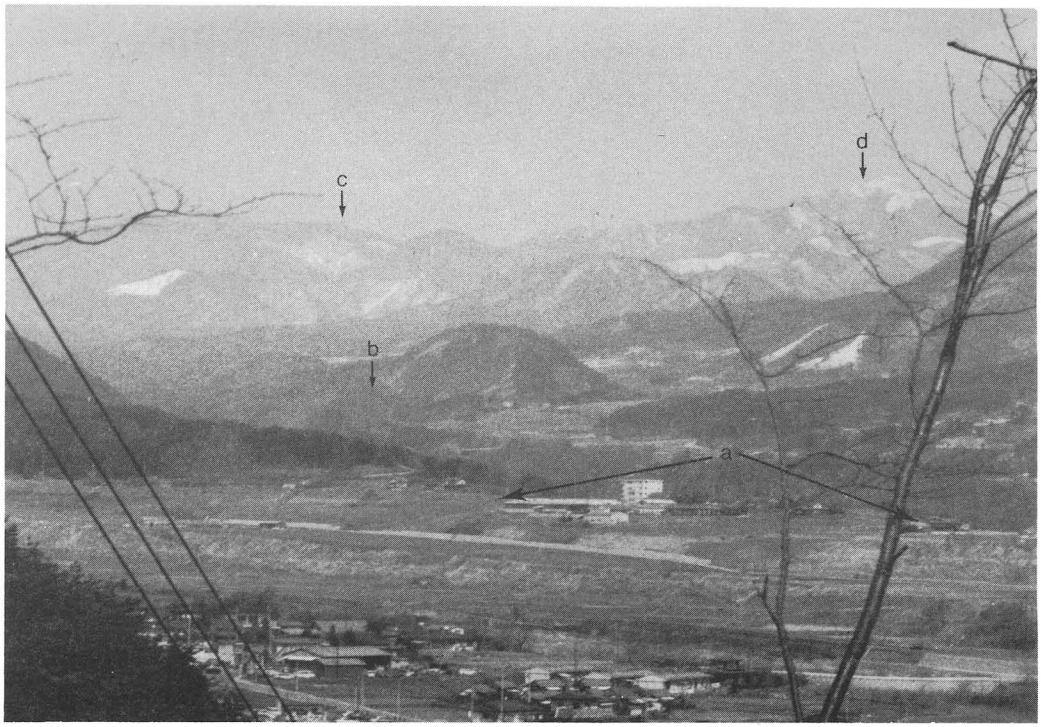
11. 白磁皿

12. 中国製青磁片

カラー図版１　塚田遺跡出土陶器類

中尾城遠景小手指坂（西方）より

図版 2



1. 若神子古城西南西より　a 中尾城　b 獅子吼城　c 瑞牆山　d 金峯山

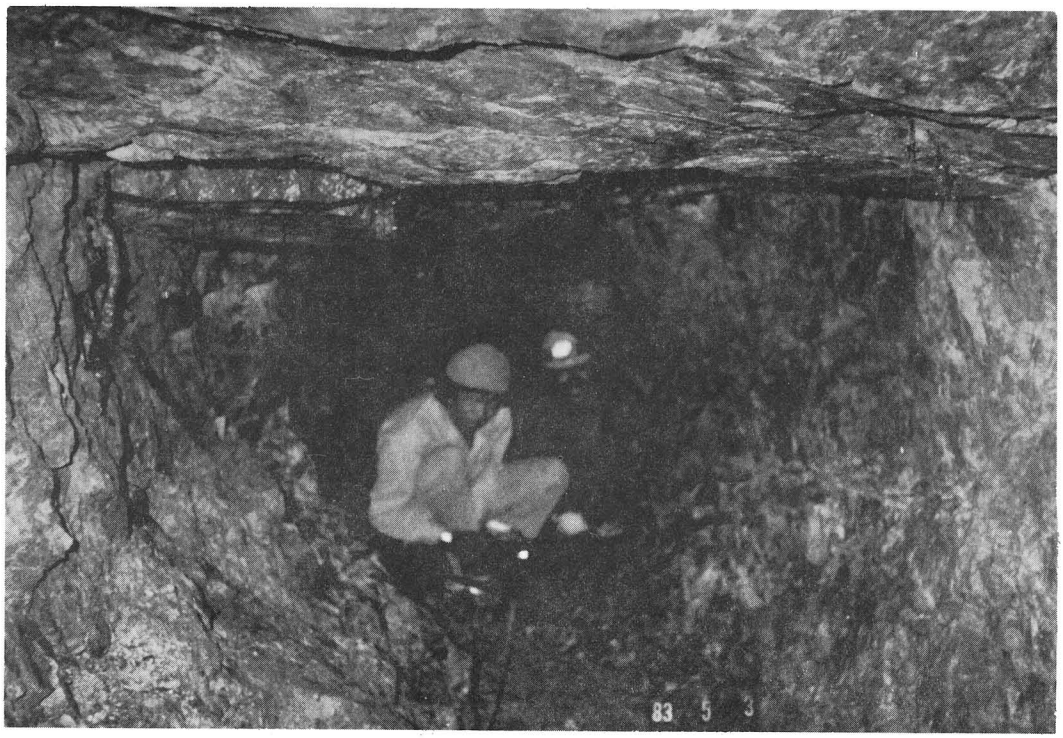
2. 東方対岸　明野村上神取より

1. 中尾城より北方　a 源太ケ城　b 旭山砦

2. 中尾城より北東　a 斑山廃坑　b 三枝氏家敷　c 大渡の烽火台　d 獅子吼城

1. 中尾城より南方　a 塚田遺跡　b 大豆生田砦　d 新府城

2. 中尾城より南西　a 若神子城（北城）b（古城）c（南城）d 正覚寺

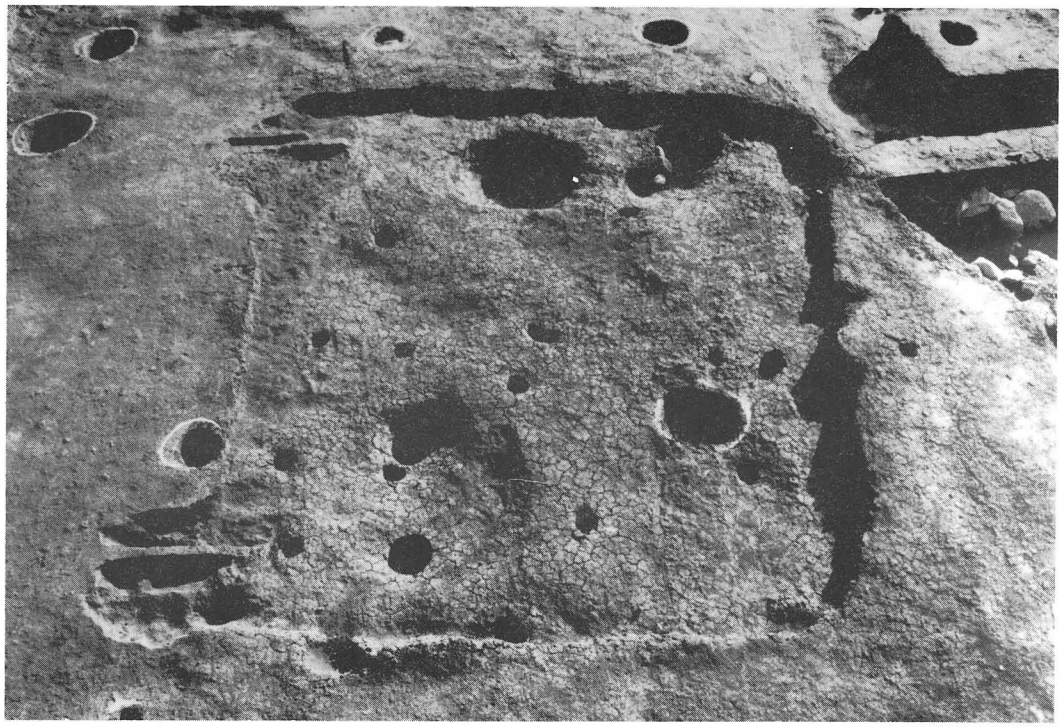


1. 斑　山　廃　坑　（坑　内）

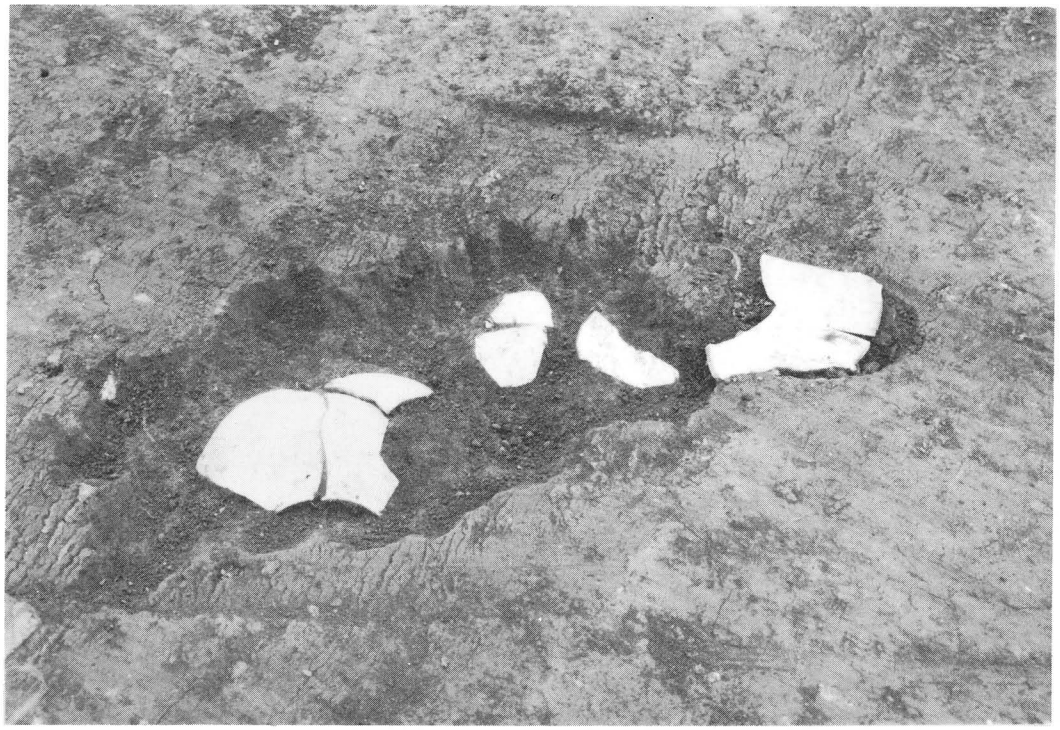
2. 斑　山　廃　坑　（坑　口）

図版 6

丸 茂 種 市 氏 蔵 写 真

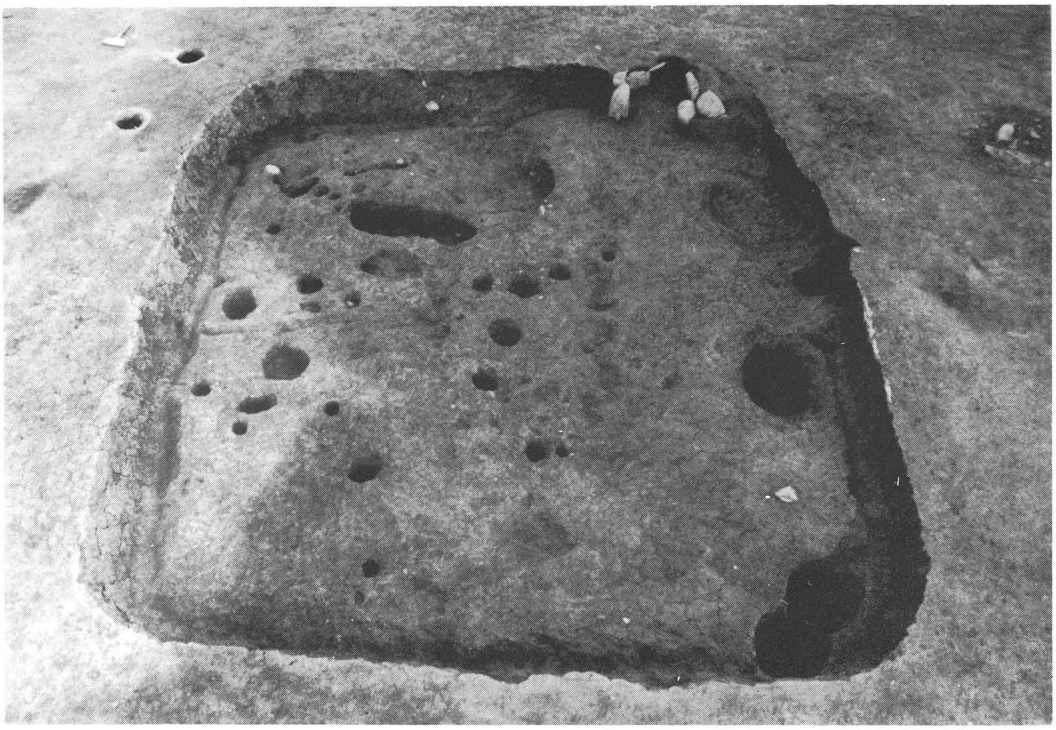


1. 1 号住居址（北より）

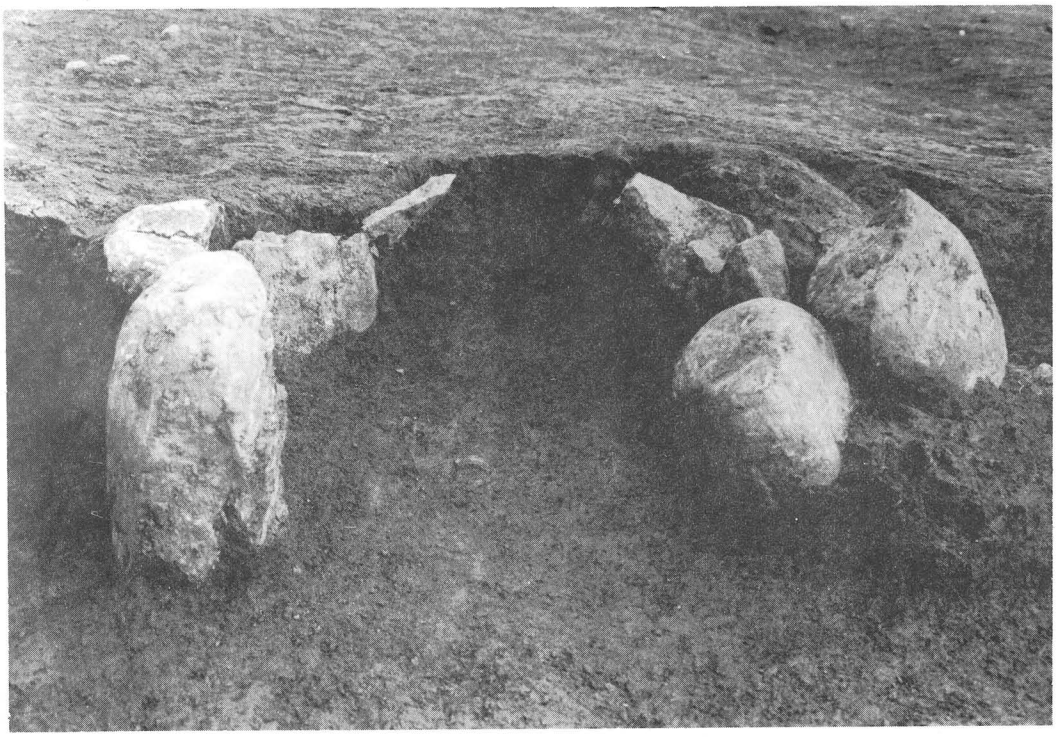


2. 1 号住居址遺物出土状態

図版 8



1. 2　号　住　居　址（西から）



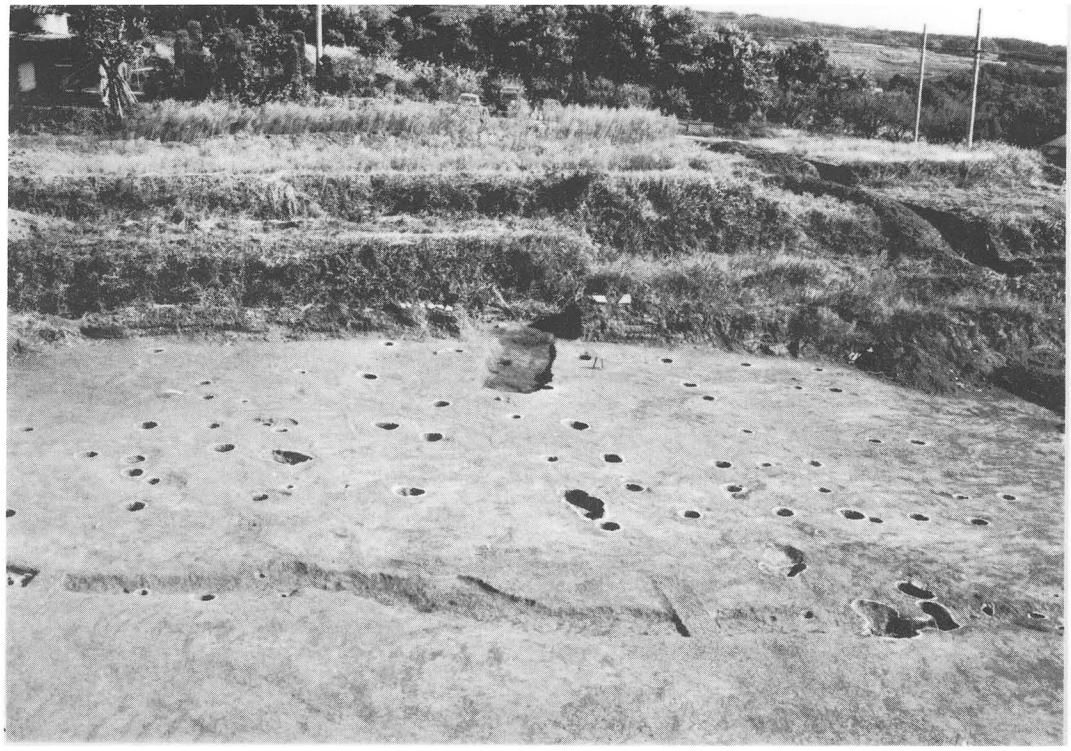
2. 2　号　住　居　址　カ　マ　ド

1号住居址、1号掘立柱建物遺構　1～3号溝（西から）

1. 発掘風景（北東より）１号住居址・１号掘立柱建物遺構　１号溝附近

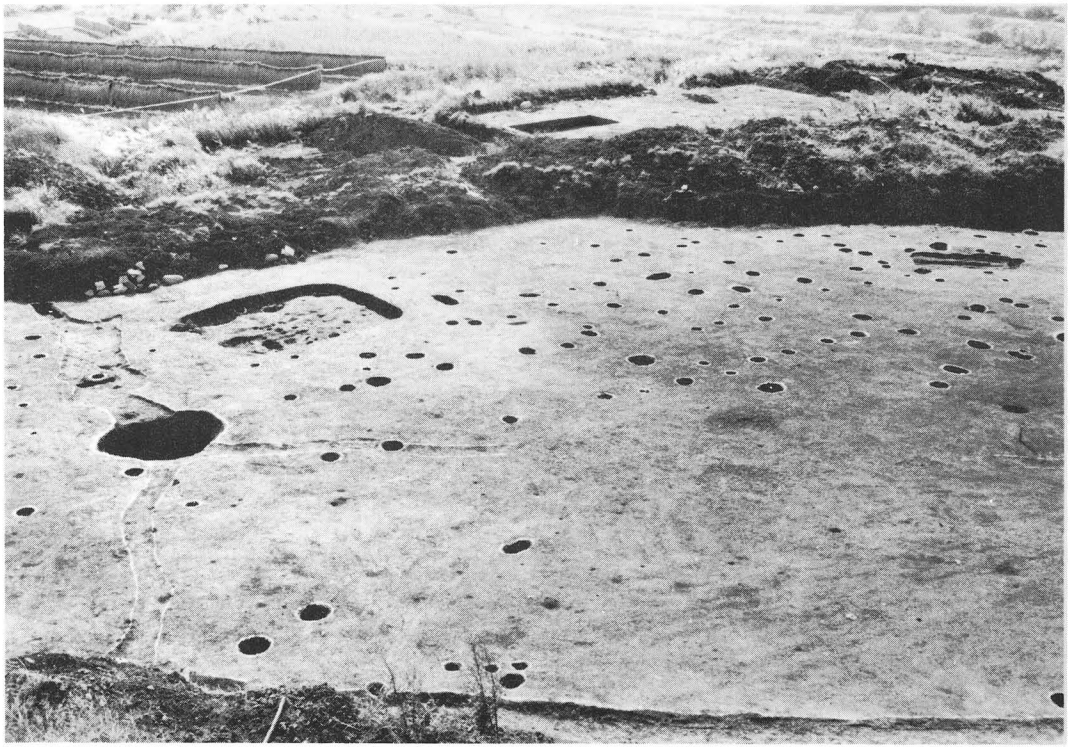
2. 発掘風景（南西より）１号溝附近

1. 2号掘立柱建物遺構（西より）柱穴上に立つ須玉中学生徒

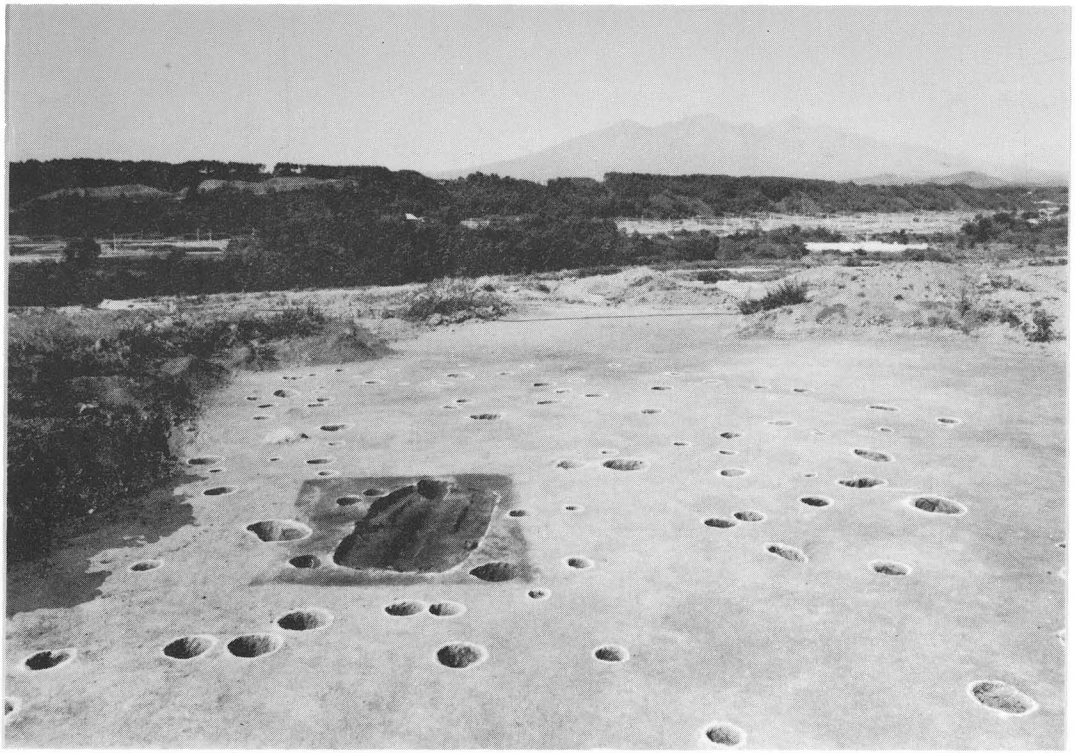


2. 3号掘立柱建物遺構及び3号竪穴遺構附近（西より）

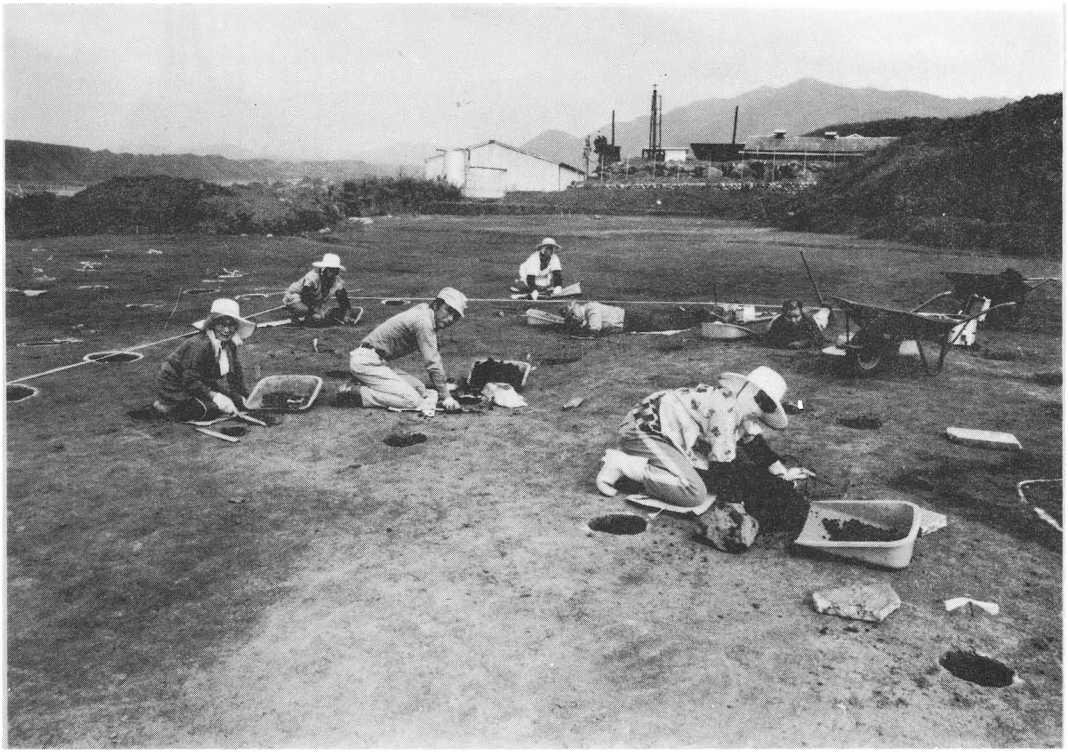
1. 4号掘立柱建物遺構・3号井戸・南堀り附近（北より）



2. 3号井戸・2号住居址・1号竪穴遺構及び掘立群（北東より）



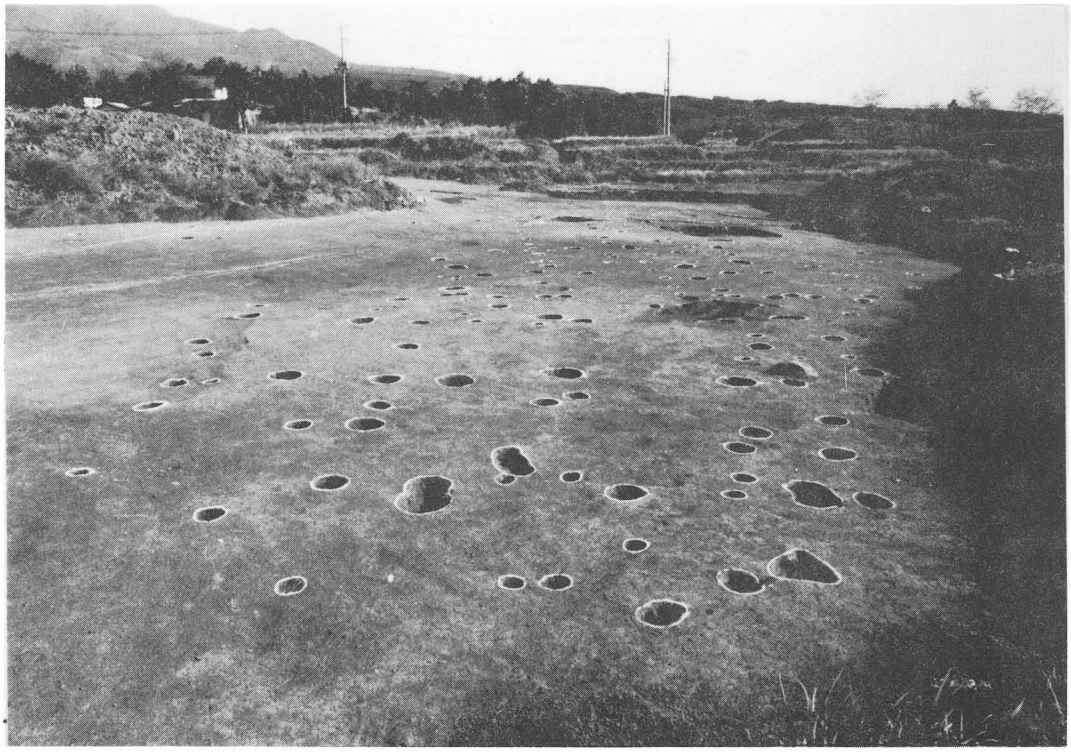
1. 掘立群及び１号竪穴遺構より八ケ岳及び南麓台地を望む（南東より）



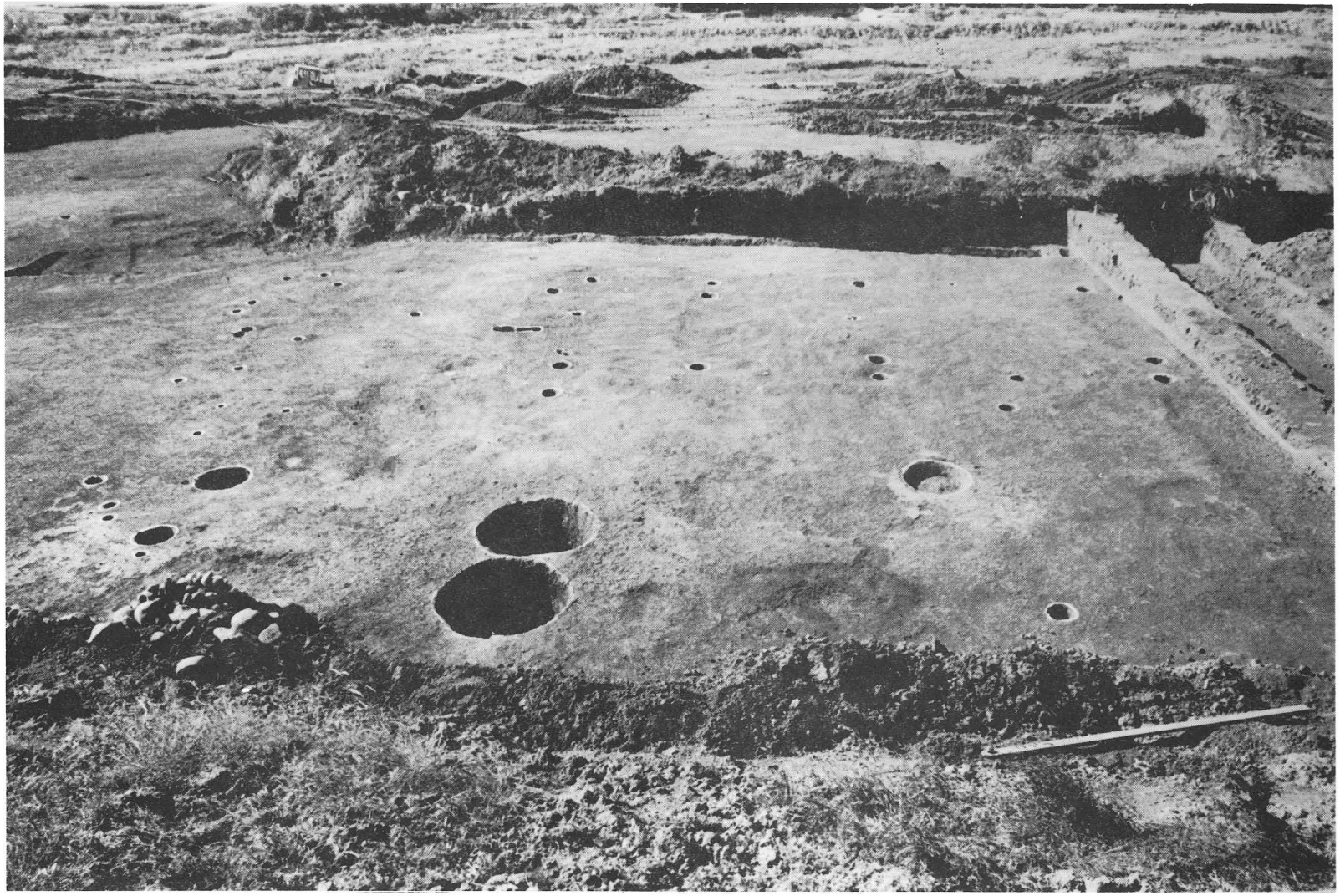
2. 掘立群柱穴発掘風景（南より）

図版14

1. 5号掘立柱建物遺構　P—32の柱痕



2. 4～8号掘立柱建物遺構（西より）



3. 9号掘立柱建物遺構・1—2号井戸・7号溝（東より）

図版16

8号掘立柱建物遺構附近から斑山を望む（南より）

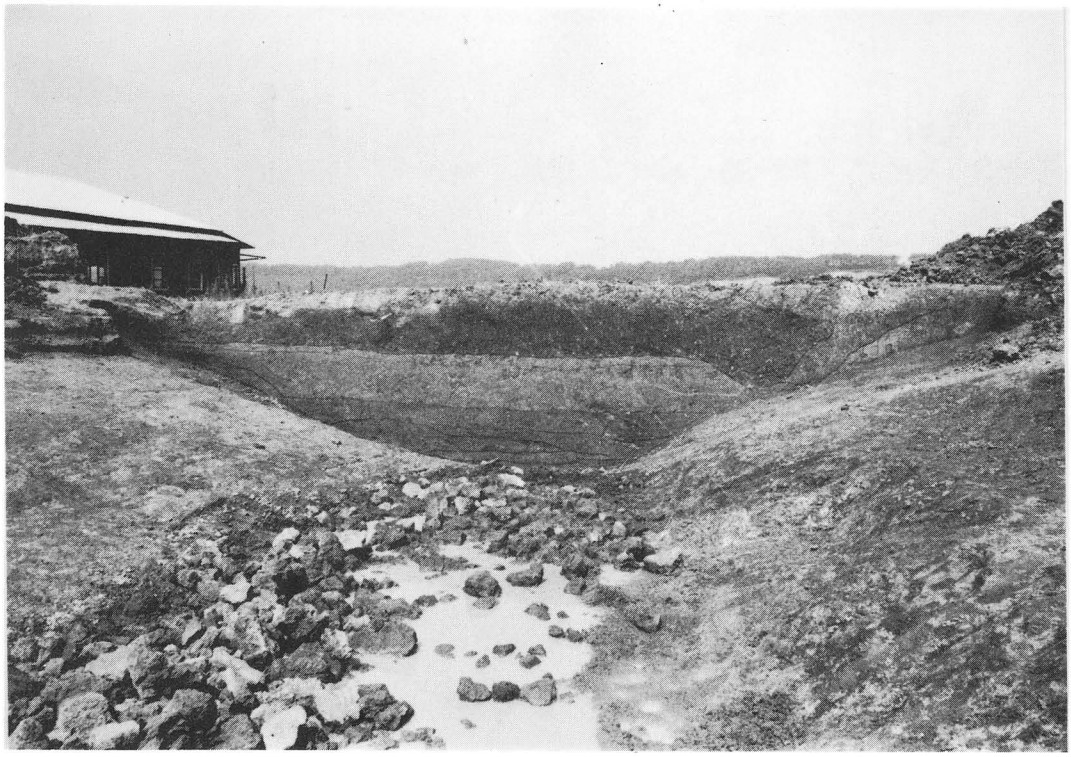
北　堀　（北　西　より）

図版18

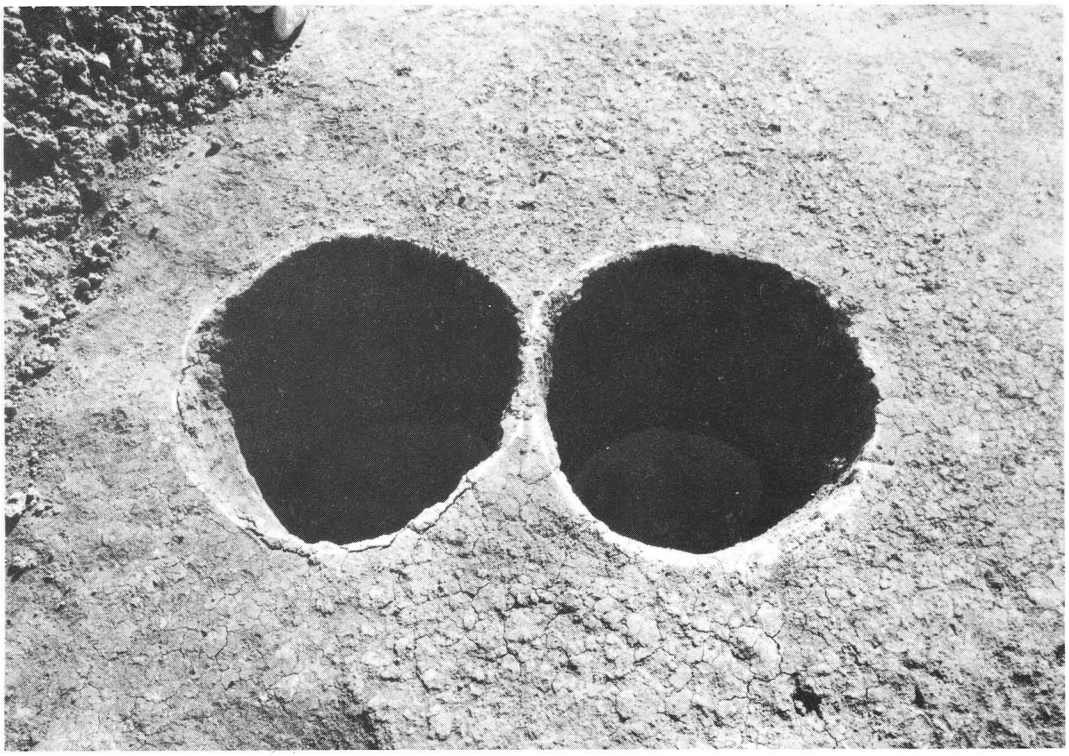
1. 北 堀 東 （ 北 よ り ）

2. 北 堀 発 掘 風 景 （ 北 東 よ り ）

1. 北堀発掘風景（北より）

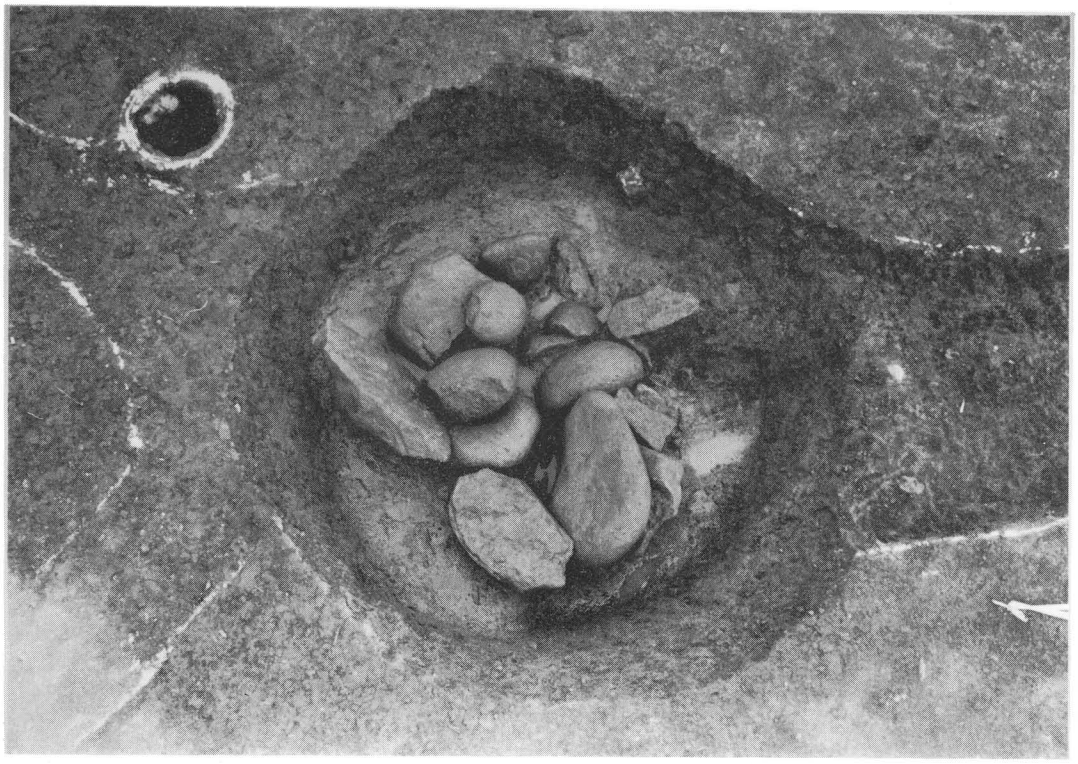


2. 北　堀　土　層　（東より）

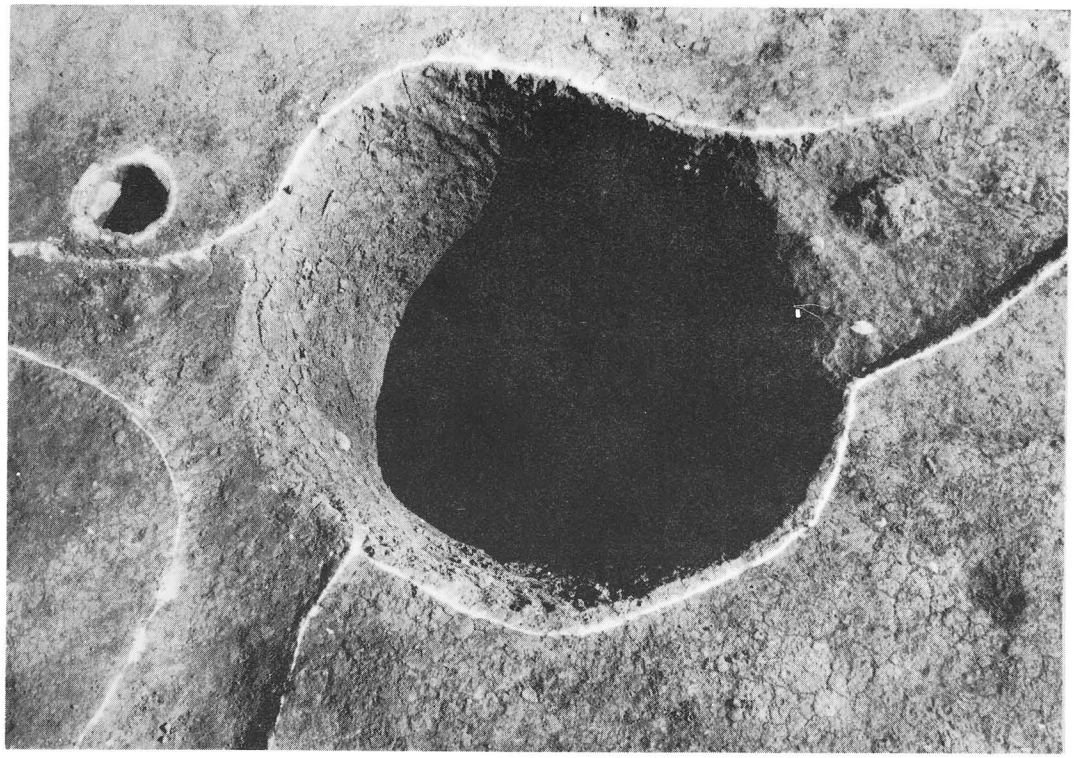


1. 1～2号井戸（北より）

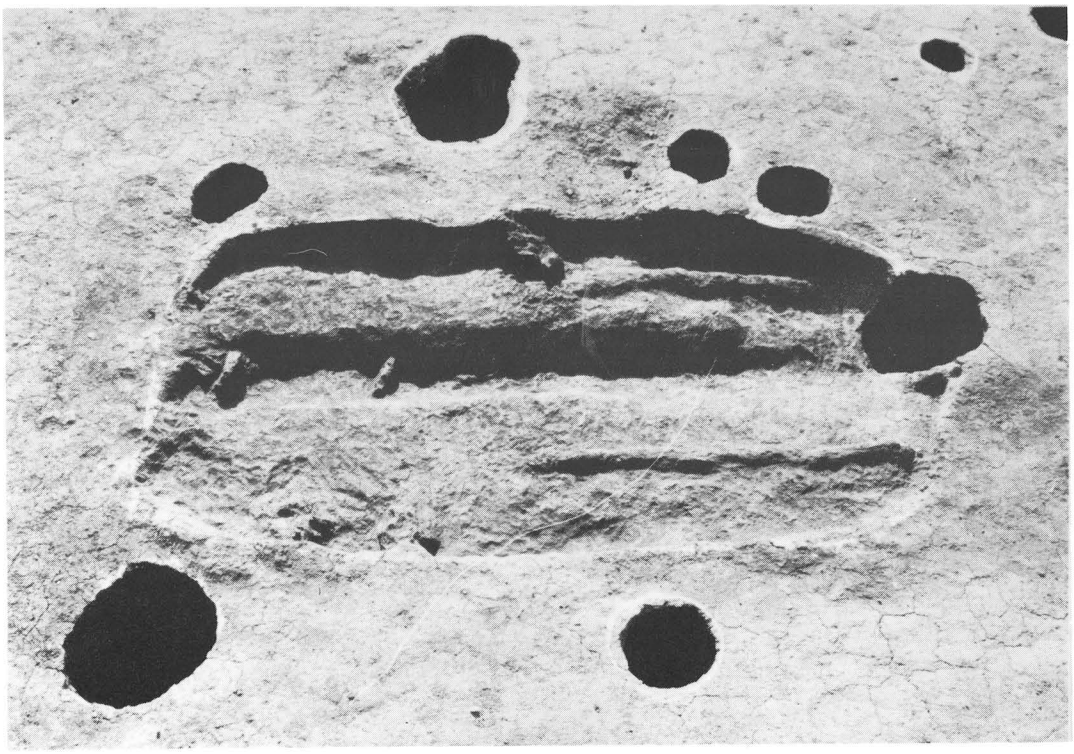
2. 1～2号井戸　発掘スタッフ（南より）



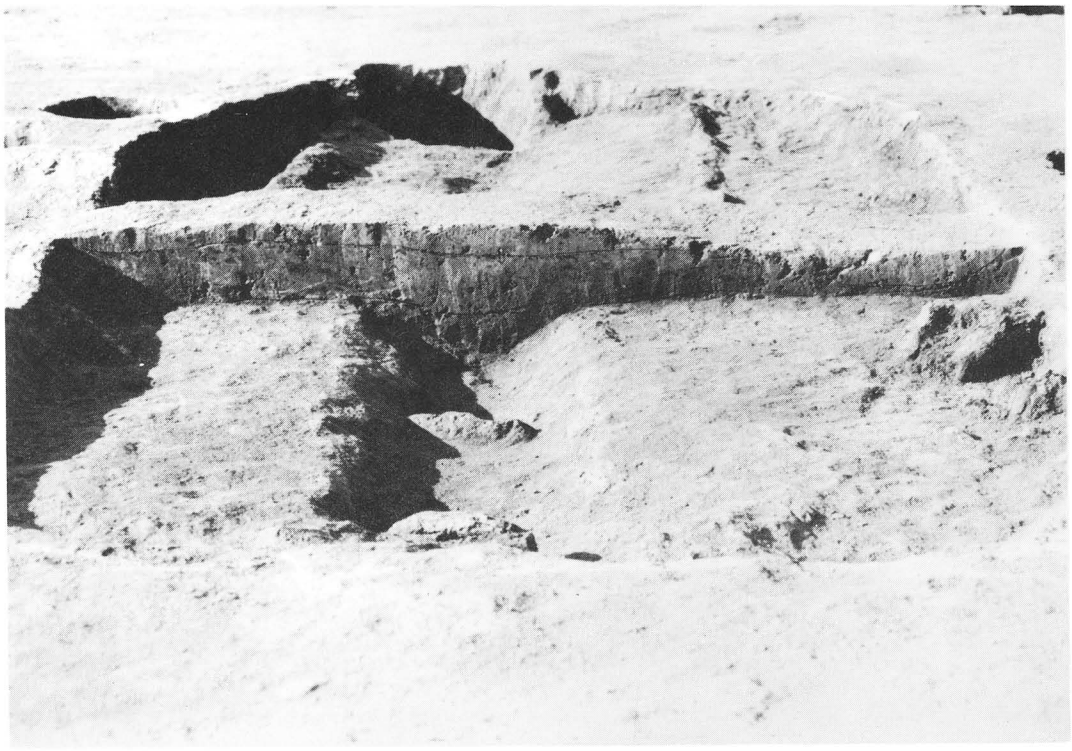
1. 3号井戸集石状況（西より）



2. 3　号　井　戸　（西より）

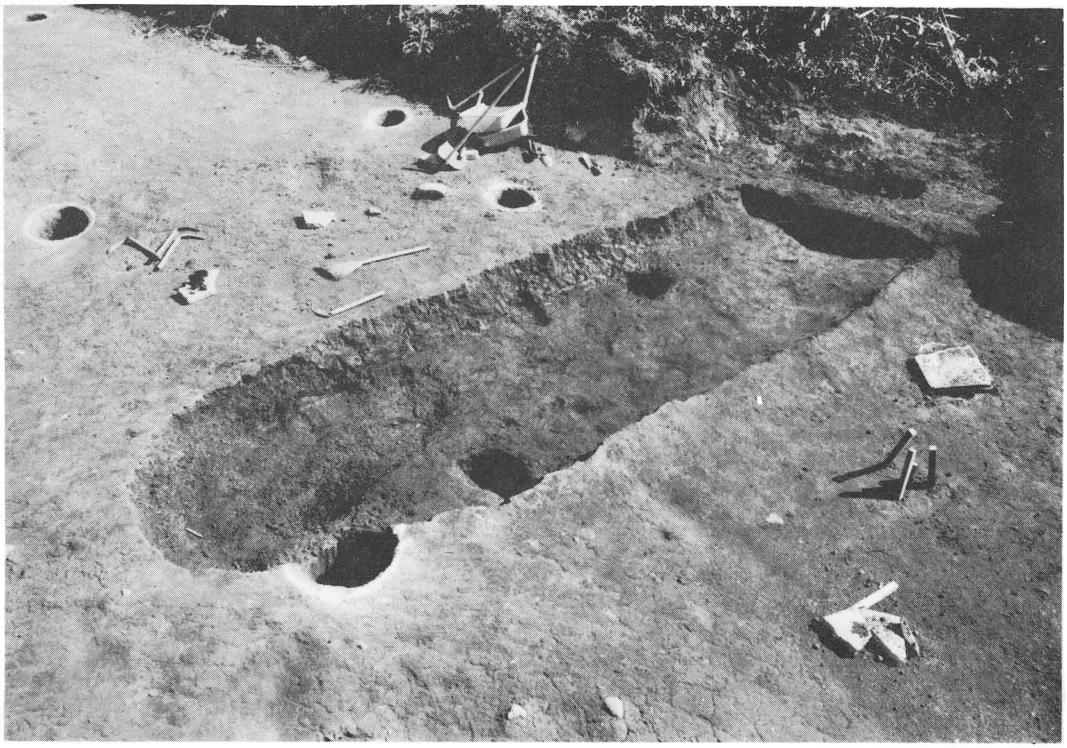


1. 1 号 竪 穴 遺 構 （北より）



2. 1 号竪穴遺構土層（東より）

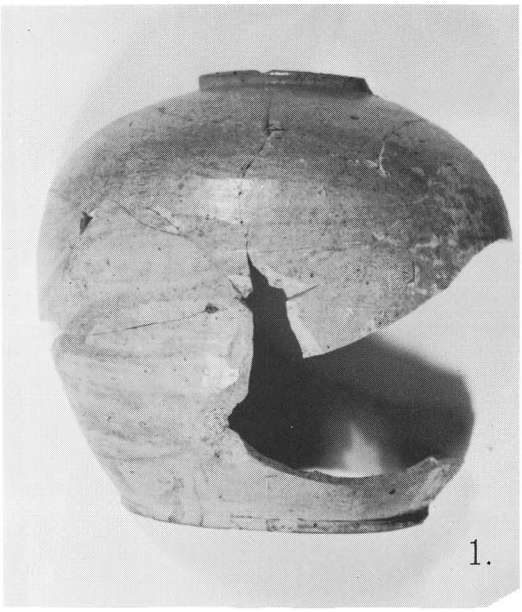
1. 2 号竪穴遺構（北より）

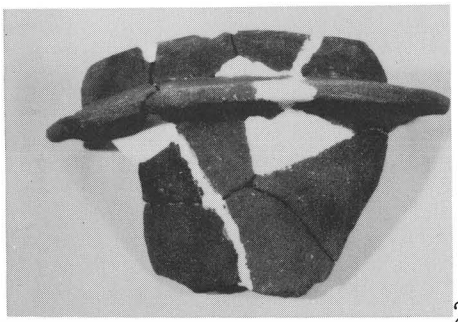


2. 3 号竪穴遺構（南西より）

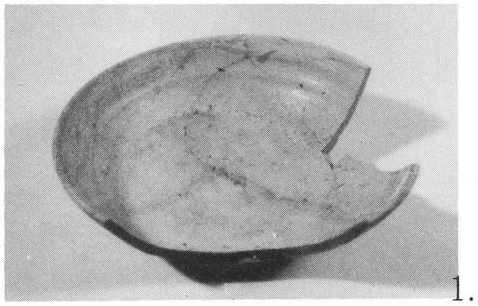
1. 発掘風景Ｂ区西、南北トレンチ（北より）

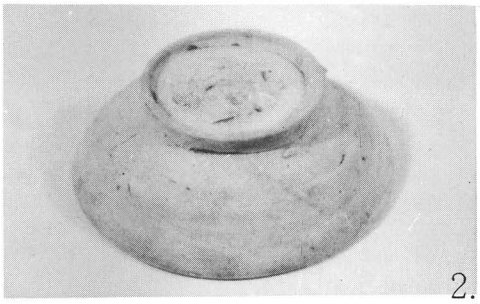
2. 発掘風景Ｂ区斜面トレンチ（東より）

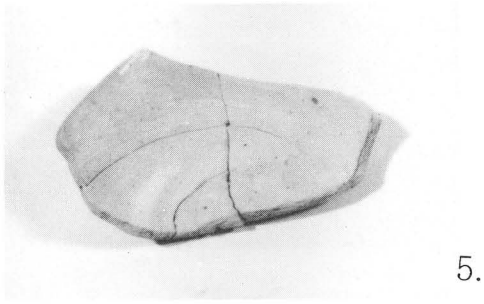


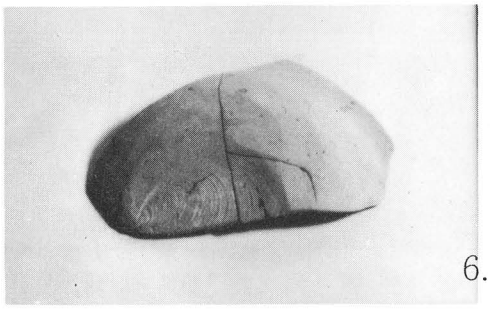


1. 1号住居址出土遺物　　1.灰釉短頸壷　2.羽釜

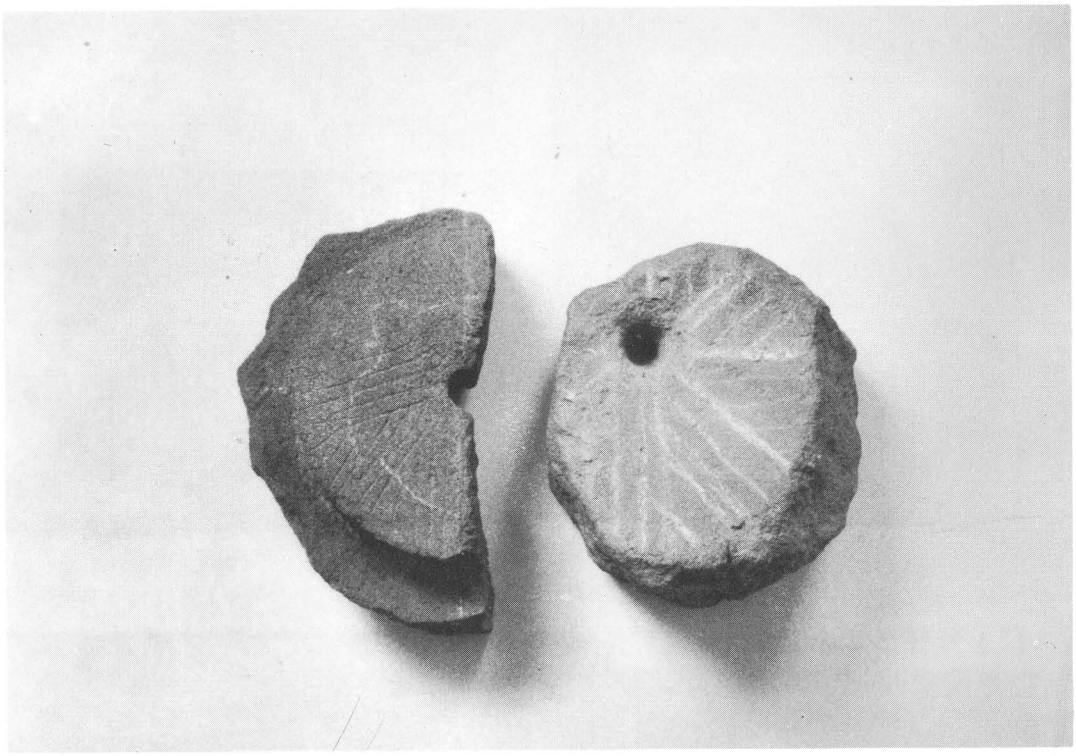








2. 2号住居址出土遺物　　1.灰釉高台付坏　2.土師質土器皿　3. 坏



1. 石臼　a：6号掘立柱建物遺構（p—41）出土。6：3号井戸出土

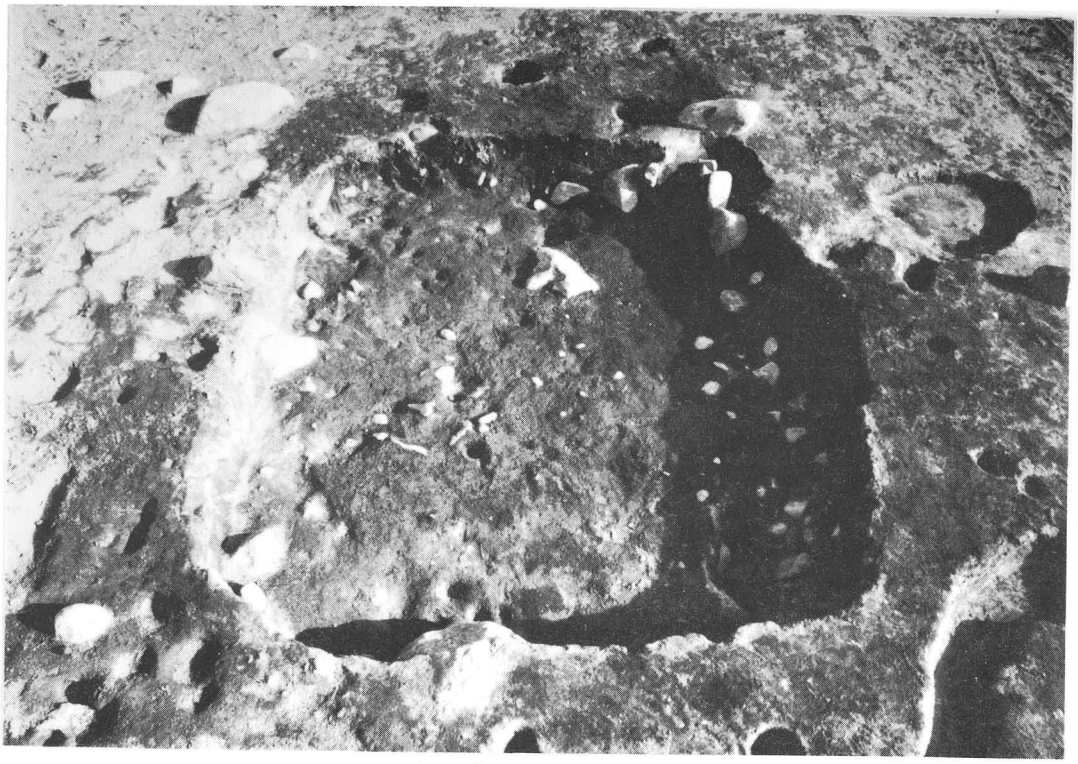
2. 発　掘　調　査　参　加　者

1. 塚田遺跡遠景（東方明野村より）

2. 五輪塔散在状況（人物附近、南西より）

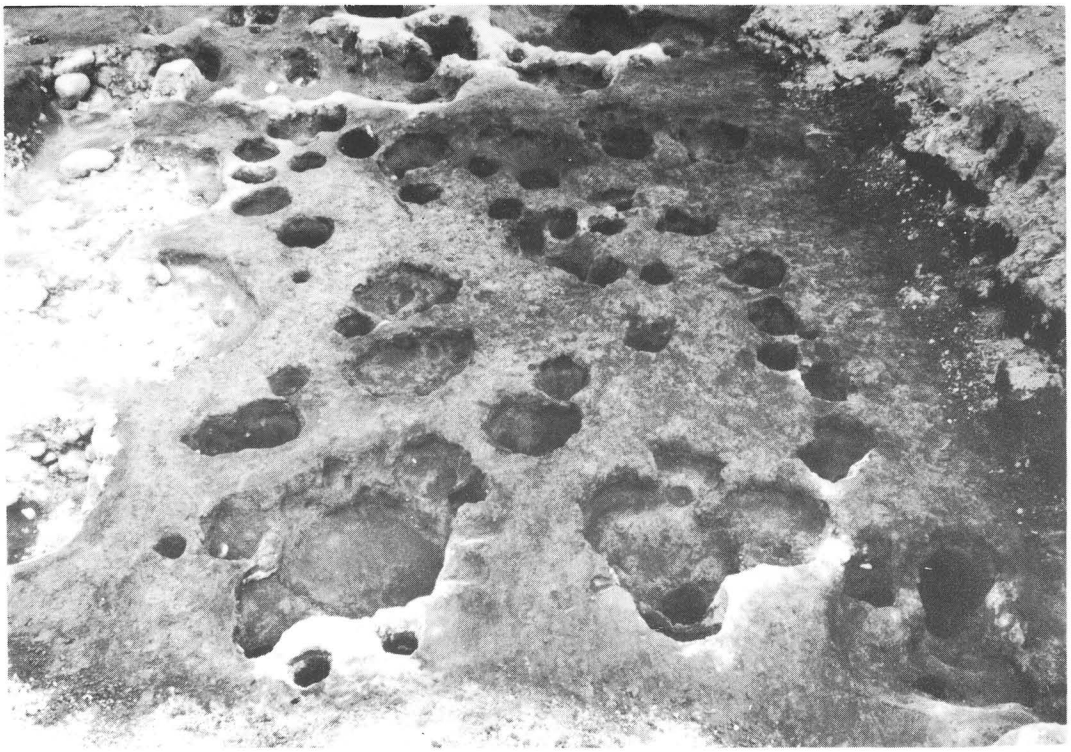
1. 発掘前集めた五輪塔群（南より）

2.　1号住居址（実測作業中）及び茅ケ岳と西麓（西より）



1. 1　号　住　居　址　（西より）

2. 1　号　住　居　址　カ　マ　ド



1. 2　号　住　居　址　（南より）

2. 2　号　住　居　址　（西より）

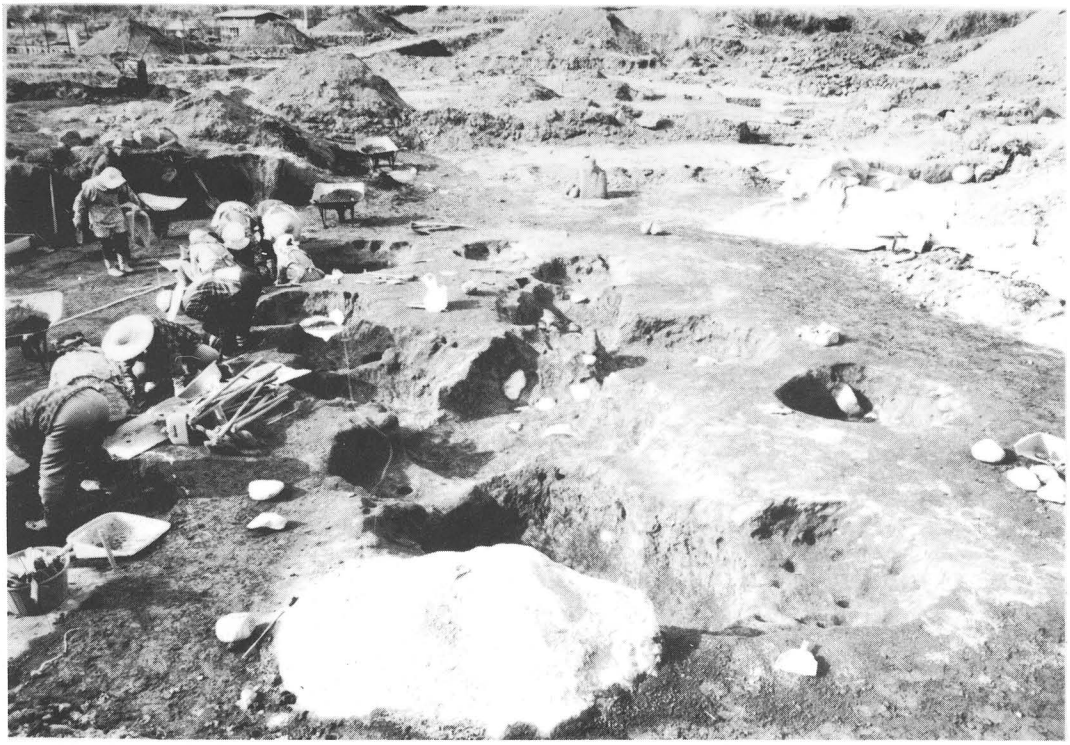
1. 北トレンチ発掘風景（南西より）

2. 竪穴群発掘風景（南より）

図版32

1. 竪　穴　群　（北西より）

2.　土壙群　発掘前（西より）

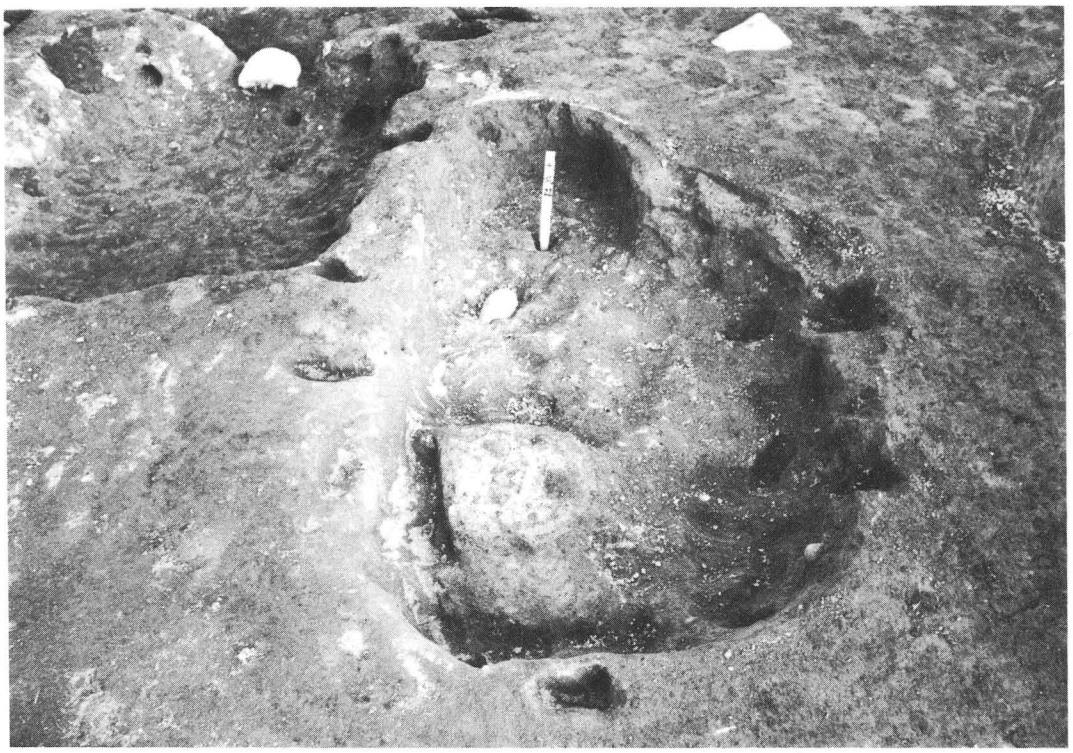


2.　土壙群発掘風景（東より）

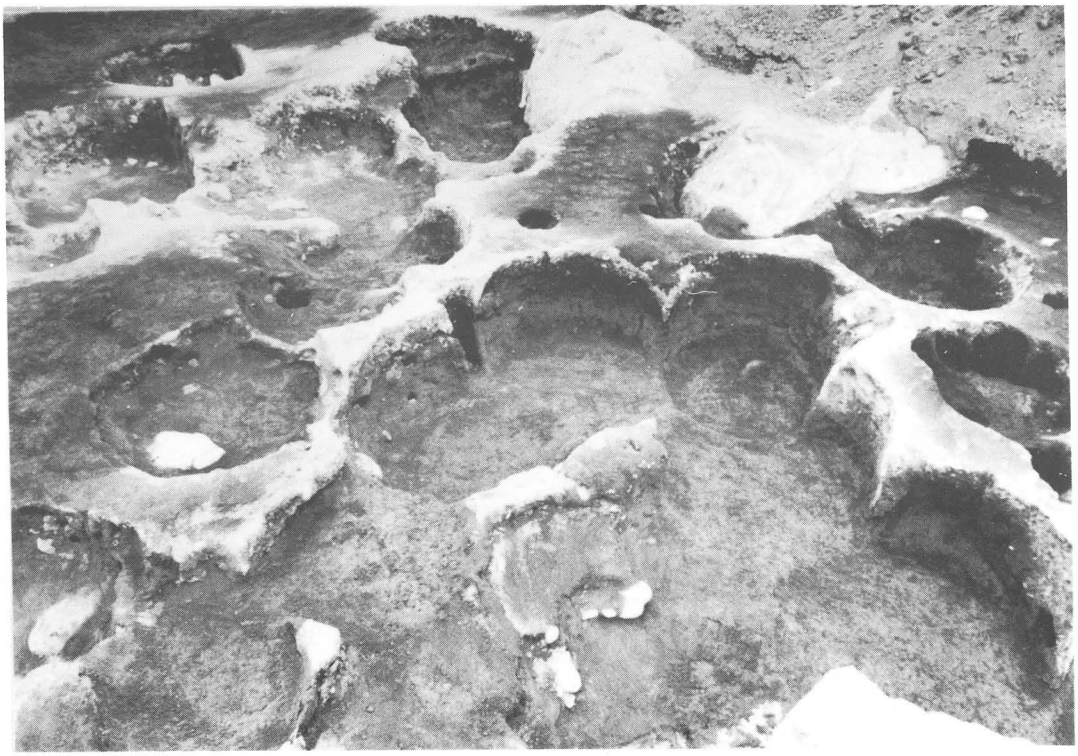
1.　土壙群発掘風景（東より）

図版34

1. 土 壙

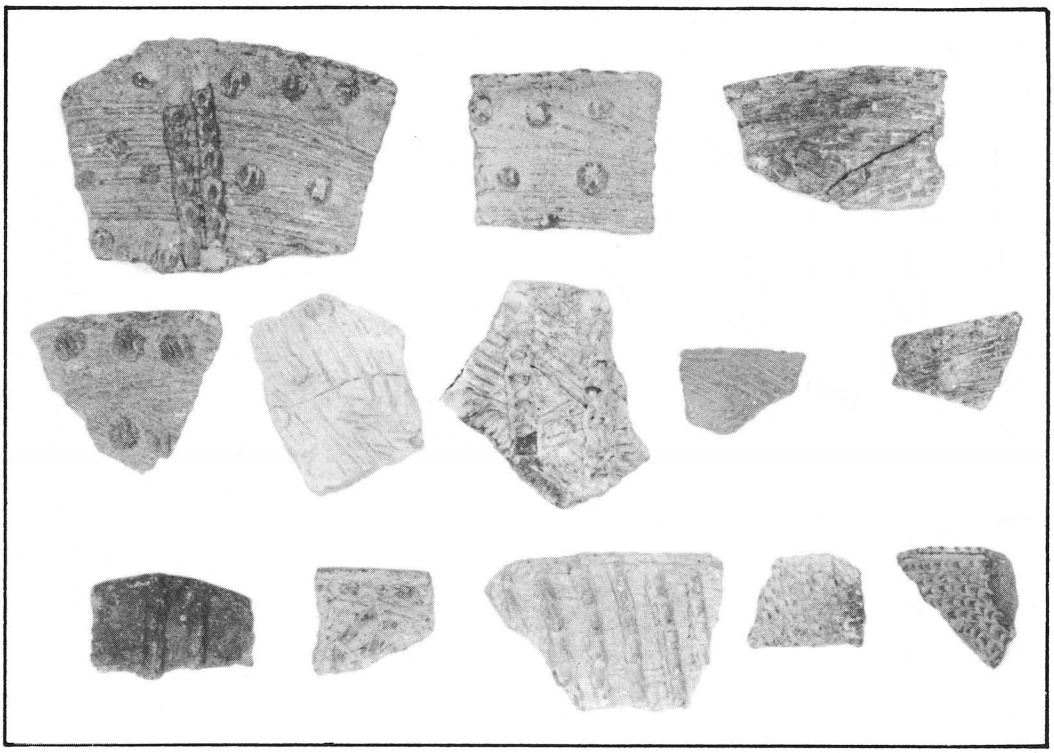


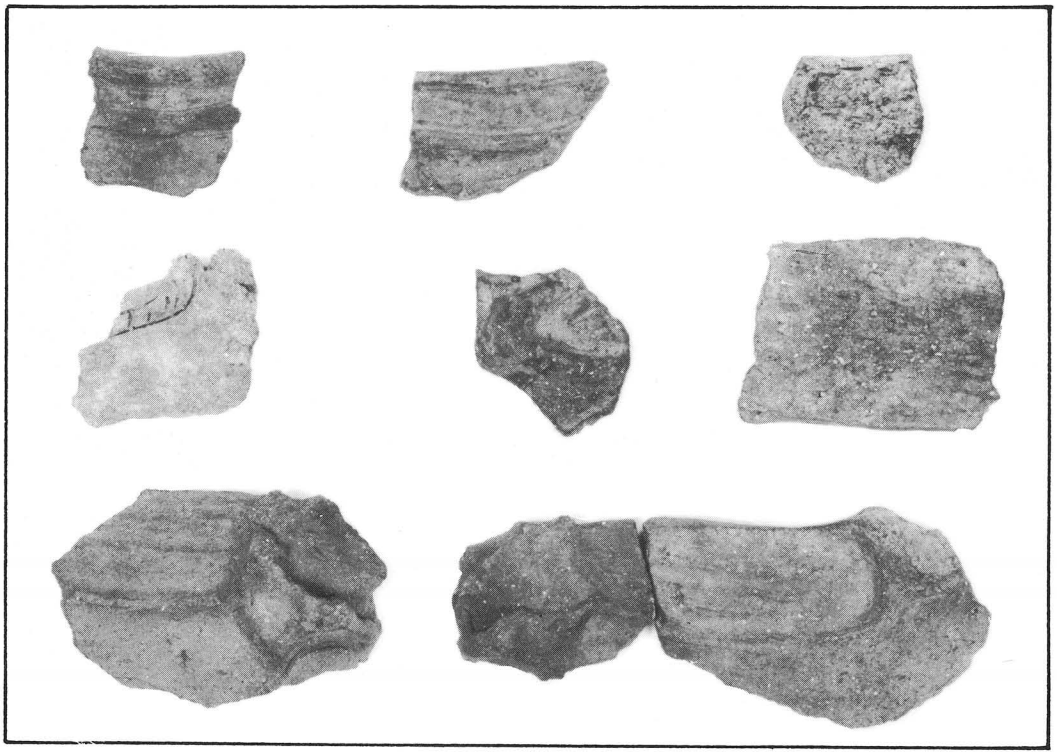
2. 土 壙



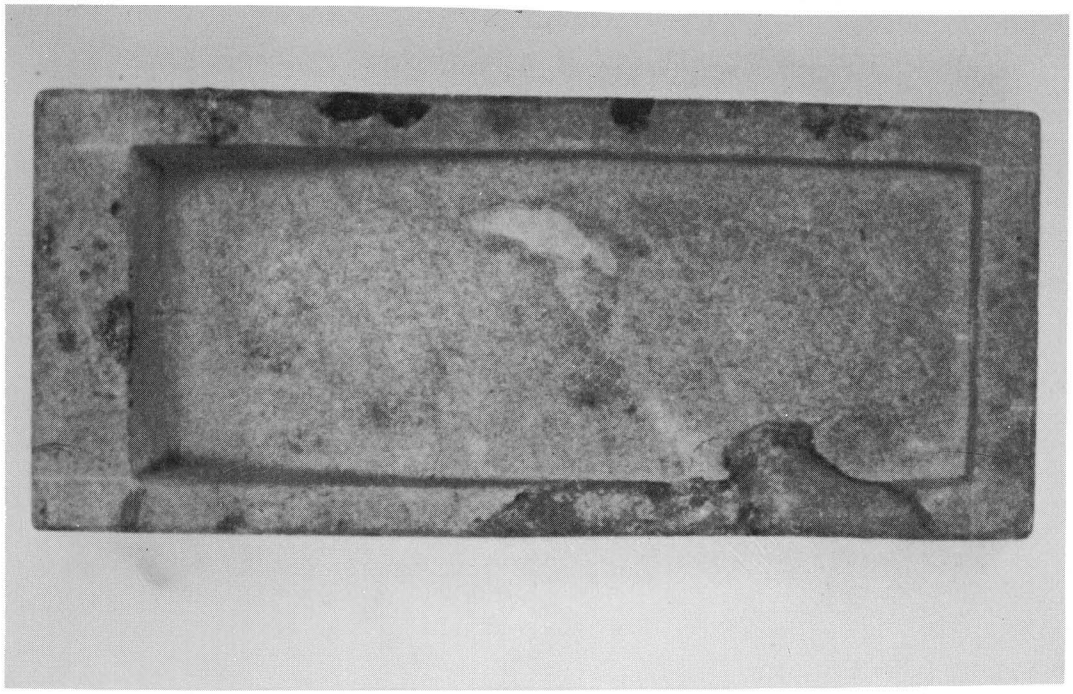
1. 土 壙

2. 土壙群及び2号住居址全景（南西より）



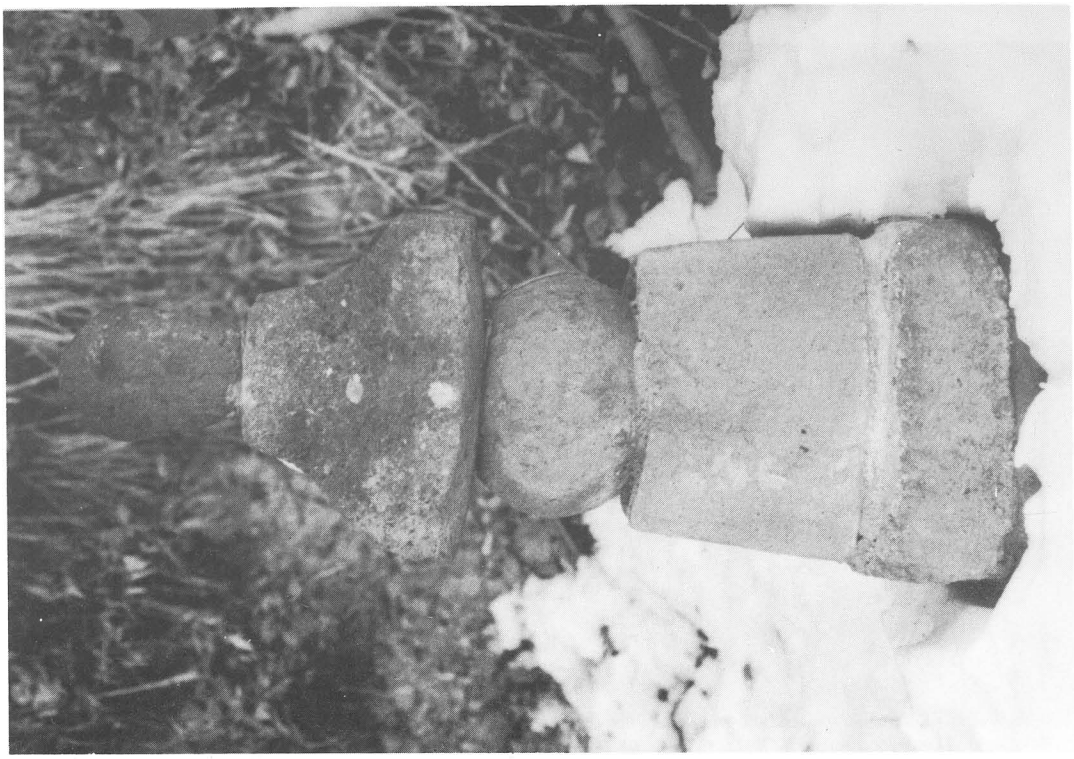


2. 出土遺物縄文時代後期後半

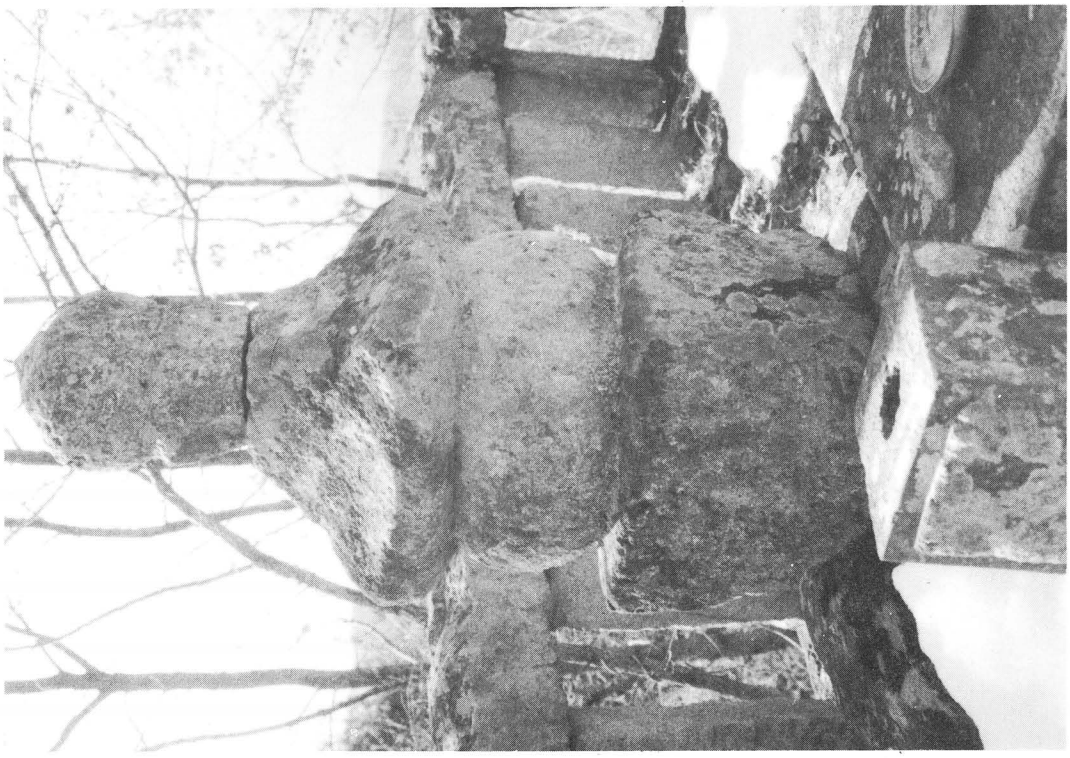


1. 出土遺物　硯

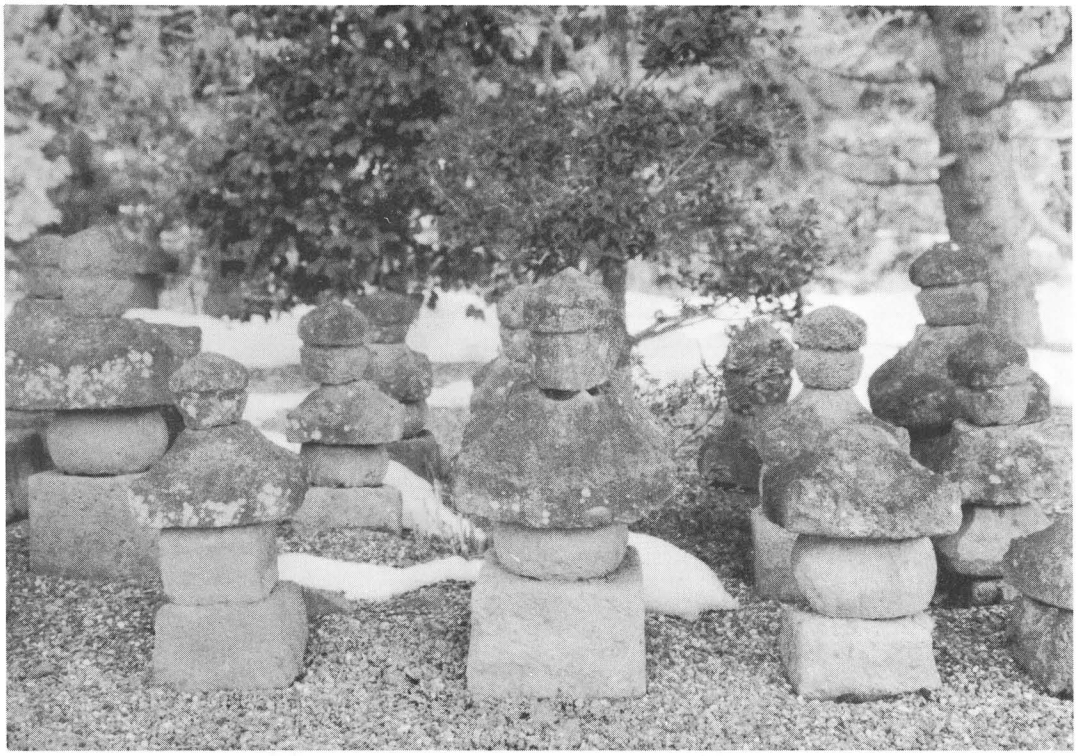
2. 出土遺物　五輪塔



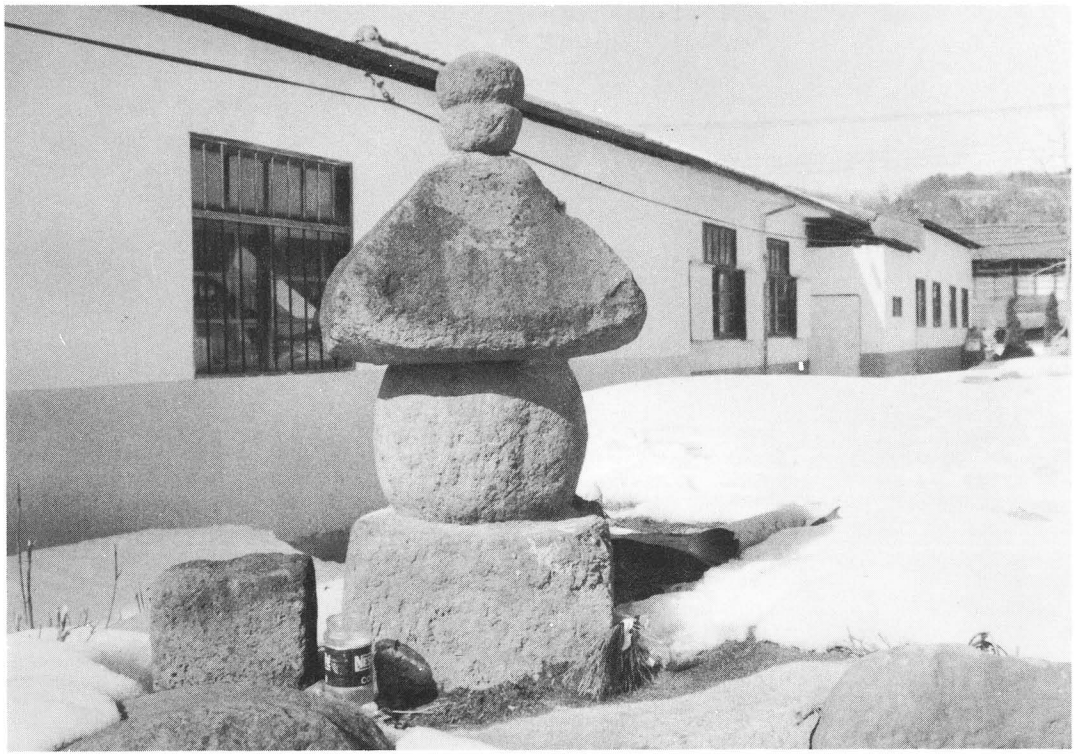
1. 正覚寺、五輪塔



2. 赤岡氏、五輪塔



1. 長泉寺、五輪塔



2. 塩川病院南、五輪塔

図版40

発掘調査参加者

昭和５９年３月２５日　印　刷
昭和５９年３月３１日　発　行

須玉町埋蔵文化財調査報告第２集

中尾城遺跡・塚田遺跡

発行所　　須玉町教育委員会